

2023 年 11 月

食料安全保障月報

(第 29 号)



令和 5 年 11 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 11 月食料安全保障月報（第 29 号）

目 次

概要編

I	2023 年 11 月の主な動き	1
II	2023 年 11 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国とブラジルの穀物輸出競争」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

	「『世界最大のシンクタンク』OECD が公表した農業分野の最新報告書から」	2 2
--	---------------------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の期末在庫量は前年度に比べ 17.5%増加
	＜カナダ＞	2023/24 年度の普通小麦、デュラム小麦の品質は良好
	＜豪州＞	2023/24 年度の小麦の収穫は、乾燥天候に恵まれ進展
	＜EU27＞	2023/24 年度の実産量は過去 5 年平均を上回る 133.6 百万トン
	＜中国＞	2023/24 年度の輸入量は前月予測から上方修正され 12.0 百万トン
	＜ロシア＞	2023/24 年度の実産量は前月予測から上方修正され 90.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023 年 7 月の黒海穀物イニシアティブ履行停止後も小麦輸出は継続 （参考）黒海穀物イニシアティブ履行停止後の輸出状況
2	とうもろこし	1 0
	＜米国＞	単収の引上げにより、生産量は史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の実産量は大豆等への転換により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の実産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上 2 番目
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の実産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 30.0%減
3	コメ	1 6
	＜米国＞	長粒種、中・短粒種ともに 11 月上旬で収穫が終了

<インド>	カリフ米の単収低下で前年度より減産も5年平均比で増加見込み
<中国>	一期作稲は収穫終了で豊作の見込み、南部二期作晩稲の収穫は進展
<タイ>	収穫期の雨季米は干ばつや豪雨で前年度より収量減少見込み
<ベトナム>	北部の雨季米は収穫中、南部は乾季米の播種を開始

II 油糧種子

大豆	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22
<米国>	単収の引上げを受け、生産量は0.7百万トン上方修正	
<ブラジル>	2023/24年度の生産量(CONAB)は前年度より5.1%増で史上最高	
<アルゼンチン>	2022/23年度は、干ばつによる減産を受け輸入が史上最高に	
<中国>	2023/24年度の生産量・消費量は史上最高	
<カナダ>	作付面積の増加により、生産量は前年度から2.4%増	

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24年度)・・・	28
(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	28
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)・・・・・・・・	29

特別分析トピック

「我が国と世界の砂糖をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：とうもろこしの収穫（ウクライナ・ポルタバ州、11月1日）
天候に恵まれ、品質は良好。単収は10トン/ヘクタール。

(概要編)

I 2023 年 11 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球ではとうもろこしや大豆等の作物が収穫期を迎えている一方、南米では大豆等が作付期から生育初期を迎えている。

品目別にみると、11 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の被害を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州やロシア等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 7 月 17 日にロシアが離脱を表明。EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産となるものの、米国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、現在作付けが行われている南米で増産となり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、エルニーニョ等の天候の影響を受け生産量が下方修正されており、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、9 月の 121.3 から、10 月（最新値）は 120.6 に下落（参考：2022 年 10 月 135.4、2021 年 10 月 133.2、2020 年 10 月 101.4）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値より約 2 割高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023 年 11 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の11月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から変わらず2,250万トン（対前年度比5%増）。とうもろこしは収穫期を迎え、生産量は前月から上方修正され2,950万トン（同9%増）。輸出量は黒海穀物イニシアティブの停止の影響はあるものの、小麦、とうもろこしとも前月から上方修正されそれぞれ1,200万トン（同36%減）、2,000万トン（同26%減）（参考1）。

一方、ウクライナ農業政策食料省の8月10日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ7,670万トンと、2022/23年度比で1%増となる見通し。他方で、ロシア侵攻以前において過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると28%減。

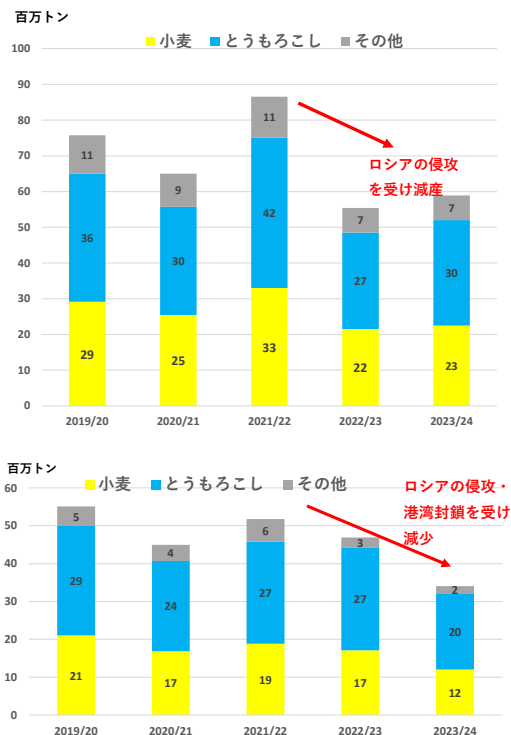
ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年11月10日時点で小麦は収穫が終了し、2,241万トンを収穫済み。とうもろこしは収穫期を迎え、同日時点で2,122万トン。

黒海穀物イニシアティブ停止後の動向（7月17日にロシア離脱で停止）

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、これまで穀物等3,283万トンが輸出された。しかし、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止され、その後、再開の目途は依然として立っていない。

一方、代替輸出ルートとして、ドナウ川沿いの運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。その他のルートについても港湾整備等が開始されているが、内陸の輸送コストが高い等の課題もあり、4者合意の下での輸出量全てを代替することは現実として難しい状況となっている。

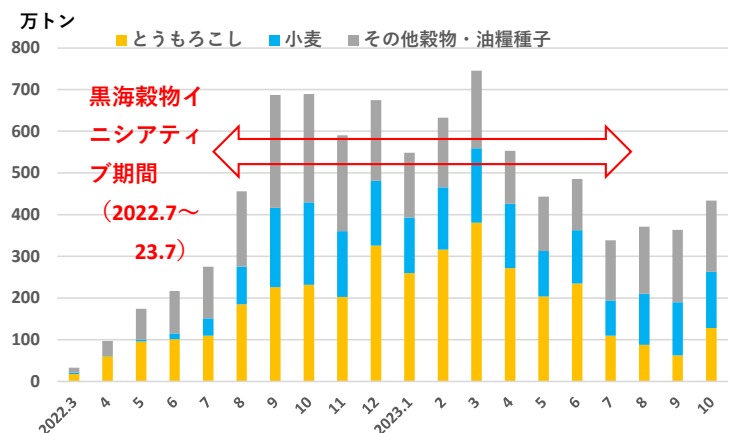
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.11）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022.8～23.10）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 ウクライナ：ゼレンスキー大統領は黒海の主導権をロシアから奪還と発言

「黒海穀物イニシアティブ」は、7月17日にロシアが履行停止を表明。それ以降、ロシア側は、イニシアティブと同時に締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」にある輸出への障害の除去が履行されていないとの従来の立場を繰り返してきた。しかし、ロシアの同イニシアティブへの復帰に向けた進展はなく、11月8日に、国連グテーレス事務総長は、黒海穀物イニシアティブの再開について努力しているが難しいと発言した。

このため、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルートの拡充を試みてきた。しかし、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このためウクライナは黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、8月以降運用が開始されている。

これらの代替ルートを利用した輸出に関し、港湾からの穀物や油糧種子の輸出量は、7～9月の毎月230万トン程度から、10月は310万トンまで増加した。黒海穀物イニシアティブの下での輸出数量を代替するまでには至っていないが、11月16日にはゼレンスキー大統領は、黒海の主導権をロシアから奪還したと発言した。

EU 向け輸出については、EU による東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止措置が9月15日以降解除されたが、トランジットを除き、ポーランド、ハンガリー、スロバキアは独自の輸入規制を継続している。一方、ルーマニアは10月13日、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可することとなった。ポーランドでは特に反発が強く、11月6日には、抗議活動で国境検問所が封鎖された。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討されている。(France Agrimer 他より)

- 1 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒ウクライナ・モルドバ・ルーマニアに輸出回廊が完成予定。輸送能力は従来の3倍に。
- 2 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
ラトビア・リガ港にウクライナ産菜種到着。
- 3 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



2 アルゼンチン：2023/24年度の小麦生産は乾燥等で下方修正の見通し

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023. 11. 16）によれば、2023/24 年度の小麦は収穫が開始され、収穫進捗率は 20. 5%となっている。生産量は、前年度の乾燥の影響が今年度も継続しており、11 月中旬には乾燥に霜の影響も加わり 10 月から 150 万トン下方修正され 1, 470 万トンの見通し。しかしながら、干ばつ被害が甚大であった前年度（1, 220 万トン）を 20%上回る見通し。

とうもろこしについては、作付けが本格化しているが、作付けが降雨不足のために遅れており、作付進捗率は 25. 1%となっている。作付予定面積は 710 万ヘクタールと前年度並みとなっている。

大豆については、11 月上旬の降雨を待って作付けが開始され、作付進捗率は 18%となっている。作付予定面積は 1, 730 万ヘクタールと前年度より 7%増となっている。

一方、輸出政策に関し、大豆は「最大 33%」、小麦及びとうもろこしは「12%」の輸出税がそれぞれ設定されているが、11 月 19 日の大統領選挙の結果、これまでの左派政権に代わり右派のミレイ氏が当選しており、今後の輸出税への影響など、注視が必要。

3 ロシア：穀物豊作も輸出枠 2, 400 万トンの設定の可能性

米国農務省の 11 月の見通しによれば、生産量は前月から上方修正され、穀物全体で 13, 291 万トンと、過去最高の前年度を 2. 8%下回るものの、史上 2 位となる見通し。このうち、小麦については単収及び収穫面積とも上方修正され、生産量は前月から 500 万トン上方修正され 9, 000 万トンとなり、過去最高の前年度（9, 200 万トン）には及ばないものの史上 2 位の高水準。

とうもろこしについても、1, 600 万トン（対前年度 1%増）で史上最高、大麦は 2, 050 万トン（対前年度 5%減）で史上 3 位と高水準となる見込み。

油糧種子では、ひまわり種の生産量が 1, 750 万トン（対前年度 8%増）と史上最高となる見込み。また、大豆についても、単収が前月見通しから上方修正され、生産量が史上最高の 620 万トン（対前年度 3%増）となる見込み。

輸出量については、穀物全体で 6, 141 万トンと前年度を 6%上回り史上最高となる見通し。うち、小麦は、潤沢な期首在庫と今年度の豊作を反映し、前年度を 5%上回り史上最高の 5, 000 万トンの見通し。

油糧種子では、ひまわり油の輸出が 428 万トン（対前年度 8%増）で史上最高の見通し。また、大豆は国内需要が生産量を上回り輸入（150 万トン）が多くなっているが、極東産については輸出量は 145 万トンの見通しで、その多くは隣接する中国に輸出している。輸出量のうち中国向けが 8 割以上を占める。

なお、報道によると、ロシア農業省は 11 月 8 日、2023/24 年度の穀物輸出枠について、2024 年 2 月 15 日から 6 月 30 日まで穀物全体で 2, 400 万トンに設定する可能性があるとのこと。2023 年は同時期 2, 550 万トンの輸出枠が設定されていた。ただし、ロシアの収穫・輸出は 7－12 月が最盛期であり、前半の同時期はもともと輸出の端境期で、2023 年も輸出枠の未消化があった。

また、ロシアのパトルシェフ農相は、11 月 17 日、アフリカ 6 か国向けの最大 20 万トンの穀物を、ブルキナファソ及びソマリア向けに無償での供与が開始され、エリトリア、ジンバブエ、マリ及び中央アフリカ向けも間もなく実施されると発言した。

Ⅱ 2023 年 11 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、10月末、200ドル/トン台前半で推移。11月に入り、ドル安による米国産の国際競争力の高まりやアルゼンチン産の生産量の減少見込みから210ドル/トン台後半に値を上げたものの、米国農務省需給報告で世界及び米国の期末在庫量が上方修正されたことや米国産への低調な輸出需要から値を下げ、11月中旬現在、200ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、10月末、180ドル/トン台後半で推移。11月に入り、米国の収穫圧力等から180ドル/トン台半ばまで値を下げたものの、ブラジルの乾燥懸念を受け180ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、11月の米国農務省需給報告での米国産の生産量の上方修正から180ドル/トン台半ばまで値を下げたものの、ブラジルの乾燥による天候不安を受け180ドル/トン後半まで値を上げた。その後、ブラジルの降雨予報を受けて値を下げ、11月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

コメは、10月末、600ドル/トン台前後で推移。11月に入り、インドの非バスマティ米の精米の輸出禁止措置（7月20日～）に加え、ミャンマーの暫定的輸出規制（9月1日～10月15日）でタイ産米等への需要が集中し、価格が高騰したことによる需要停滞や新穀の流入等から値を下げ、11月中旬現在、590ドル/トン台後半で推移。

大豆は、10月末、470ドル/トン台前半で推移。11月に入り、ブラジルの乾燥等を受け490ドル/トン台後半までに値を上げた。その後、11月の米国農務省需給報告での米国産の生産量の上方修正から480ドル/トン台後半まで値を下げたものの、ブラジルでの乾燥懸念等により500ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、ブラジルの降雨予測や原油安等から値を下げ、11月中旬現在、490ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より1.8%増の27.99億トン。消費量は、前年度より1.3%増の28.05億トンとなり、3年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り 27.4%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、27.99億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.05億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、とうもろこしで増加も、小麦、コメで減少し、穀物全体で減少し、4.96億トンの見込み。

期末在庫量は、7.67億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は11月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

Ⅳ 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.61億トン。消費量は前年度を上回り 6.44億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.4%となる見込み。

（注：数値は11月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：米国とブラジルの穀物輸出競争

近年、ブラジルのとうもろこし及び大豆の生産量が大きく増加し、2022/23年度はいずれも史上最高を更新。大豆では生産量・輸出量とも米国を上回り、とうもろこしでも2022/23年度以降、輸出量で米国を上回り世界の輸出国となった。一方、米国は、大豆は前年度より減産も、とうもろこしは2023/24年度は史上最高の豊作となる見通し。両国の動向に加え、昨年11月以降ブラジル産とうもろこしの輸入を開始した中国の輸入動向をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、ブラジル大豆は2023年10月から2024年9月。

国や作物によって異なる(品目別需給編P.28参照)。

1 ブラジルのとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

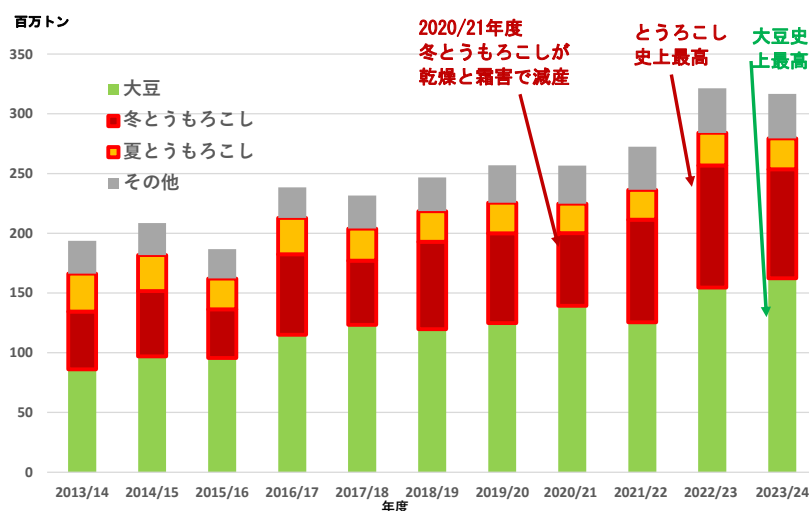
(1) 生産動向

ブラジル穀物供給公社
(CONAB) の11月需給見通しによれば、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は、収穫面積が増加するものの、天候に恵まれた前年度より単収が低下することから、前年度より1.5%減の3億1,671万トンとなる見通し。現在、夏とうもろこし、大豆等夏作物が作付期から生育初期を迎えている。

このうち、とうもろこしについては、2022/23年度の収穫が終了し、生産量の8割近くを占める冬とうもろこしの面積・単収とも大幅に増加したことを受け、全体で史上最高の1億3,176万トンとなった。2023/24年度の冬とうもろこしは、大豆収穫後の2月以降に作付けされるが、中西部は乾燥、南部は降雨過多による大豆の作付け遅延に伴い、大豆の収穫と冬とうもろこしの作付けが遅れ、雨季における十分な降雨の恩恵を受けられないとの懸念がある。生産量は大豆と比べ収益性が悪いことから作付面積が減少し、1億1,907万トンと前年度比9.6%減の見通し。

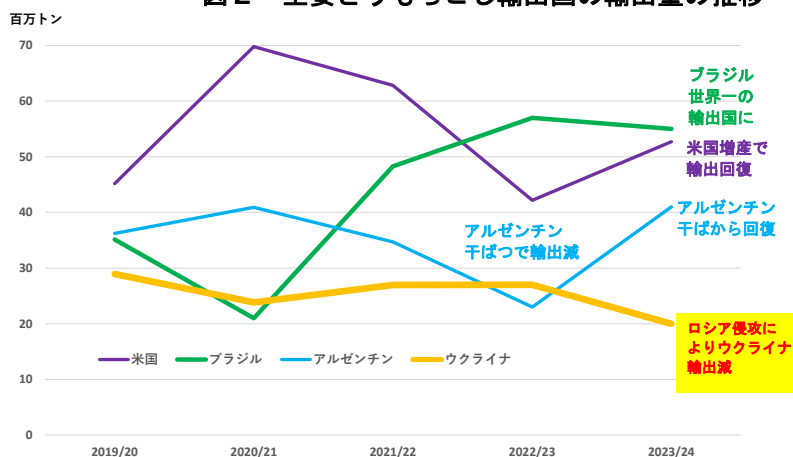
大豆については、2022/23年度は天候に恵まれ史上最高の1億5,461万トンとなった。2023/24年度大豆は、パラナ州等南部で降雨過多、マットグロッソ州等中西部で降雨不足となり、マットグロッソ州では11月3日時点の作付け進捗率は92%と前年度及び平年を4%下回っている。しかしながら、とうもろこしより収益性が高いことから作

図1 ブラジルの穀物・油糧種子生産量の推移



出典：ブラジル食料供給公社「GRAOS」(2023.11)による。

図2 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.11)による。

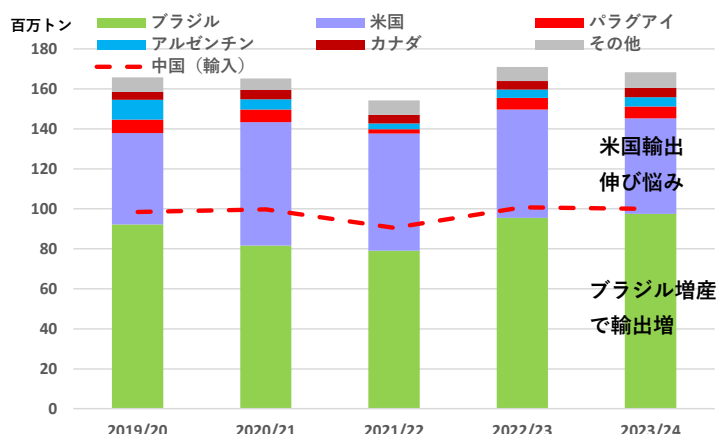
付面積が増加するため、生産量は1億6,242万トンと前年度比5.1%増で史上最高を更新する見通し。

(2) 輸出動向

米国農務省（USDA）の11月見通しによれば、2022/23年度のうち、とうもろこし輸出は、乾燥の影響を受けた米国及びアルゼンチンの減産や、ロシアの侵攻を受けたウクライナの輸出の制約に加え、ブラジルで史上最高の豊作となったことから、米国を抜き世界1位の輸出国となる見通し。2023/24年度についても、輸出量は減産見通しを受け前年度より4%減少するものの、前年度からの持ち越し在庫を抱えていることから、5,500万トンで世界1位の座を維持する見通しである。

大豆輸出に関しても、2012/13年度以降世界1位の座を維持しており、2023/24年度も増産が見込まれ、中国の輸入増も見込まれることから、輸出量も9,750万トン（対前年度2%増）となる見通し。

図3 主要大豆輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.11）による。

2 米国のとうもろこし・大豆の生産・輸出動向

(1) 生産動向

USDAの11月需給見通しによれば、2023/24年度の主要な穀物・油糧種子のうち、小麦及びとうもろこしは増産となる一方、大豆は減産と明暗が分かれた。

小麦については、収穫はほぼ終了。生産量については、デュラム小麦は対前年度比7%減の161万トンと減産も、デュラム小麦を除く春小麦は5%増の1,374万トン、冬小麦は13%増の3,396万トンとなり、合計で前年度比10%増の4,931万トンとなった。収穫面積の増加に加え、単収が前年度より増加したことが要因。

特にブラジルと輸出が競合しているとうもろこしは、現在収穫期の終盤を迎えているが、単収が前月見通しから上方修正され対前年度0.9%増となったことを受け、過去最高だった2016/17年度を上回り、史上最高の3億8,697万トン（対前年度11%増）の見通し。とうもろこしは他の作物と比較して肥料投入量を多く要するが、肥料価格が前年度と比較して落ち着いた動きとなっていることを受け、とうもろこしを選択する農家が増えたこともあり、収穫面積が10%増加するとともに、十分な肥料が投入できたことで単収の上昇にも貢献しているとみられる。

一方、大豆も収穫期の終盤を迎えているが、単収が前月見通しから上方修正され前年度よりは増加するものの、とうもろこしなど他の作物への作付け転換により収穫面積が4%減少することを受け、生産量も1億1,239万トン（対前年度3%減）に留まる見通し。

(2) 輸出動向

USDAの11月見通し

によれば、2023/24年度の小麦の輸出量は、増産にも関わらず1,905万

表 米国の過去10年間の小麦、とうもろこし輸出国の輸出量の推移

	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	2023/24	対前年度比
小麦	55.1	56.1	62.8	47.4	51.3	52.6	49.8	44.8	44.9	49.3	9.8
とうもろこし	361.1	345.5	384.8	371.1	364.3	346.0	358.4	382.9	348.4	387.0	11.1
大豆	106.9	106.9	116.9	120.1	120.5	96.7	114.7	121.5	116.2	112.4	▲3.3

赤太字は過去10年で一番少ない年、青太字は過去10年で一番多い年、赤、青細字はそれぞれ2番目

出典：米国農務省「PS&D」（2023.11）による。

トン（対前年度8%減）と減少する見通し。ロシア産や豪州産などと比べて米国産小麦の価格が高く、輸出競争力が乏しいのが要因とみられる。

とうもろこしの輸出量は、増産による供給増を受け、不作だった前年より大きく増加し5,271万トン（対前年度25%増）となるも、ブラジルとの輸出競争もあり、豊作だった2年前の6,280万トンを下回る見通し。

大豆の輸出量は、減産に加え、ジェット燃料等のバイオ燃料需要の増加により国内需要量が史上最高となる見通しを受け、輸出量は減少し、4,776万トン（対前年度12%減）となる見通し。

ここ数年の米国の穀物等輸出については、小麦についてはロシア、とうもろこし及び大豆についてはブラジルと比較していずれの品目も輸出競争力が乏しくなっていることもありシェアで差がついている。

3 中国の輸入動向と世界の穀物貿易への影響

（1）近年の穀物・大豆の輸入動向

USDAによれば、中国による大豆輸入については、2000年以降2018/19年度まで概ね右肩上がりが増加してきた。2019/20年度は、アフリカ豚熱発生の影響もあり輸入需要が一時減少したものの、その後豚肉生産の回復に伴い、最近5年間の大豆輸入量は1億トン前後で推移している。

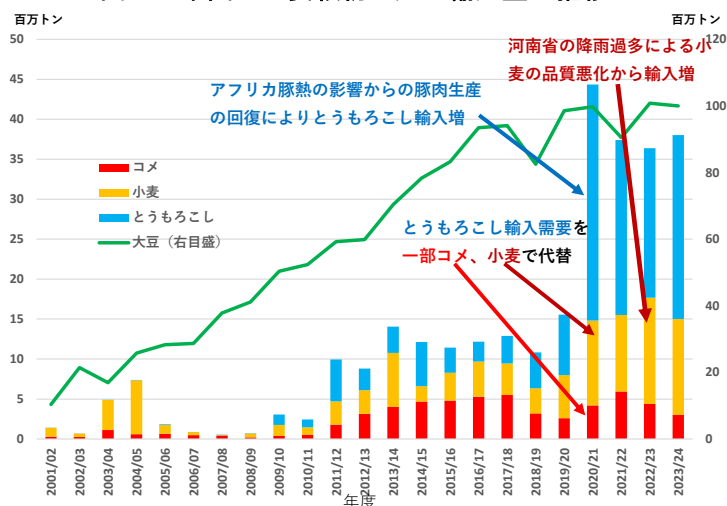
とうもろこし輸入については、アフリカ豚熱の影響が落ち着き豚肉生産が回復した2020/21年度以降、輸入量は大幅に増加し、最近4年間は2,000万トン前後の輸入量となっている。とうもろこしの需要増に伴い価格が高騰したため、飼料用の代替として小麦や碎米などのコメについても輸入量が増加した。なお、とうもろこしに関しては、従来からウクライナ産を輸入してきたが、前年2月のロシアのウクライナ侵攻を受け、ブラジル産の輸入を始め輸入先を多角化しており、ブラジル産については、2022/23年度の冬とうもろこしの収穫が開始された本年7月以降、輸入が増加している。

小麦についても、2023/24年度産の河南省での降雨過多による国内産の品質への影響を受け輸入量が増加しており、豪州産に加え、蛋白含有率の高いカナダ産等の輸入が増えている。

（2）ブラジル産の輸入拡大

中国は輸入先の多角化のために、特に近年、ブラジル産穀物の確保を進めている。前年から輸入を開始したとうもろこしはもとより、大豆についても全輸入量の半分以上をブラジルから輸入している。さらに、穀物等の輸入だけでなく、中国企業によるブラジル農家への資金貸付けや、安定的な輸入の確保のためサントス港の施設や本年7月に着工した東西鉄道などインフラ部分への投資なども行っている。米中関係の動向等によるが、中国は今後もブラジルの農産物の増産に伴い、ブラジルからの調達を増加させていくのではないかとみられる。

図4 中国の主要穀物・大豆輸入量の推移



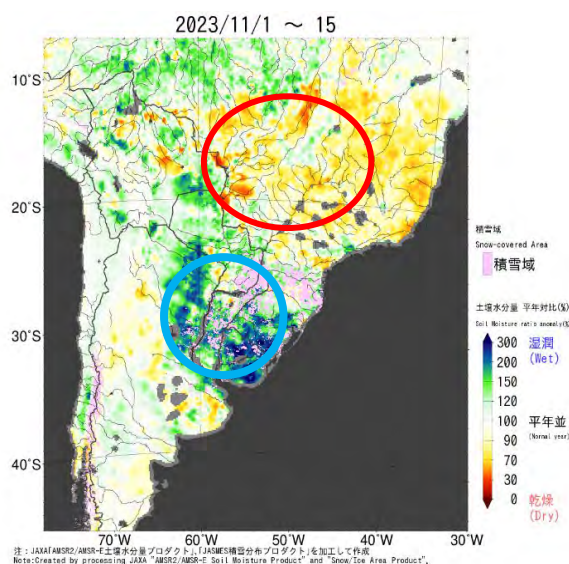
出典：米国農務省「PS&D」（2023.11）による。

(3) 最近の動き

前年2月のロシアによるウクライナ侵攻や、本年7月17日の黒海穀物イニシアティブの停止に加え、10月7日にはイスラム組織ハマスとイスラエルとの紛争が発生し、中東情勢も緊迫化している国際情勢の中、報道等によると、中国は8月上旬には今まで規制していた豪州産大麦の輸入制限措置を解除した。更に10月中旬に北京で開催された一帯一路に関する会合へのロシア・プーチン大統領の出席に伴い、中国の国営企業とロシアのノボシビルスクの企業との間で、シベリア、極東地域産の穀物の輸入（最長12年間で計7,000万トン）について合意した。加えて、同時期に米国アイオワ州で開催された米中持続的農業貿易フォーラムにおいて10億ドル単位の米国産農産物の買付け契約に合意した。対象品目は大豆、とうもろこし、小麦及びソルガムとされている。今後の米国産の輸入については米国産の価格競争力や米中関係の動向等にもよるところがあり注視が必要である。

シカゴ相場の小麦やとうもろこし、大豆価格に関しては、現状では、米国がとうもろこしや大豆の収穫期を迎えていることに加え、ロシアの小麦輸出、ブラジルのとうもろこし輸出が好調なことを受けて、落ち着いた動きをみせている。しかしながら、エルニーニョ現象の影響を受け、ブラジル産大豆の作付けが主産地の中西部のマットグロッソ州の降雨不足で遅れており、豪州産小麦についても降雨不足で過去3年間の豊作と比較して減産が見込まれている。今のところ、穀物のシカゴ相場は落ち着いた動きをしているが、中東情勢の影響を受けて原油価格が高騰した場合、バイオ燃料向け穀物・大豆等への需要が増加し、穀物相場へ影響する可能性もあることから、今後とも動向に注視が必要である。

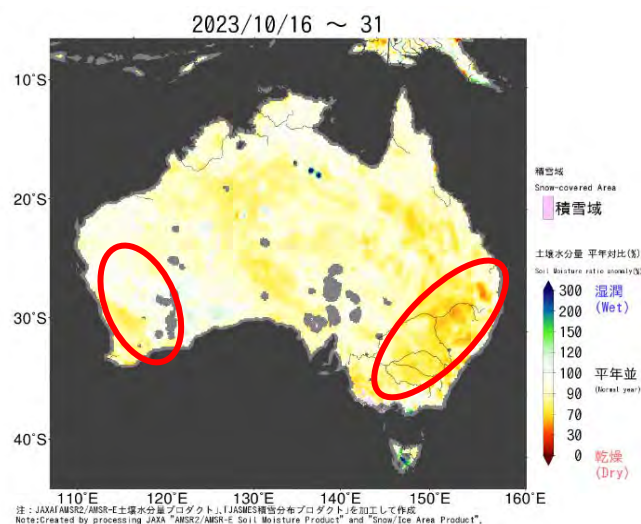
図5 11月前半のブラジル中西部の
土壌水分量の平年対比



大豆・とうもろこし主産地の中西部（赤丸）で
平年より土壌水分が少ない

ブラジル南部からアルゼンチンにかけては
降雨過多（青丸）で平年より土壌水分多い

図6 10月後半の豪州の
土壌水分量の平年対比



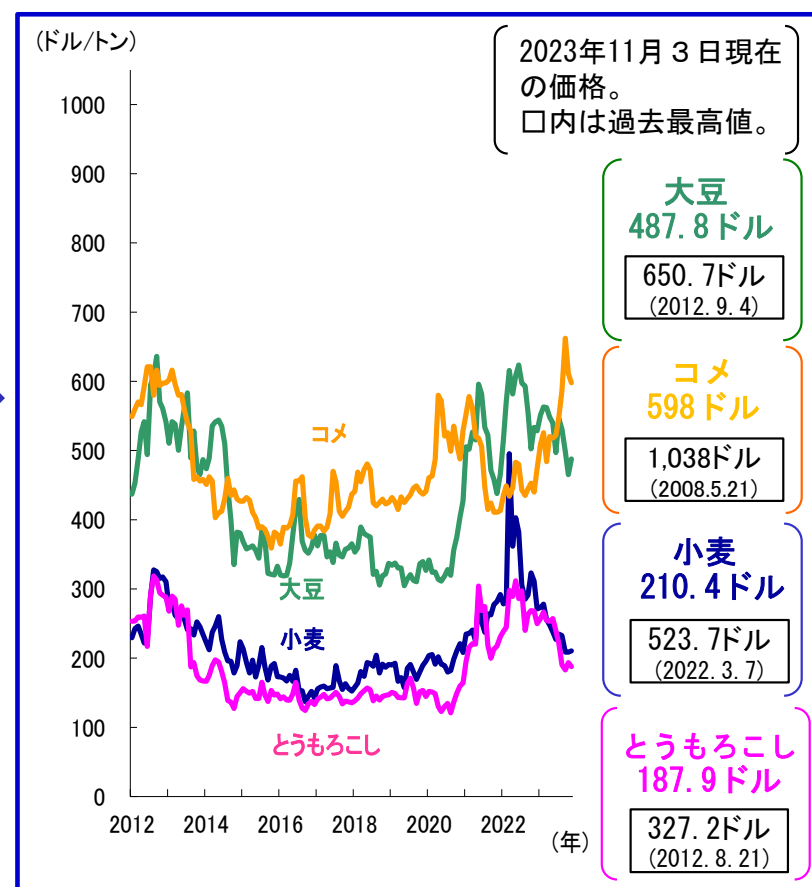
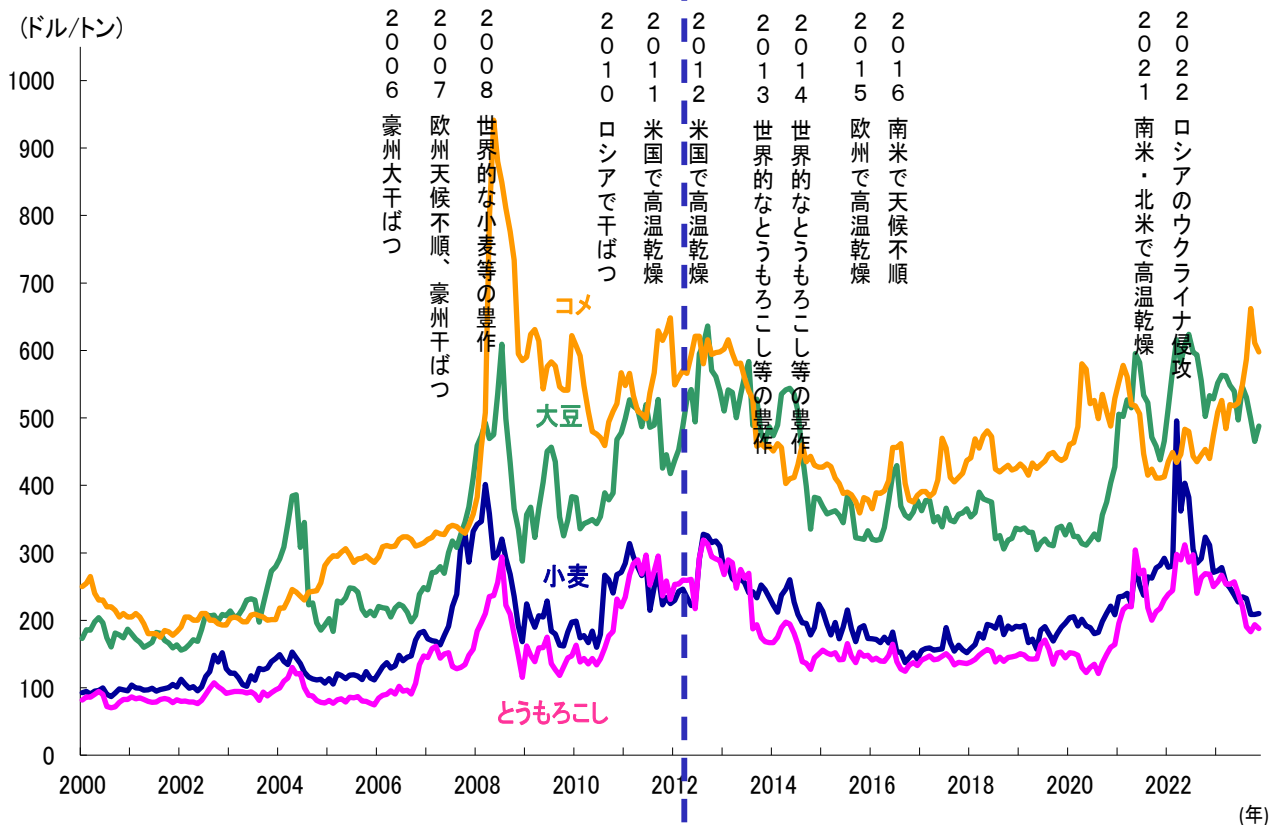
(JASMAI : <https://jasmai.maff.go.jp/>)

小麦主産地（赤丸）で平年より土壌水分が少ない。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増、2023年7月からのインドの輸出規制の強化から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



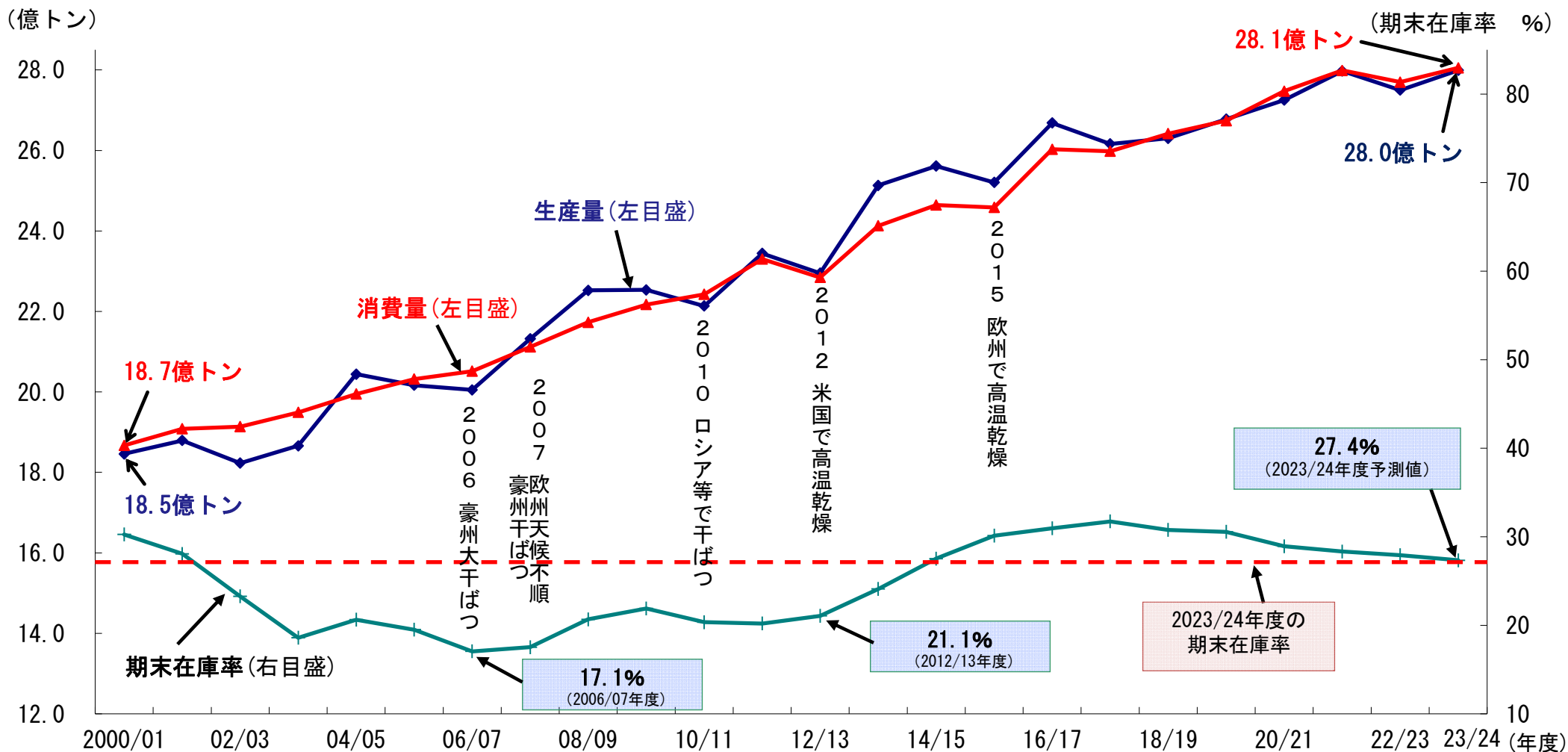
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.4%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

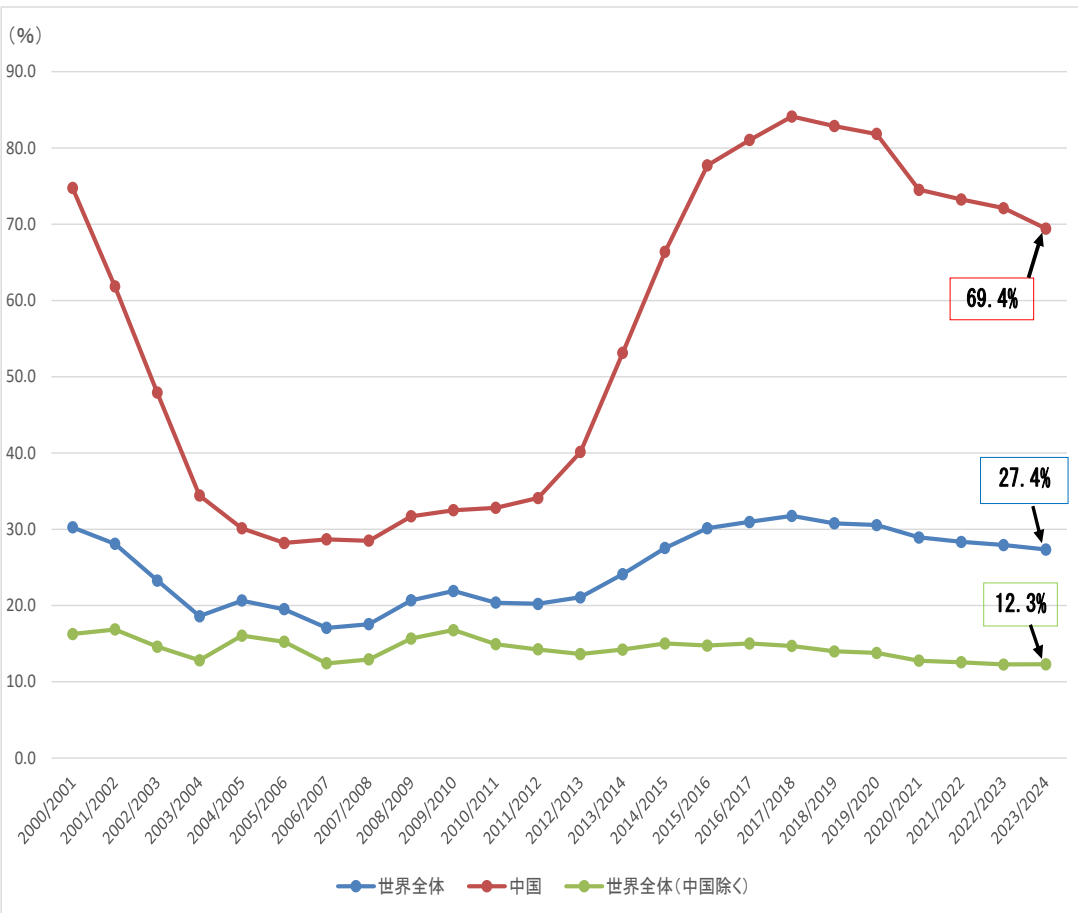


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2023)、「PS&D」

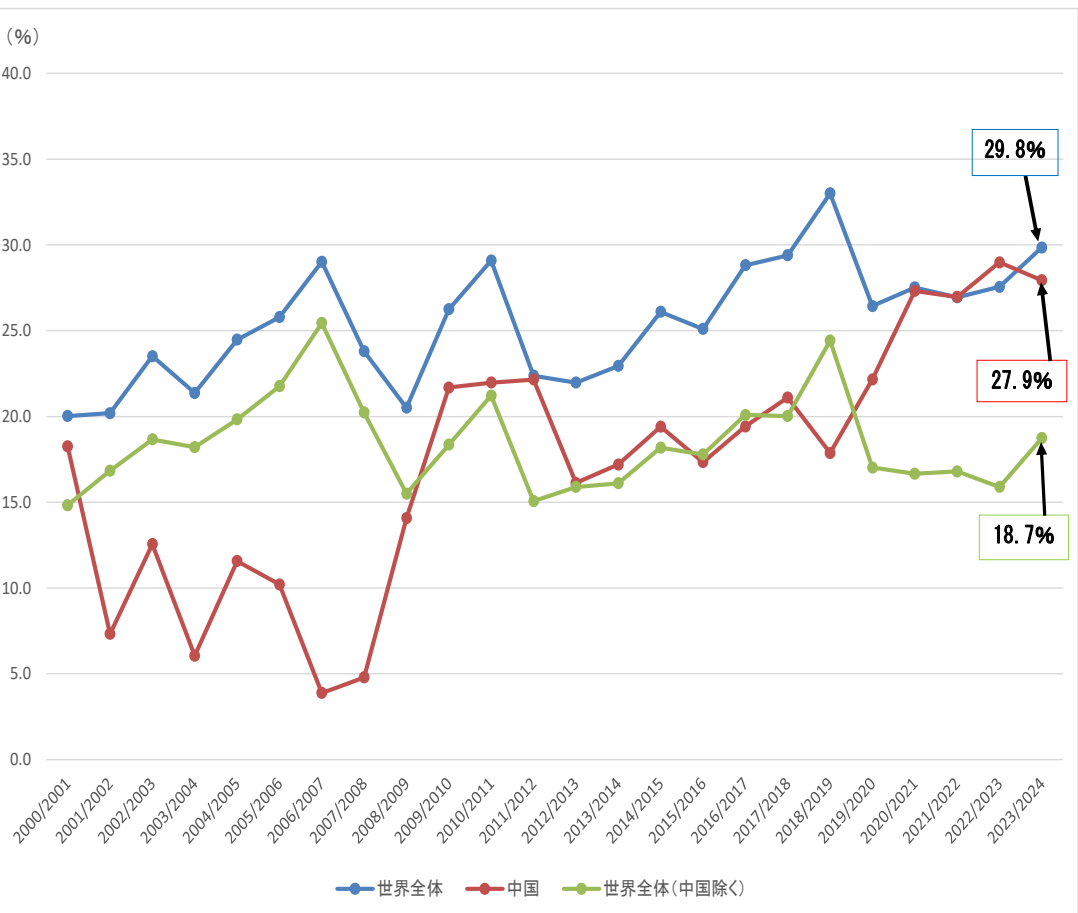
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 9, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

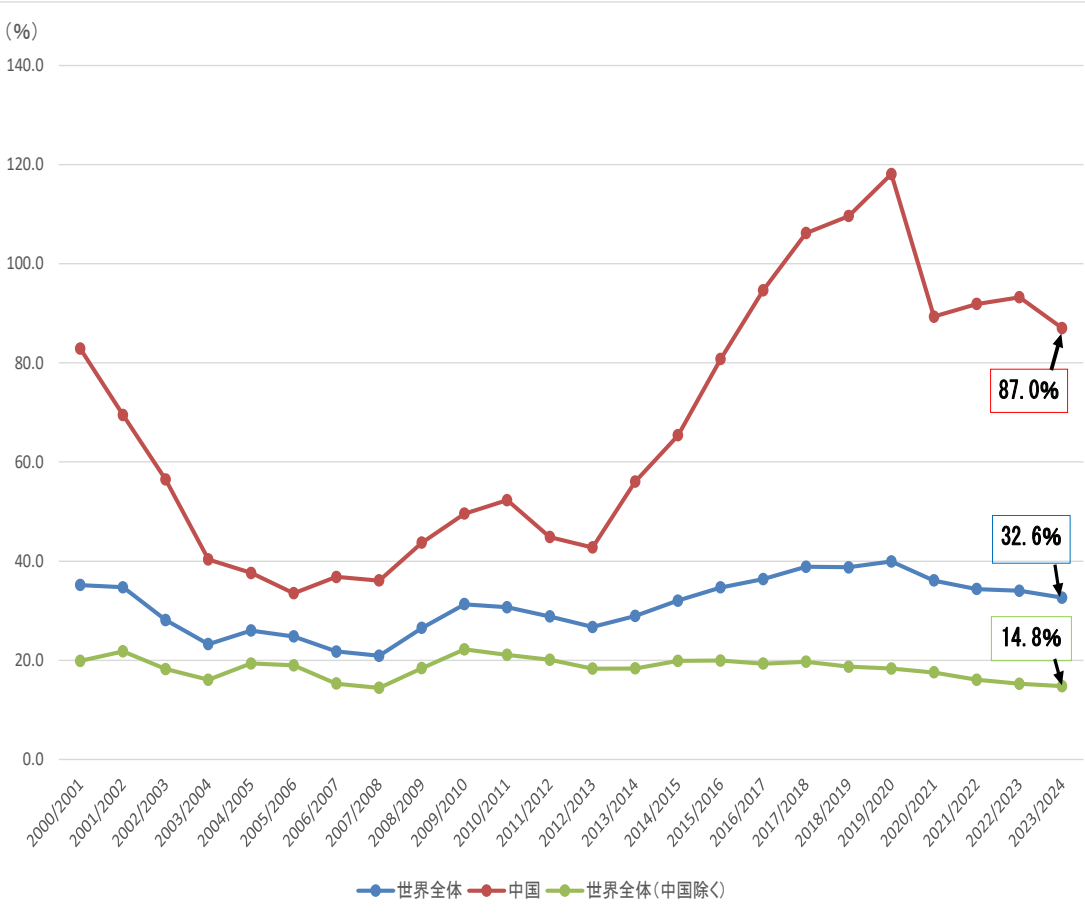
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

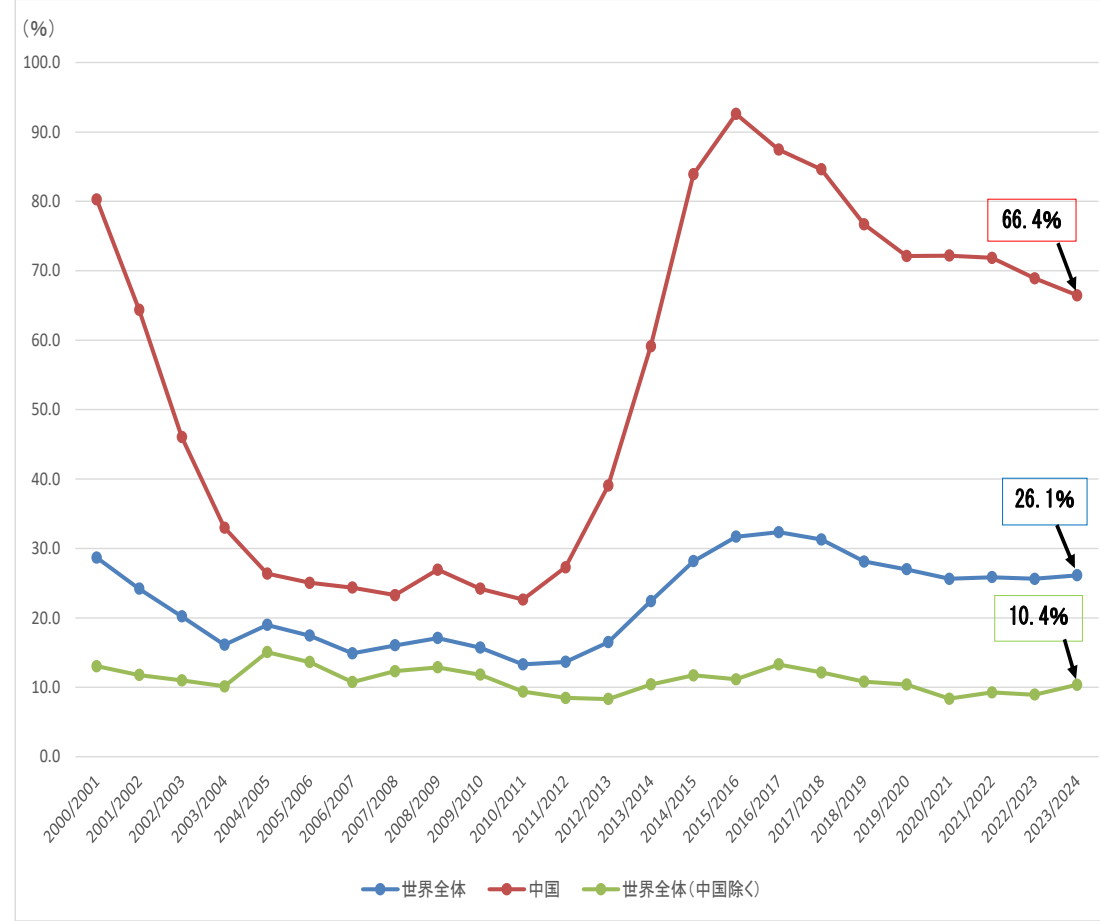
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



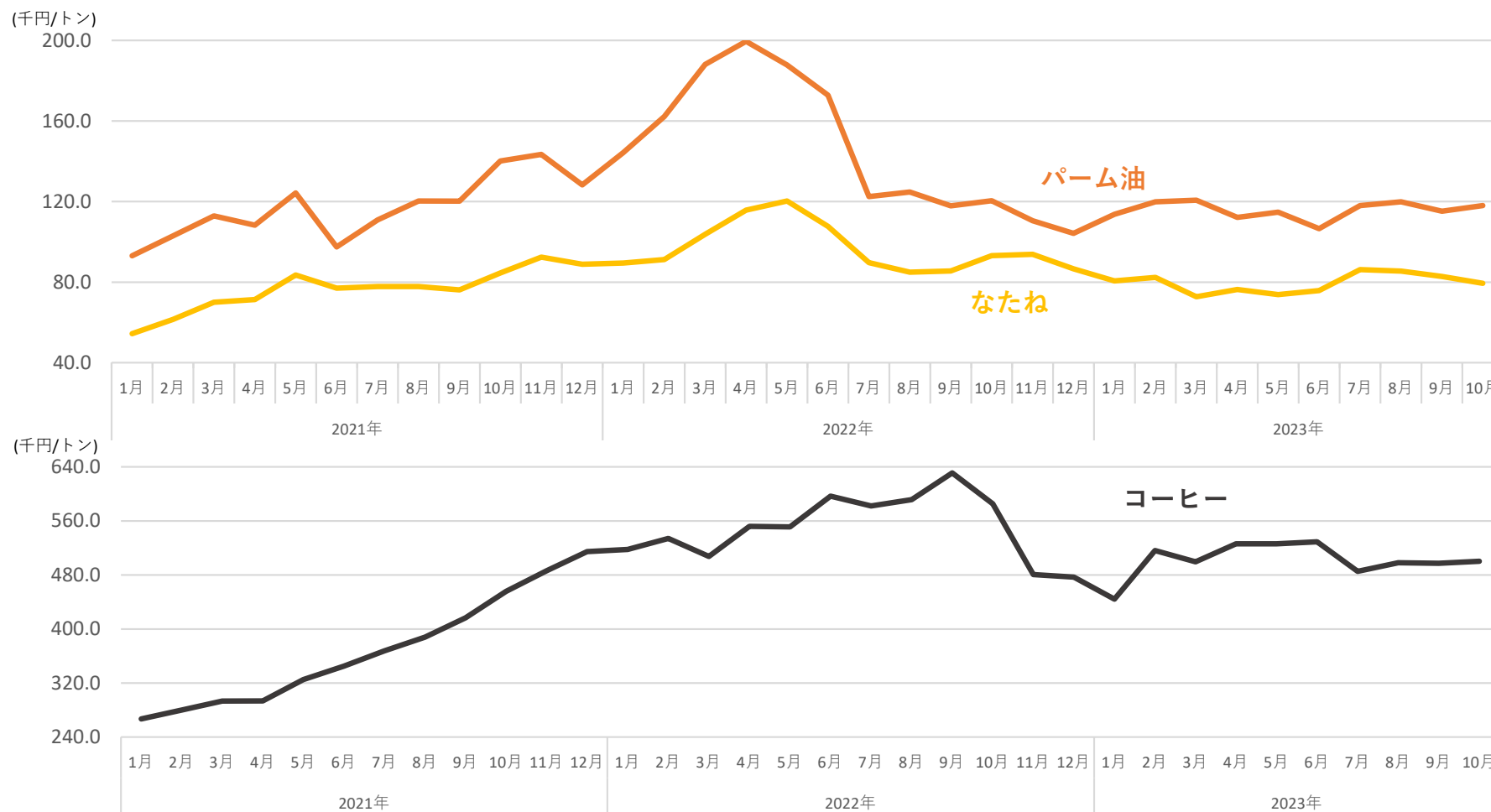
○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 9, 2023)
 注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100
 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年11月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
118.0 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
79.4千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

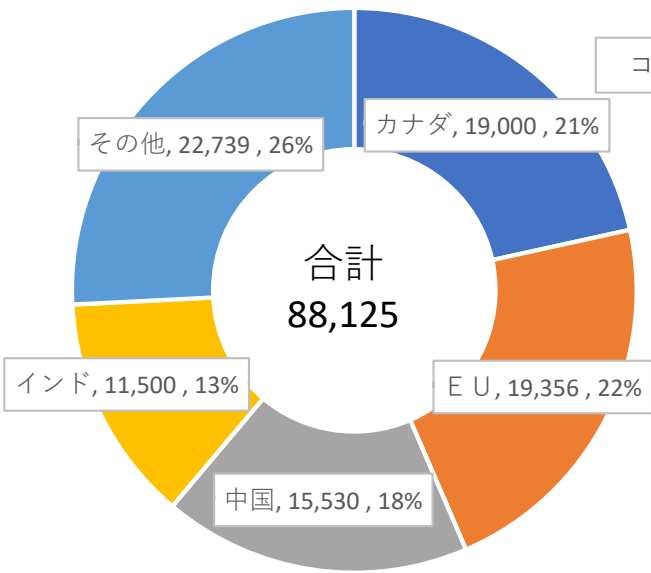
コーヒー
500.3千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

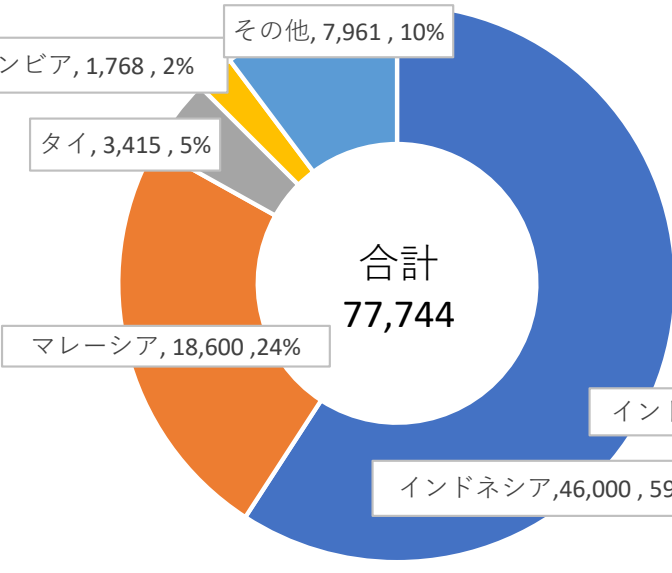
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



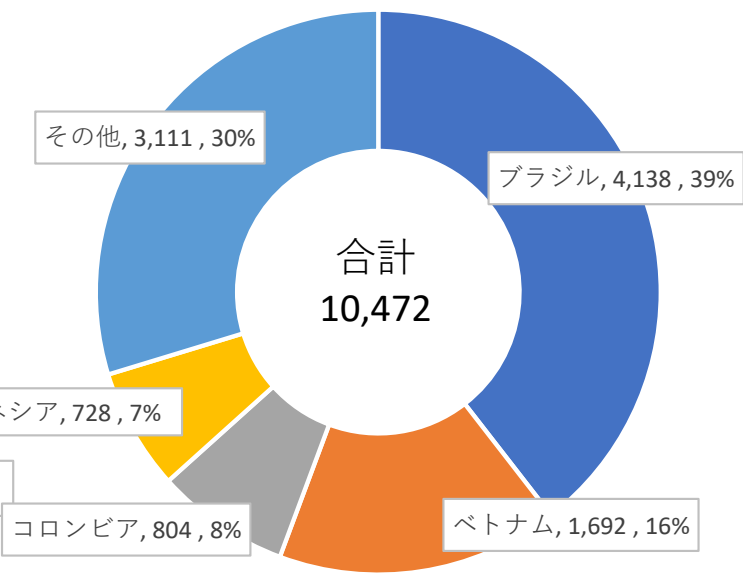
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4		
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9		
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0		
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4		
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒ－

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		
コヒ	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3		
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6		
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5		

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒ－機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年10月の国内の加工食品の消費者物価指数は110.8～156.6（前年同月比で-2.3%～15.5%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和5年5月～令和5年10月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	115.3	115.0	121.3	122.9	122.5	122.7	7.9%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	111.4	124.3	125.5	125.8	123.3	125.7	11.9%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	114.6	115.2	115.1	115.9	116.3	117.2	8.2%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	164.1	162.1	160.3	158.8	157.7	156.6	-2.3%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	107.7	107.7	108.0	107.5	108.8	110.8	7.0%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	152.3	153.0	153.9	155.7	154.7	154.2	15.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	134.5	134.8	134.7	136.2	135.0	135.2	15.5%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.2	111.4	112.3	112.2	111.5	111.6	13.0%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	112.1	112.7	113.4	113.8	114.3	114.8	7.6%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）
（令和5年5月～令和5年11月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.3	111.3	116.5	118.6	118.2	118.0	117.1	-0.8%	5.2%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.8	121.6	122.8	122.8	121.6	122.2	122.2	0.0%	10.5%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	115.0	114.6	114.6	114.1	114.6	114.1	-0.4%	6.4%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	161.2	160.6	160.0	158.7	158.7	156.8	155.5	-0.8%	-3.5%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	105.0	105.2	105.0	105.2	105.6	109.4	110.0	0.5%	7.1%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	142.7	144.4	144.1	143.7	144.1	144.8	143.7	-0.8%	11.5%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.3	130.7	130.3	130.7	130.7	130.3	130.7	0.3%	13.3%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.3	110.7	111.4	111.4	110.7	111.4	110.5	-0.8%	12.1%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。
注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。
注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年12月号（11月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛価格は高水準を維持、23年8月の牛肉輸出量は前年同月比大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002997.html

（カナダ）牛飼養頭数の減少から、23年の牛肉生産量は前年比3.6%減見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002998.html

（EU）牛肉生産量減少などの影響で、枝肉卸売価格は引き続き高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002999.html

（豪州）成牛と畜頭数、3年半ぶりとなる高水準

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003000.html

◆豚肉

（米国）豚肉卸売価格は需給緩和により前年同月を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003001.html

（中国）豚肉価格は季節需要でやや回復も、前年並みの高騰は期待薄

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003002.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳出荷量は前年並みも、生乳・乳製品価格は前年を大幅に下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003003.html

（豪州）生乳生産量は前年同期をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003004.html

（NZ）GDT平均価格、4回連続の続伸も中国の需要は低迷

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003005.html

（アルゼンチン）23年1～9月の生乳生産量はわずかに減少、生乳価格は大幅上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003006.html

※GDT価格…グローバルデイトレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）世界の生産量、消費量および輸出量は前回見込みから増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003007.html

（世界：大豆）米国は減産見込みも、世界の大豆期末在庫は前年度比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003008.html

（米国）作付面積拡大により生産量は増加見込み

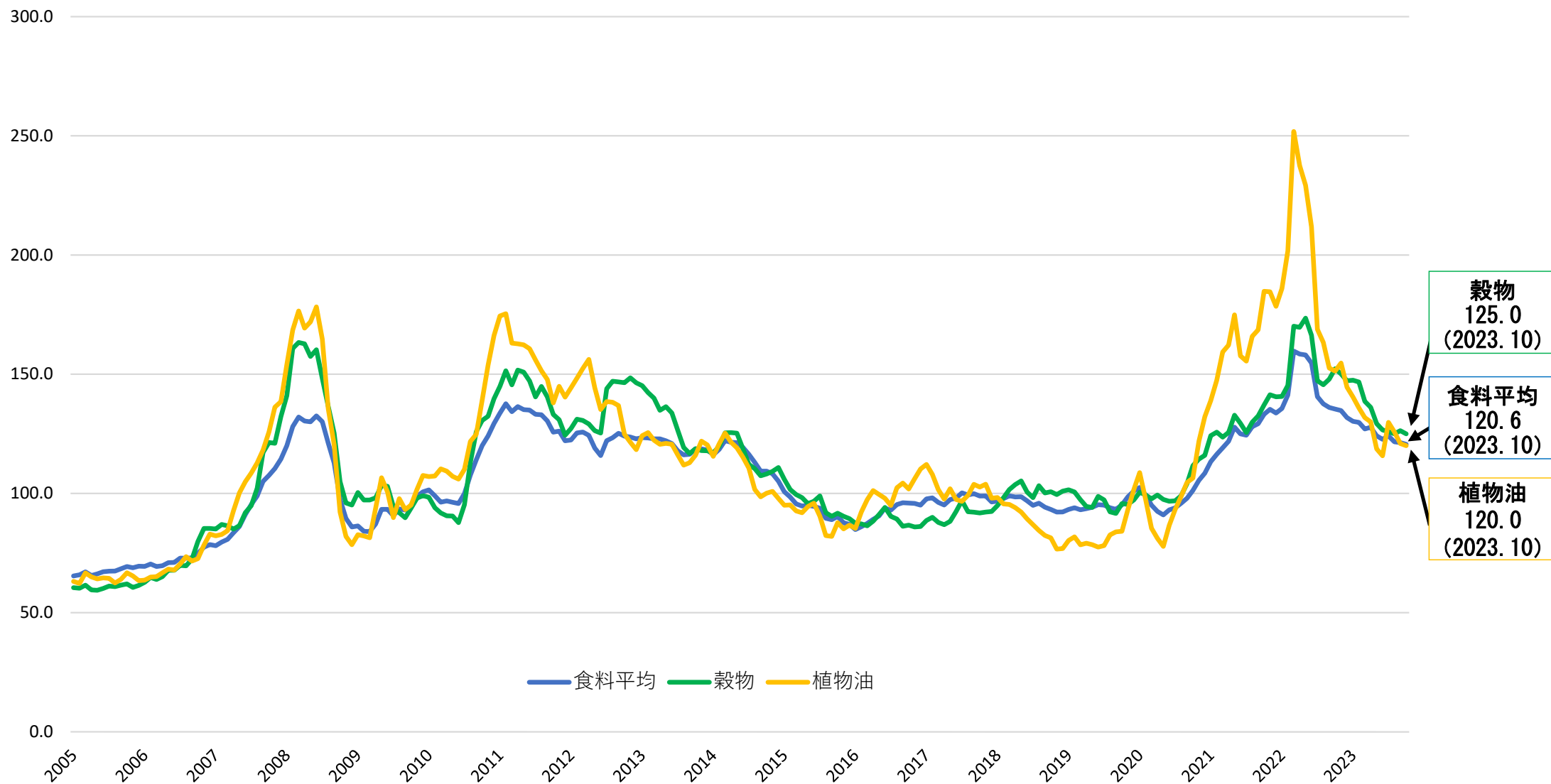
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003020.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003021.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.11)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

「世界最大のシンクタンク」OECD が公表した 農業分野の最新報告書から

OECD という言葉を耳にしたとき、読者の皆さんは何を思い浮かべますか。毎年 OECD が公表している「経済見通し」は、テレビや新聞でも報じられることが多いので、OECD と聞くと「経済見通し」を思い浮かべる方が多いかもしれません。また、OECD「生徒の学習到達度調査」、略して「PISA」も、調査が公表されると様々なメディアが世界各国と比較して日本の子供たちの学習到達度はどうなのか報じることが多いので、「PISA」を思い浮かべた方もいらっしゃるかもしれません。

OECD（経済協力開発機構）は国際経済全般について協議することを目的とした国際機関で、「世界最大のシンクタンク」とも呼ばれています。欧州諸国、米国、日本などを含む 38 か国の先進諸国によって構成されており、日本は 1964 年に 21 番目の加盟国となりました。来年日本は OECD 加盟 60 周年の節目の年を迎えます。

OECD は農業分野に関し、毎年 2 つの報告書－①OECD-FAO 農業アウトルック、②農業政策のモニタリングと評価報告書－を公表しています。各報告書ともに数百ページにわたるため、今回は 2 つの最新報告書から、食料安全保障や世界の食料需給に関わりの深い部分に絞ってご紹介します。

1. OECD-FAO 農業アウトルック

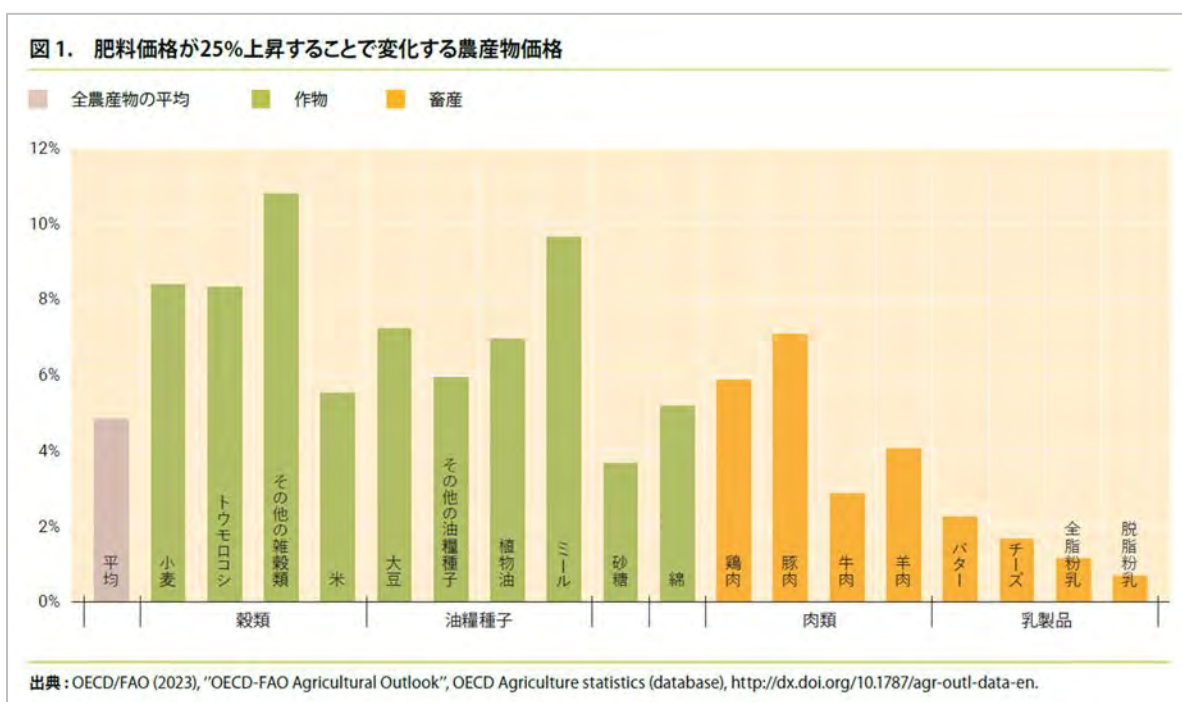
OECDでは、2005年からFAO（国連食糧農業機関）と連携して、今後10年間の世界の農産物市場の見通しを分析、毎年公表しています。2011年には漁業セクター、2013年には綿花、2015年には根菜類、2020年には豆類が順次追加されて、内容を充実させています。

今年6月に公表された最新のアウトルックでは、過去2年間の農業資材価格の高騰により、世界の食料安全保障が懸念されていることを背景に、肥料価格の高騰に関しては、肥料コストの上昇が食料価格の上昇につながる可能性があることを明らかにしました。

これまで用いてきた分析モデルでは、主な化学肥料のコストを他の生産投入財コストから分離していませんでしたが、今回初めて化学肥料のコストを分離しての分析がなされました。

新たな機能に基づく分析によると、肥料価格が1%上昇すると農産物価格が0.2%上昇すると試算しています。その上昇幅は、肥料を直接投入する農作物の方が（配合飼料への依存度が大きい鶏肉や豚肉生産を除き）、肥料を間接的に使用する畜産物よりも大きくなります。

このように、OECDでは、社会情勢の変化や加盟国からのニーズに応じて分析モデルの改善や充実を図っています。



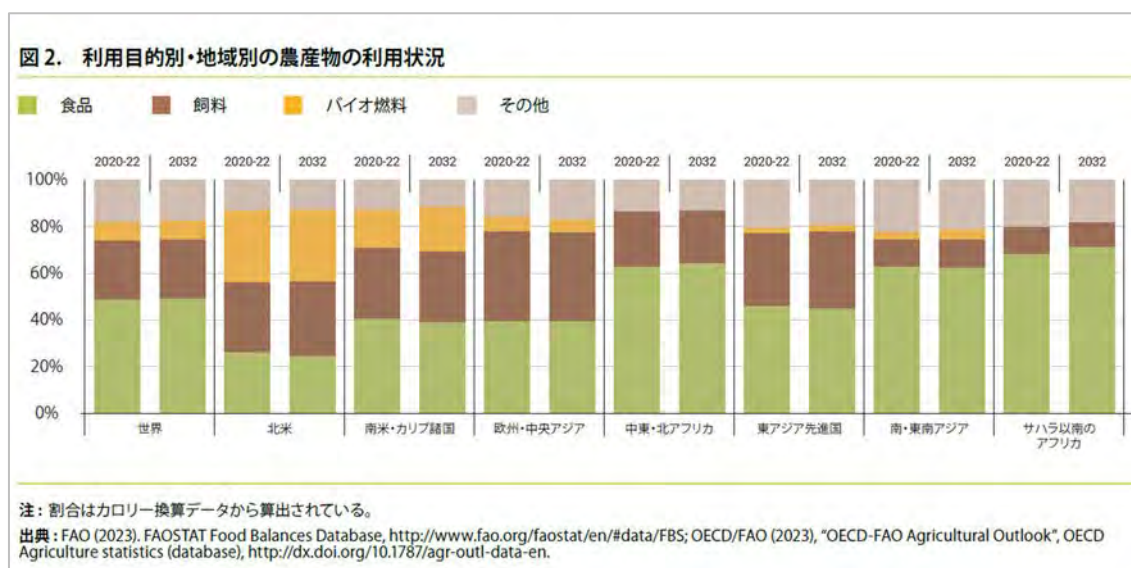
（出典：エグゼクティブ・サマリー）

今後10年間の農産物の利用状況については、

- ① 農産物の主な用途である食料としての消費（カロリーベース）は、今後10年間に年率1.3%で増加すると予測していますが、人口と一人当たりの所得の増加が鈍化すると予測し、これまでの10年間よりも鈍いペースであると見通しています。
- ② 農産物の2番目に重要な用途、家畜用と水産養殖用の飼料については、低・中所得国において家畜生産が急速に拡大、集約化する

と予想しており、その結果、今後10年間で飼料需要が急拡大することを強調しています。それに対して、高所得国と中国を含む一部の中所得国では、家畜生産の伸びの低下と飼養効率の向上により、飼料需要の伸びは過去10年間と比べて緩やかになると見られます。

- ③ 第一世代バイオ燃料用原料（※）の需要は、今後10年間は緩やかに増加すると予想しています。



（出典：エグゼクティブ・サマリー）

最新のアウトLOOKによると、今後10年間の見通しにおいても、十分に機能し、透明性が高く、ルールに基づいた多国間貿易システムの重要性を強調しています。また、輸出禁止措置は、食料価格の不確実性にさらなる悪影響を与え価格を上昇させること、その結果、短期的に世界の食料安全保障に悪影響が及ぶだけでなく、長期的には供給能力が低下すると指摘しています。

（※）第一世代バイオ燃料用原料…農作物など、食用の植物を原料としているバイオ燃料。（東芝テック株式会社 公表資料より抜粋）

2. 農業政策のモニタリングと評価報告書

農業政策のモニタリングと評価報告書（以下「モニタリング報告書」）では、OECD が各加盟国等から提出された政策情報やデータ

により算出した PSE（Producer Support Estimate：生産者支持推定量）等の指標を用いて、加盟国等の農業政策を評価しています。

2015 年以降は評価対象国を増やし、中国、インド、ロシア、ウクライナ等の非加盟国を含む 54 か国を分析の対象としています。

今年（2023 年）10 月末に公表されたモニタリング報告書では、ウクライナ侵略や世界的な食料価格高騰の影響について、以下のとおり分析しています。

- COVID-19 の世界的流行及び 2022 年のウクライナ侵略の影響により、分析対象 54 か国（OECD 加盟国及び主要途上国）における 2020-2022 年平均の農業支持総額は、年間 8,510 億米ドルという歴史的な高値を記録。うち大半は中国、インド、米国、EU。
- エネルギーや肥料などの投入材や、食品の価格高騰を受け、多くの国において、生産者と消費者双方の負担を緩和する政策が実施された。また、一部の国では輸出障壁が新たに設けられた他、環境要件を一時的に緩和して国内生産の支援が行われた。

また、イノベーションへの投資については、生産額に対する公的支出の割合は減少傾向にあると分析しています。

報告書の最後に、農業及び食料システムの強靱性の向上に向けて、各国政府が取るべき行動として、以下の 6 点を提言しています。

- 1 生産構造の調整を阻害するような政策の段階的廃止
- 2 農業のリスクマネジメントを向上させる政府の関与の強化
- 3 気候変動適応及びより強靱な生産システムへの移行を促す取組への投資
- 4 幅広い事象への強靱な対応を支援する「後悔のない」政策の選好
- 5 農業知識及びイノベーションシステムの向上並びに持続可能な生産性向上への着目
- 6 公共財の供給に対するインセンティブの増加

農業に関する2つの最新報告書からの紹介は以上となります。世界各地で様々な食料が生産され、また、貿易を介して食料が世界中を行き来する時代において、世界の食料問題に国境はなく、近年では気候変動の影響も世界各地で顕在化しつつあります。10年という時間軸での見通し、世界規模というマクロの視点と自国の視点との対比、その年に起こった出来事とデータの変化を照らし合わせるなど、様々な切り口から世界の食料問題に思いを巡らせてみていただけたら幸いです。

文責：久納寛子（OECD 日本政府代表部）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

OECD-FAO 農業アウトルック

[OECD-FAO Agricultural Outlook 2023-2032](#) | [OECD-FAO Agricultural Outlook](#) | [OECD iLibrary \(oecd-ilibrary.org\)](#)



農業政策のモニタリングと評価報告書

[Agricultural Policy Monitoring and Evaluation 2023 : Adapting Agriculture to Climate Change](#) | [Agricultural Policy Monitoring and Evaluation](#) | [OECD iLibrary \(oecd-ilibrary.org\)](#)



(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・ロシア等で上方修正されたものの、インド、アルゼンチン、カザフスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。

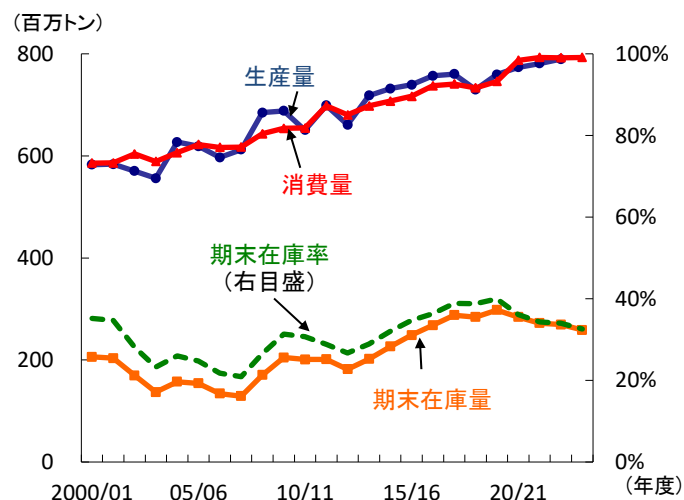
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・ロシア等で上方修正されたものの、カザフスタン、フィリピン等で下方修正され、前月からわずかに下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・ウクライナで上方修正されたものの、アルゼンチン、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



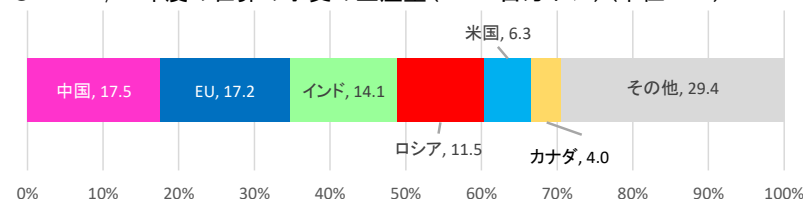
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

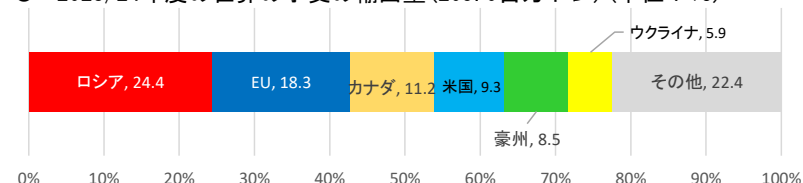
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	781.0	789.5	782.0	▲ 1.5	▲ 1.0
消 費 量	792.7	792.4	792.8	▲ 0.0	0.1
うち飼料用	161.3	155.1	157.8	1.4	1.7
輸 出 量	202.8	220.4	205.0	▲ 1.3	▲ 7.0
輸 入 量	199.5	212.0	204.7	0.1	▲ 3.4
期末在庫量	272.4	269.6	258.7	0.6	▲ 4.0
期末在庫率	34.4%	34.0%	32.6%	0.1	▲ 1.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (9 November 2023)

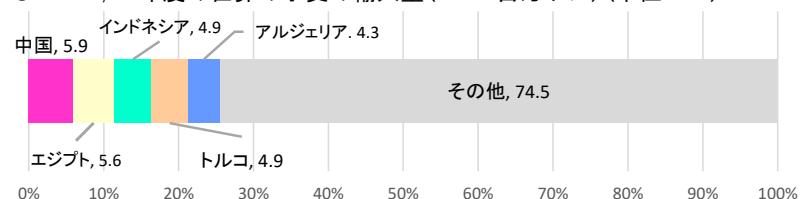
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(782.0百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(205.0百万トン) (単位: %)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(204.7百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の期末在庫量は前年度に比べ 17.5%増加

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均に比べ 1.3%増となる見込み。USDA「Crop Production」(2023.11.9)によれば、冬小麦、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、いずれも前月予測からの変更はなく、それぞれ 34.0 百万トン、13.7 百万トン及び 1.6 百万トンの見込み。種類別生産量を前年度と比べると、冬小麦は主要産地が 2 年連続で干ばつに見舞われたものの、収穫面積及び単収の増加により 13.1%増加した。春小麦も乾燥天候に見舞われ単収が低下したものの、収穫面積の増加により 2.6%増加した。一方、デュラム小麦は、収穫面積は増加したものの、生育期間に乾燥天候に見舞われ単収が減少したため、7.3%減少した。

USDA の「Crop Progress」(2023.11.20)によれば、2024/25 年度の冬小麦の播種が進展しており、11 月 19 日時点の播種進捗率は 95%と前年度同期(98%)及び 5 年平均(96%)を下回った。他方、発芽進捗率は 87%と前年度同期(86%)及び 5 年平均(85%)を上回った。作柄評価(やや良い～良い)の割合は 48%と前年度(32%)を上回っている。なお、11 月第 3 週の作柄について過去 6 年と比べると、2020 年以降で最も高くなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 19.1 百万トンと、前年度に比べ 7.7%減少し、1972/73 年度以降で最低の見込み。2023/24 年度(2023 年 6 月～9 月)の輸出量は、国際市場で価格競争力が乏しいことから、6.3 百万トンと前年度同期(8.9 百万トン)を 27.9%下回った。

米国産の輸出価格は、輸入需要の低下と 2024/25 年度の冬小麦の良好な作付け状況から、11 月 7 日時点で 289 ドル/トンと前月より 16 ドル/トン低下したものの、主要輸出 6 か国(米国のほか、ロシア、EU、カナダ、豪州、アルゼンチン)では、カナダ(317 ドル/トン)、豪州(302 ドル/トン)に続き高い水準となっている。

2023/24 年度の輸入量は、カナダ及び EU からの輸入が好調なことから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、4.0 百万トンと 5 年平均の 3.0 百万トンを 30.2%上回る。この輸入量の増加は、HRW (ハード・レッド・ウィンター) の生産量が干ばつの影響を受けたため、国内価格が高騰し、製粉業者が相対的に安価な EU 等の高タンパク小麦を調達したことによる。

期末在庫量は、2017/18 年度から低下傾向となっていたが、2023/24 年度は消費量の下方修正と輸入量の上方修正から前月予測から 0.4 百万トン上方修正され 18.6 百万トンと前年度を 17.5%上回った。これを受けて、2018/19 年以降低下していた期末在庫率は、36.8%と前年度(30.8%)から 6.0 ポイント上昇した。

小麦－米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.8	44.9	49.3	-	9.8
消 費 量	29.8	30.8	31.4	▲ 0.1	2.2
うち飼料用	1.8	2.4	3.3	-	35.1
輸 出 量	21.7	20.7	19.1	-	▲ 7.7
輸 入 量	2.6	3.3	4.0	0.3	19.0
期末在庫量	19.0	15.8	18.6	0.4	17.5
期末在庫率	37.0%	30.8%	36.8%	0.8	6.0

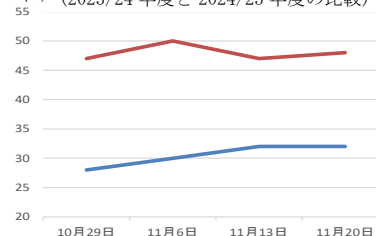
(参考)

収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.08	-	5.0
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.27	-	4.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(9 November 2023)

図 冬小麦の作柄評価の推移(「やや良」と「良」の計)

(%) (2023/24 年度と 2024/25 年度の比較)

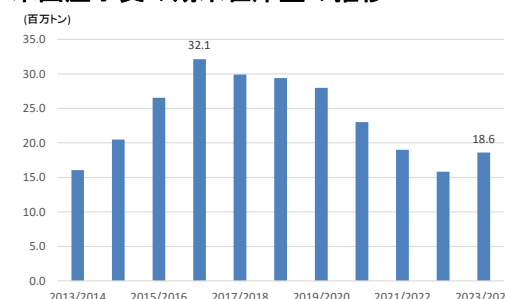


		評価基準							(単位: %)
作柄評価 (良、やや良)の各割合	計	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	
	良	8	10	11	6	7	5	9	
	やや良	44	46	41	37	37	27	39	
計		52	56	52	43	44	32	48	

(注) 各年度の調査日、2017年:11月19日、2018年:11月18日、2019年:11月17日、2020年:11月22日、
2021年:11月21日、2022年:11月20日、2023年:11月19日

資料: USDA「Crop Progress」をもとに農林水産省で作成

図 米国産小麦の期末在庫量の推移



資料: USDA「PS&D」(2023. 11. 9)をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の普通小麦、デュラム小麦の品質は良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.11.21)によれば、小麦全体の生産量は前月予測からの変更はなく、29.8 百万トンと前年度より 13.1%減少、過去 5 年平均に比べ 5.1%減少する見込み。前年度に比べ、収穫面積は増加(前年度比 5.6%増)したものの、主要生産地のカナダ西部で干ばつにより単収が低下(同 17.9%減)した影響を受けた。

小麦全体のうち普通小麦の生産量は、収穫面積が増加(同 7.9%増)したものの、プレーリー平原の干ばつにより単収が低下(同 16.4%減)したことから、25.8 百万トンと前年度比 9.7%減、5 年平均比 1.6%減の見込み。また、デュラム小麦の生産量は、収穫面積の減少(同 1.5%減)と主産地のアルバータ州南部等の干ばつによる単収の低下(同 28.6%減)から、4.1 百万トンと前年度比 29.9%減、5 年平均比 22.5%減の見込み。

10 月 23 日時点のサンプル調査の結果、普通小麦、デュラム小麦とも品質は良好で、普通小麦(HRS:ハード・レッド・スプリング)は、サンプル数の 71%以上が 1 等、27%が 2 等に格付けされ、両等級のタンパク質含有量は 13.8%と前年度(13.9%)をわずかに下回ったものの、5 年平均(13.7%)を上回った。また、デュラム小麦はサンプル数の 83 %が 1, 2 等に格付けされ、両等級のタンパク質含有量は平均で 14.8%と前年度(14.7%)、5 年平均(14.1%)を上回った。

各州政府の報告によれば、①サスカチュワン州では、10 月中旬までに小麦の収穫はほぼ終了し、単収は 2.87 トン/ヘクタールと、10 年平均の 2.82 トン/ヘクタールを上回った。②マニトバ州では、10 月下旬までに収穫はほぼ終了し、春小麦の品質は良好で、タンパク質含有量は 13.5～15%であった。③アルバータ州でも 10 月中旬までに収穫は終了し、単収は 2.9 トン/ヘクタールと、前年度(3.6 トン/ヘクタール)を下回った。HRS の 65.9%が 1 等に格付けされた。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 21.3 百万トンと、輸出余力の低下を受けて前年度比 17.0%減少の見込み。品種別の輸出量は、普通小麦は前月予測からの変更はなく 18.0 百万トンと、前年度に比べ 12.7%減少。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく 3.3 百万トンと、生産量の減少を受け前年度に比べ 34.7%減少する見込み。カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、9 月の輸出量は、普通小麦が 187.1 万トン、デュラム小麦が 16.2 万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(16.1%)、日本(9.0%)、インドネシア(9.0%)。デュラム小麦がイタリア(37.7%)、米国(19.8%)、アルジェリア(18.5%)の順で、生産量が減少したヨーロッパ、北アフリカ向けが多い。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	22.4	34.3	31.0 (29.8)	-	▲ 9.7
消費量	10.2	9.3	8.7 (8.7)	-	▲ 6.7
うち飼料用	5.2	4.2	3.5 (4.3)	-	▲ 16.1
輸 出 量	15.1	25.6	23.0 (21.3)	-	▲ 10.1
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	3.7	3.7	3.6 (3.6)	-	▲ 2.7
期末在庫率	14.5%	10.5%	11.2% (12.0%)	-	0.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.65)	-	5.2
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.92 (2.80)	-	▲ 14.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(23 November 2023)

表 カナダ産小麦の輸出量、輸出先国
(普通小麦、デュラム小麦)

(普通小麦)			(輸出量：万トン、シェア：%)					
2023/24年度 (2023年9月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
中国	30.1	16.1	中国	296.8	15.1	日本	159.2	13.8
日本	16.9	9.0	インドネシア	213.8	10.9	インドネシア	128.1	11.1
インドネシア	16.8	9.0	日本	167.3	8.5	コロンビア	102.4	8.9
ナイジェリア	14.7	7.9	ペルー	148.3	7.5	ペルー	79.2	6.9
バングラデシュ	12.2	6.5	バングラデシュ	144.4	7.3	中国	69.4	6.0
米国	10.4	5.6	コロンビア	109.9	5.6	エクアドル	65.8	5.7
その他	86.0	46.0	その他	886.1	45.1	その他	548.0	47.6
計	187.1	100.0	計	1,966.6	100.0	計	1,152.1	100.0

(デュラム小麦)			(輸出量：万トン、シェア：%)					
2023/24年度 (2023年9月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年7月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年7月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
イタリア	6.1	37.7	イタリア	121.0	23.9	モロッコ	72.2	27.5
アメリカ	3.2	19.8	アルジェリア	120.8	23.8	アルジェリア	44.5	16.9
アルジェリア	3.0	18.5	モロッコ	85.7	16.9	アメリカ	40.9	15.6
モロッコ	1.6	9.9	米国	50.4	9.9	イタリア	33.5	12.8
ベネズエラ	1.2	7.4	チュニジア	32.5	6.4	日本	20.2	7.7
日本	1.0	6.2	日本	18.1	3.6	ナイジェリア	12.3	4.7
その他	0.1	0.6	その他	78.8	15.5	その他	39.0	14.9
計	16.2	100.0	計	507.3	100.0	計	262.6	100.0

資料：Canadian Grain Commission のデータを基に農林水産省で作成

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の小麦の収穫は、乾燥天候に恵まれ進展

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、24.5 百万トンの見込み。生産地の多くでエルニーニョ現象による乾燥天候が継続し、単収が引き下げられたことと収穫面積の減少から、史上最高であった前年度に比べると、2023/24 年度の生産量は 38.3%減少するものの、10 年平均(26.4 百万トン)に比べれば 7.2%の減少に留まっている。

USDA によれば、10 月は多くの生産地で降雨が平均以下となったが、ヴィクトリア(VIC)州やニューサウスウェールズ(NSW)州では、同月初旬に十分な降雨があり生育に寄与した。11 月に入り、東部の生産地で一時降雨により収穫が中断したものの、南部及び西部の生産地では気温が高く乾燥天候となり、収穫が進展した。現地情報会社によれば、収穫は 10 月から開始され、各州の 11 月 1 日時点の収穫進捗率は、クイーンズランド(QLD)州 72%(前月 6 %)、サウスオーストラリア(SA)州 12%(同 3 %)、NSW 州 13%(同 1 %)、ウェスタンオーストラリア(WA)州 12%(同 1 %)となった。これまでの収穫状況を受け、現地情報会社は 2023/24 年度の小麦生産量を前月予測から 1.5%増加の 25.3 百万トンと予測。

GIWA(西豪州穀物産業協会)(2023.11.17)によれば、WA 州の 2023/4 年度の生産量予測は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され 7.9 百万トンの見込み。前年度の史上最高の生産量(13.9 百万トン)と比べると、43.2%の減少。高温乾燥の影響で、単収予測が収穫開始時より低下した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、17.5 百万トンの見込み。乾燥天候による生産量の減少から、過去最高の前年度の輸出量に比べ 45.0%減、10 年平均に比べ 7.4%減となる見込み。この豪州の輸出量の減少を受け、豪州の主要な輸出先国であったインドネシアでは、アルゼンチン産、ブラジル産等のシェアが伸びるとみられている。インドネシアでは、ウクライナ産の輸出量の減少もあり、ここ数年は豪州、アルゼンチンに加え、2021/22 年度に生産量が史上最高の 1,055 万トンに達し輸出量が増加しているブラジルが市場シェアを競ってきていた。

なお、豪州産小麦の輸出価格(FOB)は、11 月 7 日時点で、初期の収穫状況が予測を上回ったことから、前月から 14 ドル/トン低下し 302 ドル/トンとなった。

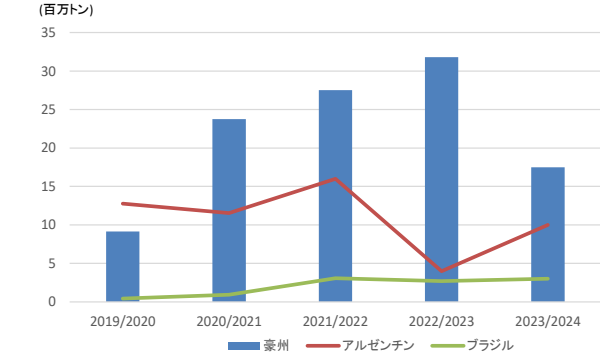
また、現地情報会社によれば、2022/23 年度(2022 年 10 月～2023 年 9 月まで)の輸出量は 3,184.3 百万トンで、2021/22 年度の同期間を 15.8%上回った。輸出先国は、中国(23.8%)、インドネシア(15.8%)、フィリピン(9.7%)の順で、上位 7 か国がアジア諸国向けで、そのシェアは全体の 8 割弱である。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10月～24年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	36.2	39.7	24.5 (24.4)	-	▲ 38.3
消 費 量	8.5	8.0	7.5 (7.6)	0.3	▲ 6.3
うち飼料用	5.0	4.5	4.0 (3.9)	0.3	▲ 11.1
輸 出 量	27.5	31.8	17.5 (18.0)	-	▲ 45.0
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	3.5	3.2 (2.2)	0.4	▲ 8.5
期末在庫率	9.6%	8.8%	12.8% (8.7%)	1.3	4.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.60 (12.60)	-	▲ 3.4
単収(t/ha)	2.85	3.04	1.94 (1.94)	-	▲ 36.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

図 豪州、アルゼンチン、ブラジルの小麦輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.11.9)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦輸出量と輸出先国

2023年9月			2022年10月～2023年9月			2021年10月～2023年9月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
フィリピン	26.4	17.7	中国	756.7	23.8	中国	611.7	22.2
中国	23.4	15.7	インドネシア	504.2	15.8	インドネシア	377.5	13.7
インドネシア	14.1	9.4	フィリピン	308.2	9.7	ベトナム	293.9	10.7
ベトナム	11.1	7.4	ベトナム	285.0	9.0	フィリピン	284.6	10.3
イエメン	10.8	7.2	韓国	270.3	8.5	韓国	162.3	5.9
韓国	10.4	7.0	タイ	200.8	6.3	マレーシア	123.3	4.5
その他	53.1	35.6	その他	859.1	27.0	その他	896.8	32.6
計	149.3	100.0	計	3,184.3	100.0	計	2,750.1	100.0

資料：Australian Crop Forecasters S&D Export Report (2023.11)をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2023/24 年度の生産量は過去5年平均を上回る 133.6 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.10.25)によれば、2023/24 年度の EU27 の生産量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 133.6 百万トンと、前年度を 0.5% 下回るものの、過去5年平均を 0.8% 上回る見込み。小麦全体のうち普通小麦は、前月予測に比べ 0.2 百万トン上方修正され 126.5 百万トンと、前年度比で 0.2% 減少も、5 年平均比で 1.4% 増加。また、デュラム小麦は、わずかに上方修正され 7.1 百万トンと、前年度及び5年平均比でそれぞれ 0.5% 減、9.4% 減の見込み。EU の過去 10 年のデュラム小麦の生産量は、2016/17 年度に 9.7 百万トンに達した後、2021/22 年度に一時回復したものの、減少傾向である。

2024/25 年度の生育状況は、乾燥が継続していたルーマニア等では、11 月上旬の降雨を受け土壌水分が改善され良好な生育見通しとなった。一方、北部及び東部では気温が高く、休眠期に入っていない。

フランスアグリメールによれば、11 月 6 日現在、2024/25 年度のフランス産小麦のうち普通小麦の播種進捗率は 67% と 5 年平均(83%)を大きく下回り、発芽進捗率も 55% と 5 年平均(57%)を下回った。また、デュラム小麦の播種進捗率は 15% と 5 年平均(34%)を下回り、発芽進捗率も 6% と 5 年平均(8%)を下回った。普通小麦、デュラム小麦とも播種の進捗は遅れているが、生育状況は過去5年平均と概ね同程度。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 37.5 百万トンと、前年度に比べ 6.9% 増加の見込み。なお、11 月 7 日時点の輸出価格(FOB)は、中国からの需要増を受け前月より 4 ドル/トン上昇し 251 ドル/トンとなったものの、主要輸出 6 か国(米国の項を参照)でロシア(227 ドル/トン)に続く 2 番目の低水準である。なお、欧州委員会によれば、8 月の輸出量は普通小麦が 233.3 万トン(前年度同期比 45.0% 減)、デュラム小麦は 2.1 万トン(同 72.0% 減)。輸出先国は普通小麦がナイジェリア(14.3%)、モロッコ(13.5%)、韓国(8.1%)の順。デュラム小麦はモロッコ(30.9%)、コートジボワール(18.2%)、マリ(7.3%)の順。なお、EU は 2022/23 年度にカナダに次ぎ世界 2 位のデュラム小麦の輸出シェアを占めたが、2023/24 年度(2023 年 7 月・8 月)の輸出量は 4.8 万トンと、生産量の減少から前年度同期に比べ 67.5% の減少となっている。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題は、9 月 15 日の欧州委員会のトランジットを除く輸入禁止解除の決定後も、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産穀物のトランジットを認めながらも、独自規制を継続。11 月にはポーランドのウクライナ国境検問所で、EU とウクライナ間の国際貨物輸送の自由化合意撤廃と輸出許可制の復活等を求めるための運送業者による道路封鎖が生じている。

小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)
(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	138.2	134.2	134.3 (132.4)	0.3	0.1
消 費 量	108.3	108.0	108.5 (109.2)	-	0.5
うち飼料用	45.0	44.0	44.0 (44.7)	-	-
輸 出 量	31.9	35.1	37.5 (36.1)	-	6.9
輸 入 量	4.6	12.1	7.5 (7.7)	-	▲ 38.0
期末在庫量	13.3	16.5	12.3 (13.8)	0.3	▲ 25.4
期末在庫率	9.5%	11.5%	8.4% (9.5%)	0.2	▲ 3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.22 (23.87)	▲ 0.03	▲ 0.7
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.55 (5.55)	0.02	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

表 EU 産小麦の輸出量と輸出先国

《普通小麦》						(輸出量:万トン、シェア:%)		
2023/24年度 (2023年8月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年8月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年8月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
ナイジェリア	33.4	14.3	モロッコ	119.2	21.7	アルジェリア	121.8	16.9
モロッコ	31.5	13.5	アルジェリア	45.7	8.3	モロッコ	95.7	13.3
韓国	19.0	8.1	韓国	44.1	8.0	エジプト	53.6	7.4
タイ	18.1	7.7	ナイジェリア	44.0	8.0	パキスタン	48.7	6.8
バングラデシュ	10.9	4.7	南アフリカ	26.3	4.8	ナイジェリア	41.9	5.8
その他	120.5	51.6	その他	269.8	49.1	その他	41.7	5.8
計	233.3	100.0	計	549.1	100.0	計	719.6	100.0

〈デュラム小麦〉						(輸出量:万トン、シェア:%)		
2023/24年度 (2023年8月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年8月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年8月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
モロッコ	0.7	30.9	モロッコ	0.8	16.7	チュニジア	4.1	27.6
コートジボワール	0.4	18.2	英国	0.6	13.3	アルジェリア	3.1	21.3
マリ	0.2	7.3	キューバ	0.5	11.6	リビア	2.2	15.0
サウジアラビア	0.1	6.2	コートジボワール	0.5	10.8	英国	1.7	11.2
スイス	0.1	5.5	スイス	0.4	8.2	コートジボワール	0.9	5.9
その他	0.7	31.9	その他	1.9	39.3	その他	41.7	282.6
計	2.1	100.0	計	4.8	100.0	計	14.8	100.0

資料：欧州委員会「Cereals export and import」(2023.10.20)を基に農林水産省で作成

< 中国 > 2023/24 年度の輸入量は前月予測から上方修正され 12.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、137.0 百万トンの見込み。史上最高となった前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.5% 減少した。中国の生産量は、2018/19 年度から毎年増加し、2022/23 年度に史上最高の 137.7 百万トンに達したものの、2023/24 年度は、5 月下旬の収穫期に河南省等で降雨の影響を受け単収が低下したことから史上 2 番目となる見込み。なお、この降雨により、小麦の一部で穂発芽やカビが発生し小麦の品質が低下した。

中国国家気象センター「中国気象農業報道」(2023.11.6)によれば、10 月末までの 2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、河北省、河南省等で播種から出芽、三葉期まで達し、一部地域では分けつ期に入っているほか、湖北省等の一部で播種が開始されている。なお、河北省東部、河南省の一部で生育が通常より 4～7 日遅れているものの、大部分の生産地域では生育がほぼ平年並みか、若干早い。なお、中国農業農村部の農業状況調査(2023.11.8)によれば、冬小麦の播種進捗率は 80%を超えた。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、153.0 百万トンと前年度に比べ 3.4%増加する見込み。消費量のうち飼料用消費は、5 月下旬の降雨による品質低下から飼料用小麦の供給が増加したことを受け 37.0 百万トンと、前年度に比べ 12.1%増加する見込み。この品質が低下した小麦は飼料用途に向けられる他、食用の品質調整用として輸入小麦等と混合される。

2023/24 年度の輸入量は、中国産小麦の品質低下の懸念を受けて、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 12.0 百万トンとなるものの、前年度に比べ 9.6%減少の見込み。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から 9 月までの輸入量合計は 1,017.3 万トン。月別の輸入量では、5 月まで 110 万トン台～160 万トン台で推移したものの、6 月以降は 100 万トン以下で推移。8 月は製粉企業の高品質小麦への需要や、強力粉や薄力粉への需要が高まり輸入量が増加したが、9 月は 60 万トン台に低下。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 62.5%、カナダが 17.4%、フランスが 8.1%で、この 3 か国で 88.0%を占める。豪州の 9 月のシェアは 54.7%と 1 位であるものの、前年同期(83.9%)に比べると低下した。

「農産品供需形勢分析月報 2023 年 9 月号」等によれば、国内市場の供給面では、新穀の出回りとともに活発化した製粉企業等の買付けが落ち着いたため、市場への小麦供給量も減少傾向となった。また、需要面では、中秋節と国慶節が過ぎ、小麦粉需要が徐々に減少するとみられており、製粉企業の小麦需要も高くない。このため、小麦の国内市場価格は安定的に推移するとみられている。

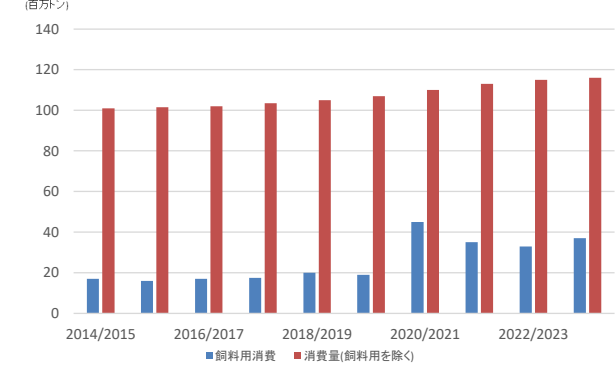
小麦—中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.0	137.7	137.0 (136.5)	-	▲ 0.5
消 費 量	148.0	148.0	153.0 (149.5)	-	3.4
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	-	12.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	12.0 (11.7)	1.0	▲ 9.6
期末在庫量	136.8	138.8	133.9 (137.9)	1.0	▲ 3.5
期末在庫率	91.9%	93.2%	87.0% (91.6%)	0.6	▲ 6.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.70 (23.70)	-	0.8
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.76)	-	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

図 中国の小麦消費量の推移(飼料用、飼料用除く)



資料：USDA 「PS&D」(2023. 11. 9)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

(輸出量: 万トン、シェア: %)

2023年9月			2023年1月～2023年9月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	33.7	54.7	豪州	636	62.5
カナダ	8.8	14.3	カナダ	177	17.4
米国	7.6	12.3	フランス	82	8.1
カザフスタン	7.2	11.7	米国	63	6.2
ロシア	4.0	6.5	カザフスタン	41	4.0
その他	0.3	0.5	その他	18	1.8
計	61.6	100.0	計	1,017	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2023/24 年度の生産量は前月予測から上方修正され 90.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度（クリミア地域分を含まず）は、収穫面積の増加と単収の上昇を受け、前月予測から 5.0 百万トン上方修正され、90.0 百万トンの見込み。史上最高であった前年度（92.0 百万トン）に比べ、生産量は 2.2% 減少するものの、過去 5 年平均（79.6 百万トン）を 13.1% 上回り史上 2 位となる見込み。種類別の生産量は、冬小麦が、播種期の降雨による収穫面積の減少を受け前年度より 5.2% 減少したものの、春小麦は、収穫面積の増加を受け 6.3% 増加した。

ロシア農業省の速報値によれば、11 月 10 日時点の生産量（品質調整前重量）は、収穫進捗率 99.0% で 94.3 百万トンと前年度同期の 105.0 百万トンを下回るものの、史上最高の前年度に次ぐ豊作の見込み。また、同日時点で、2024/25 年度の冬小麦の播種は、播種進捗率は 99.3% となり、ほぼ終了した。播種面積は、前年度同期（17.49 百万ヘクタール）を上回る 18.42 百万ヘクタールに達した。

ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、①ヨーロッパ部で、出芽期から子葉生成期、分けつ期となり、作柄は並み～良好となっている。②アジア部で、分けつ期となり、作柄は概ね良好～並みである。アジア部のうちウラル、西シベリア地域では気温低下により生長が停止した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 50.0 百万トンと、これまで史上最高であった前年度（47.5 百万トン）を更に 5.3% 上回る見込み。この輸出量増加の背景には、生産量と期首在庫量を合わせた国内供給量が 104.6 百万トンと潤沢なことがある。

2023/24 年度のうち 2023 年 7 月～10 月のロシアの輸出量は 1,966.1 万トンと、過去最高の輸出量であった 2022/23 年度の同期間（1,466.9 万トン）を 34.0% 上回った。一方、月別では、10 月は 488.1 万トンとなり前月を 10.6% 下回った。現地調査会社によれば、輸出が減速すれば、輸出業者が調達を減らし国内価格が下がり、生産者は売り控えると思われる。なお、10 月の輸出先国は、トルコ（14.9%）、エジプト（11.1%）、バングラデシュ（9.7%）の順で、中東、北アフリカ諸国向けが多い。

11 月 9 日、ロシア経済発展省は 2024 年 2 月 15 日から 6 月 30 日までに設定される小麦を含む穀物輸出枠（ユーラシア経済同盟加盟国は対象外）を 2,400 万トンと公表。なお、2023 年の輸出枠（2,550 万トン）は、輸出枠の未消化分の再配分ができない等の制度上の問題から、その全量が消化されなかった。

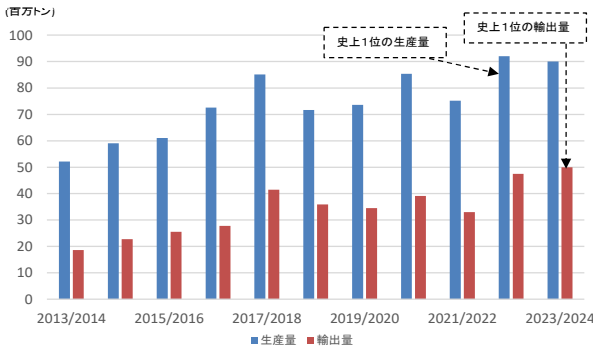
現地調査会社によれば、輸出枠の設定期間は端境期と重なるため、輸出量が 1,900 万トン～2,100 万トンとなる見込みから、本年度の輸出枠も余裕があるとみられる。

小麦－ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培）
（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	75.2	92.0	90.0 (89.0)	5.0	▲ 2.2
消費量	41.8	42.3	43.0 (43.6)	2.0	1.8
うち飼料用	18.5	19.0	20.0 (19.0)	2.0	5.3
輸出量	33.0	47.5	50.0 (49.1)	-	5.3
輸入量	0.3	0.3	0.3 (0.1)	-	-
期末在庫量	12.1	14.6	11.9 (11.4)	3.0	▲ 18.4
期末在庫率	16.2%	16.3%	12.8% (12.4%)	3.0	▲ 3.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	29.00 (28.35)	0.70	-
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.10 (3.14)	0.10	▲ 2.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

図：ロシアの小麦の生産量、輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023.11.9)をもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年10月)		2023/24年度 (2023年7月～2023年10月)		2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)	
国 名	輸出量	国 名	輸出量	国 名	輸出量	国 名	輸出量
トルコ	72.6	エジプト	264.4	エジプト	836.8	トルコ	669.7
エジプト	54.4	トルコ	229.8	トルコ	682.1	イラン	626.6
バングラデシュ	47.4	バングラデシュ	130.2	バングラデシュ	199.2	エジプト	500.5
アルジェリア	30.5	アルジェリア	123.4	パキスタン	155.2	サウジアラビア	97.3
パキスタン	28.8	イラン	101.7	イラン	149.6	ナイジェリア	73.5
イラン	28.6	サウジアラビア	80.7	アゼルバイジャン	136.9	スーダン	71.2
イエメン	18.0	イスラエル	72.3	カザフスタン	125.5	アゼルバイジャン	69.7
その他	207.8	その他	963.6	その他	2,521.5	その他	2,521.5
計	488.1	計	1,966.1	計	4,806.8	計	3,260.2

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023 年 7 月の黒海穀物イニシアティブ履行停止後も小麦輸出は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく22.5百万トンの見込み。前年度に比べた生産量は、収穫面積の減少も、良好な天候による単収の上昇により前年度(21.5百万トン)を4.7%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)を16.1%下回る。

ウクライナ農業政策食料省によれば、冬小麦の収穫は、11月10日現在で22.4百万トン(前年度同期19.4百万トン)となった。収穫面積は4.69百万ヘクタールと前年度(4.71百万ヘクタール)に比べ減少したものの、単収が4.77トン/ヘクタールと前年度(4.10トン/ヘクタール)を上回った。

2024/25年度の冬小麦の播種が例年どおり9月初めから開始されており、11月6日現在の播種面積は3.87百万ヘクタールと前年度同期(3.64百万ヘクタール)を上回り、作付け進捗率は88.8%となった。

生育段階は、出芽期から第3葉形成期、一部で分けつ期に入っており、作柄は概ね並み～良好である。なお、大半の圃場で8月下旬からほとんど降雨がなく、9月も高温により干ばつ状態が深刻化したものの、10月下旬の降雨で土壌水分が補充された。ウクライナ東部の一部では、降雨不足が継続している。

なお、現地農業団体によれば、ロシアによるウクライナ侵攻後、肥料、種子、農薬の価格が上昇し、加えて販売価格が低迷していることから、離農が発生するとともに、生産者は冬作物の播種面積を減らしており、さらに春作物の播種面積も減少させる可能性がある。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、黒海イニシアティブを代替する臨時回廊の稼働等を受け、前月予測から1.0百万トン上方修正され、12.0百万トンとなるものの、前年度(17.1百万トン)及び5年平均(18.0百万トン)をそれぞれ29.9%、33.2%下回る見込み。

ウクライナ政府等によれば、2023年10月の輸出量は129.7万トンと前年度同期に比べ33.8%減少しているものの、黒海イニシアティブが履行停止となった7月に比べると57.4%増加している。輸出先国は、10月はスペイン(49.3%)、エジプト(8.6%)、ベトナム(7.3%)の順で、スペイン向けの輸出が全体の半分近くを占めた。

また、2023/24年度のうち7月から10月までの輸出量は463.3万トンで、輸出先国はスペイン(30.9%)、ルーマニア(20.7%)、エジプト(12.2%)の順。ベトナム、インドネシア向けの輸出がされているものの、アジアやサハラ以南のアフリカに大量の小麦を輸出する能力が限られているため、多くはEU、北アフリカ諸国向けである。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	33.0	21.5	22.5 (27.4)	-	4.7	
消 費 量	10.5	8.4	8.8 (13.1)	-	4.8	
うち飼料用	4.5	3.4	4.2 (3.0)	-	23.5	
輸 出 量	18.8	17.1	12.0 (12.5)	1.0	▲ 29.9	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3	
期末在庫量	5.3	1.3	3.1 (4.4)	▲ 1.0	136.9	
期末在庫率	18.0%	5.1%	14.8% (17.0%)	▲ 5.8	9.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.00 (5.95)	-	▲ 10.7	
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.50 (4.61)	-	17.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

図 ウクライナ産小麦の生産量、輸出量の推移

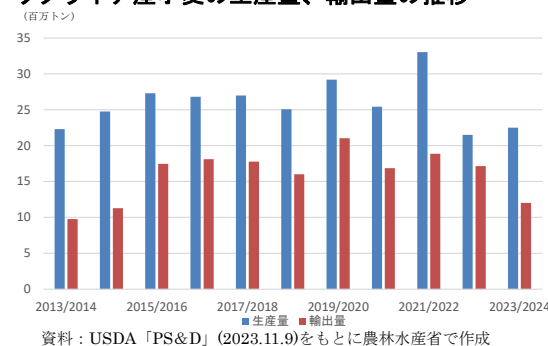


写真 2024/25 年度冬小麦の圃場(2023. 11. 11)



冬小麦の播種面積は1500haで、前年度より500ha減らした。
これは、小麦価格が低く、利益は言うまでもなく、コストさえカバーできないからである。コストの大半は料代と運送費である。
圃場では2024/25年度の冬小麦が出芽期に入っており、生育状況は並み～良好である。

(参考)黒海穀物イニシアティブ履行停止後の輸出状況

黒海穀物イニシアティブの履行停止により、その後の主要輸出ルートは、①鉄道、トラック等でウクライナのイズマイル港等に向かった後、はしけ等でドナウ川を經由し、ルーマニアの黒海港湾(コンスタンツァ港他)から「臨時回廊」を經由するルート、または、ウクライナの黒海港湾(オデーサ港他)から直接「臨時回廊」を經由する港湾ルート、②ポーランド等の欧州諸国を通過する陸路ルートの2つとなっている。

ウクライナ政府及び現地調査会社のデータでによれば、この輸出ルートのうち、港湾を經由した月平均小麦輸出量は、黒海穀物イニシアティブ履行期間中(2022年8月～2023年7月)は121.4万トンであり、同履行停止後(2023年8月～2023年10月)は、100.0万トンに減少しているものの、17.6%の減少に留まっている。

一方、鉄道による輸出量は、黒海穀物イニシアティブ履行期間(2022年8月～2023年7月)では月平均14.5万トンであったが、同履行停止後(2023年8月～10月)には月平均20.9万トンと、44.2%増加。また、同履行停止直後の2023年7月に小麦輸出量は12.3万トンであったが、同年10月には23.2万トンと88.6%増加した。

この結果、ウクライナ産小麦の月平均輸出量を黒海穀物イニシアティブ履行期間と履行停止後の期間と比較すると、同履行期間(2022年8月～2023年7月)の月平均輸出量144.0万トンに対し、同履行停止後(2023年8月～2023年10月)の月平均輸出量は、海上輸送能力の制限により、127.9万トンに減少しているものの、11.1%の減少に留まっている。また、黒海穀物イニシアティブの履行停止後、小麦全体の輸出量は7月に減少したものの、その後は港湾、鉄道が利用され、増加傾向となっている。

一方で、ウクライナ産穀物の東欧5か国への過剰流入問題は、11月現在、ポーランド、ハンガリー等が独自規制を継続し、ポーランドではウクライナとの国境で道路封鎖も生じており、その影響が懸念されている。

USDAによれば、ロシアがウクライナに侵攻した2021/22年度の侵攻後の数か月と同様に、黒海ルート経由の輸出が減少し、国内生産量に占める輸出量の割合は低水準となり、2023/24年度の期末在庫量は3.1百万トンと前年度に比べ136.9%増加すると見られている。

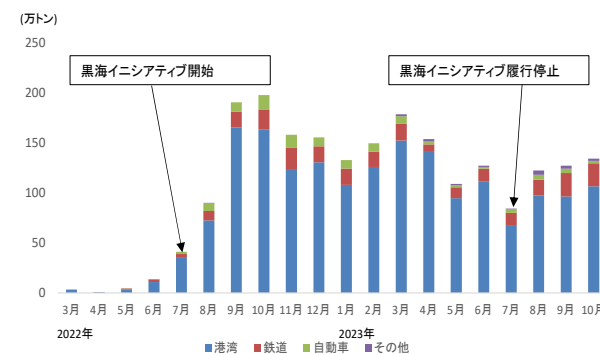
2022年2月からのシカゴ小麦相場の動向は、ロシアのウクライナ侵攻を受けて2022年3月7日に史上最高の210.4ドル/トンに上昇したのち、黒海穀物イニシアティブによる輸出の再開等から低下傾向となった。2023年7月のロシアによる黒海イニシアティブ履行の停止後は、ロシアによるウクライナの港湾施設等への攻撃で一時的に上昇したものの、ウクライナからの輸出の継続と好調なロシアからの輸出により、2023年11月中旬現在、202.4ドル/トンと、ロシアによるウクライナ侵攻前の水準で推移している。

図 黒海穀物イニシアティブルートと黒海穀物イニシアティブ履行停止後のウクライナ産穀物の輸出ルート



出所：国連の地図に、ガーディアン紙(2023年8月9日付)を参考に調査会社が作成。

図 ウクライナ産小麦の輸送手段別輸出量の推移



資料：ウクライナ農業政策食料省及びインフラ省、現地情報会社のデータをもとに、農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・メキシコ、エジプト等で下方修正されたものの、米国、ウクライナ、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

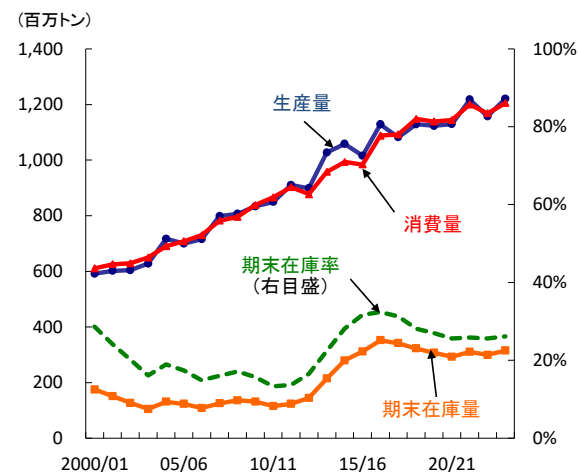
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・トルコ、イラン等で下方修正されたものの、米国、カナダ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インドで下方修正されたものの、米国、ロシア、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



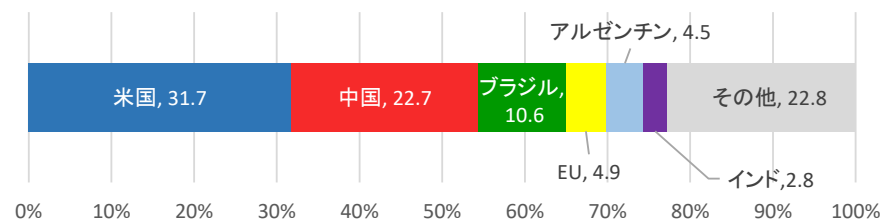
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

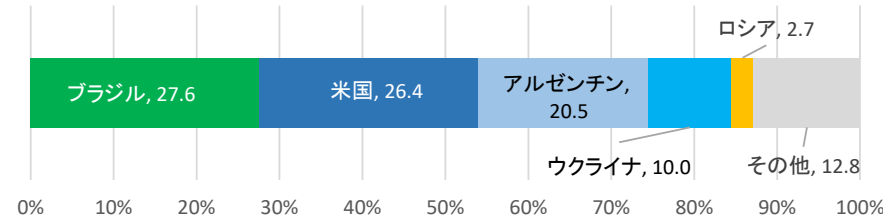
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,217.3	1,157.1	1,220.8	6.3	5.5
消費量	1,199.9	1,168.2	1,205.0	4.8	3.2
うち飼料用	744.5	730.6	759.8	3.5	4.0
輸出量	206.6	180.9	199.6	3.4	10.3
輸入量	184.4	172.2	189.9	3.0	10.3
期末在庫量	310.3	299.2	315.0	2.6	5.3
期末在庫率	25.9%	25.6%	26.1%	0.1	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 November 2023）

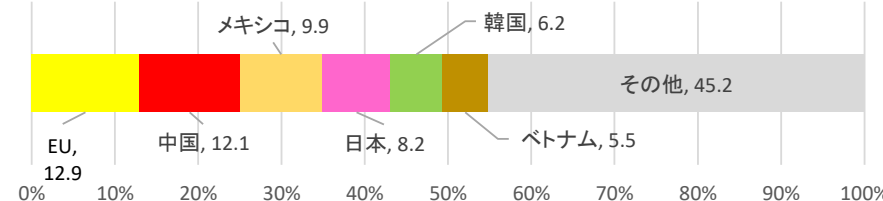
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,220.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(199.6 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(189.9 百万トン) (単位：%)



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は大豆等への転換により減少

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降に作付けが開始されている2023/24年度
の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.8%減の129.0百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2023.11.9）によれば、2023/24年度のとう
もろこしの生産量は、前年度比9.6%減の119.1百万トンの見込み（P.24大豆ーブラジルのク
ロップカレンダー参照）。生産量の減少は、とうもろこしの市場価格の低下により大豆等に作
付けがシフトし、収穫面積が21.1百万ヘクタールと前年度より5.0%減少することによるとみ
られる。

2023/24年度の夏とうもろこしは、南部のパラナ州の作付進捗率が11月6日時点で95%
と前年同時期（93%）を上回っており、南部のリオ・グランデ・ド・スール州の作付進捗率が
11月9日時点で79%と前年同時期（80%）をやや下回っている。

なお、生産量の約8割を占める冬とうもろこしについては、大豆の収穫を待って来年2月以
降に作付けが行われる。中西部の乾燥、南部の降雨過多による大豆の作付け遅延に伴い、大豆
の収穫、冬とうもろこしの作付けが遅れ、雨季における十分な降雨の恩恵を受けられないとの
懸念がある。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、
加工用ともに需要増加等から、前年度より3.3%増の77.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、
史上最高となった前年度より3.5%減の55.0百万トンとなるものの、引き続き高水準の生産量
と競争力のある安価な輸出価格から、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～10月の輸出量は42.4百万トンで、前年度比37%増。
内訳は、中国（11.4百万トン）、日本（5.1百万トン）、ベトナム（2.9百万トン）の順。前年11月
末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡した7月以降本格化してお
り、一部の港で滞船が見られたものの概ね順調に輸出されている。

とうもろこしーブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	116.0	137.0	129.0 (127.2)	-	▲ 5.8	
消 費 量	70.5	75.0	77.5 (80.1)	-	3.3	
うち飼料用	59.5	62.5	63.5 (54.8)	-	1.6	
輸 出 量	48.3	57.0	55.0 (50.0)	-	▲ 3.5	
輸 入 量	2.6	1.3	1.2 (0.5)	-	▲ 7.7	
期末在庫量	4.0	10.3	8.0 (7.9)	▲ 0.1	▲ 22.4	
期末在庫率	3.3%	7.8%	6.0% (6.1%)	▲ 0.1	▲ 1.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	21.80	22.40	22.90 (22.14)	-	2.2	
単収(t/ha)	5.32	6.12	5.63 (5.74)	-	▲ 8.0	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

写真：ブラジル・サントス港のとうもろこし倉庫

（2023年11月10日撮影）



南東部サントス港のとうもろこし倉庫。
当該倉庫には9万トンの穀物を貯蔵可能。

< アルゼンチン > 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始されている 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から大きく回復する見通しから、61.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となる見込み。

USDA によれば、早植えとうもろこしの作付けが 9 月末から 12 月上旬まで続き、12 月上旬から遅植えとうもろこしの作付けが始まる。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023.11.16）によれば、作付進捗率は 25.1%と、干ばつの影響を受けた前年度同期を上回ったものの、降雨不足により過去 5 年平均を下回っている。他方で、11 月上旬になって主産地の多くで降雨があり、前週より 1.5 ポイント進展した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 20.5%増の 14.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 78.3%増の 41.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～9 月の輸出量は 20.3 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響を受け、前年度同期比（30.2 百万トン）で 33%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム（291.4 万トン）、ペルー（207.1 万トン）、韓国（196.5 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチンの農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 11 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンにそれぞれ設定されている。

2023 年 11 月 19 日に実施された大統領選挙の結果、左派政権に代わり右派のミレイ氏が当選しており、今後の輸出税への影響など、注視が必要。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

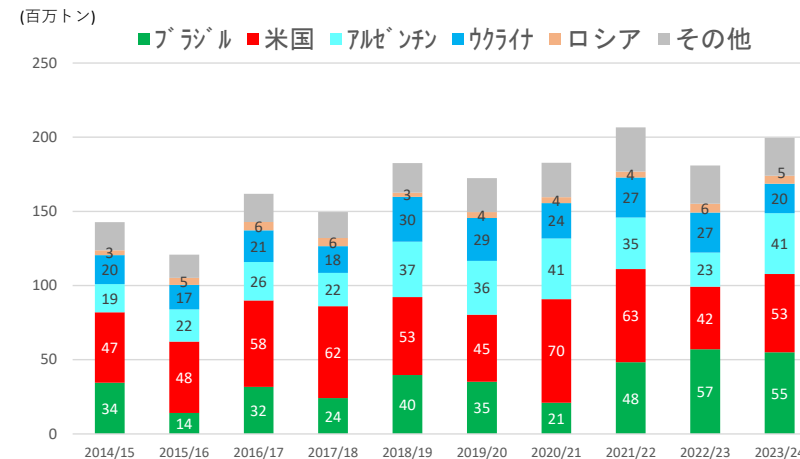
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	34.0	55.0 (61.0)	-	61.8
消 費 量	14.2	11.7	14.1 (20.4)	-	20.5
うち飼料用	10.1	7.5	9.8 (15.5)	-	30.7
輸 出 量	34.7	23.0	41.0 (40.9)	-	78.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (3.6)	-	▲ 9.0
期末在庫率	3.7%	3.2%	1.8% (5.9%)	-	▲ 1.4

（参考）

収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.10 (8.20)	0.10	6.0
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.75 (7.44)	0.04	52.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC「Grain Market Report」(19 October 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移 (2023/24 年度、アルゼンチンは世界第 3 位に戻る見通し)



資料：USDA「PS&D」（2023. 11. 9）のデータをもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上2番目

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付けが大豆ヘシフトすることに加え主産地の降雨過多から、前年度より0.1%減の277.0百万トンとなるも、前年度に次ぐ史上2番目の見込み。

11月上旬現在、黒竜江省等が主産地の春とうもろこし、河南省等が主産地の夏とうもろこしのいずれも、収穫は終盤に差し掛かっている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より1.7%増の304.0百万トンと史上最高の見込み。背景には、国内の堅調な食肉需要があるとみられる。中国国家统计局（2023.10.19）によれば、1～9月の肉類生産量は6,974万トンと、前年同時期比で3.9%増。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っているほか、特に前年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より22.9%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～9月の輸入量は、前年同期より10.4%減の1,655.7万トン。内訳は、米国（621.0万トン）、ウクライナ（533.5万トン）、ブラジル（377.3万トン）の順。2023年4月以降、米国産の輸入量が前年同月より大きく減少しており、その背景として、米国産がブラジル産等に比べて割高であることから輸入を控え、輸入再開した豪州産大麦等の他の穀物を飼料向けに代替する動きがあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年9月号」によると、9月の国内価格は、新穀の流入を受けたものの、食肉生産が堅調であったため、2,960 元/トンと前月（2,920 元/トン）からわずかに上昇した。

USDAによれば、2023/24年度の実在庫量は、2022/23年度の実輸入量が引き上げられたことから、前月予測から0.2百万トン上方修正されたものの、国内の堅調な飼料用需要の増加を背景とした消費量の増加により前年度より2.0%減の202.0百万トンの見込み。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	272.6	277.2	277.0	(280.6)	-	▲ 0.1
消 費 量	291.0	299.0	304.0	(305.5)	-	1.7
うち飼料用	209.0	218.0	223.0	(205.0)	-	2.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	21.9	18.7	23.0	(20.0)	-	22.9
期末在庫量	209.1	206.0	202.0	(171.0)	0.2	▲ 2.0
期末在庫率	71.9%	68.9%	66.4%	(56.0%)	0.1	▲ 2.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00	(43.30)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.44	(6.48)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC「Grain Market Report」(19 October 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2023年9月			2023年1月～2023年9月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	124.6	75.7	米国	621.0	37.5
米国	19.3	11.7	ウクライナ	533.5	32.2
ウクライナ	12.2	7.4	ブラジル	377.3	22.8
ミャンマー	5.1	3.1	ブルガリア	63.4	3.8
ロシア	2.1	1.3	ロシア	24.6	1.5
カザフスタン	0.7	0.4	ミャンマー	23.0	1.4
その他	0.7	0.3	その他	12.9	0.7
計	164.7	100	計	1,655.7	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 30.0%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、単収の上方修正により前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、29.5 百万トンとなった。前年度より収穫面積が減少も、天候に恵まれ単収が上昇（前年度比 10.6%増）することを受け、前年度より 9.3%増となったものの、侵攻前の 2021/22 年度比では 30.0%減となる見通し。

USDA によれば、11 月上旬、温暖で乾燥した気候が広がり、収穫が進展した。

ウクライナ農業政策食料省によれば、11 月 10 日現在の収穫進捗率は 72%と、前年度同期（50%）より進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.8%増の 5.5 百万トンの見込み。背景には、戦争直後の 2022/23 年度と比較し、畜産物生産が回復することによる飼料用需要の増加があるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、臨時回廊による輸出量の回復を受けて前月予測から 0.5 百万トン上方修正されたものの、供給量の減少や主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 25.9%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 25.9%減の 20.0 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2023 年 10 月の輸出量は 128.4 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）と、臨時回廊による輸出量が増加したため前月比で 2 倍となったものの、黒海穀物イニシアティブが履行されていた前年同月比では 45%減。輸出先国は、スペイン（38.2 万トン）、オランダ（14.6 万トン）、イタリア（14.1 万トン）、ポルトガル（10.6 万トン）、中国（10.4 万トン）の順。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 166.8%増の 6.4 百万トンの見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前年度から 17.7 ポイント増の 25.2%となる見込み。ロシアがウクライナに侵攻した 2021/22 年度の侵攻後数か月と同様に、黒海ルート経由の輸出が減少することから、国内生産量に占める輸出量の割合は低水準となり、在庫は増加すると見られている。

とうもろこしーウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	42.1	27.0	29.5 (28.0)	1.5	9.3	
消 費 量	8.4	5.2	5.5 (6.3)	-	5.8	
うち飼料用	7.2	4.0	4.5 (4.5)	-	12.5	
輸 出 量	27.0	27.0	20.0 (18.0)	0.5	▲ 25.9	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	7.6	2.4	6.4 (5.0)	1.0	166.8	
期末在庫率	21.5%	7.5%	25.2% (20.7%)	3.5	17.7	

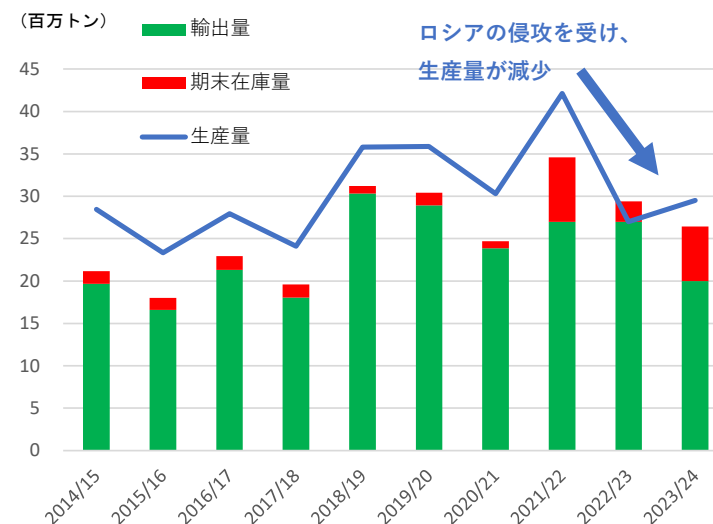
(参考)

収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	4.00 (4.06)	-	▲ 1.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.38 (6.91)	0.38	10.6

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)

IGC 「Grain Market Report」(19 October 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 11. 9) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

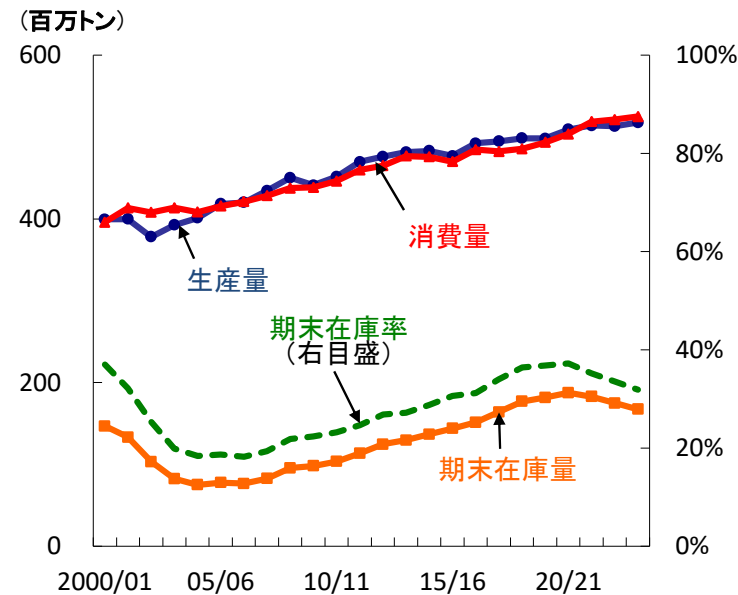
期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

2023/24 年度

・ブラジル等で上方修正も、インドネシア、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。しかし、史上最高の見込み。

・EU 等で下方修正されたものの、インド、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

・ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。



資料：USDA「PS&D」(2023. 11. 9)をもとに農林水産省にて作成

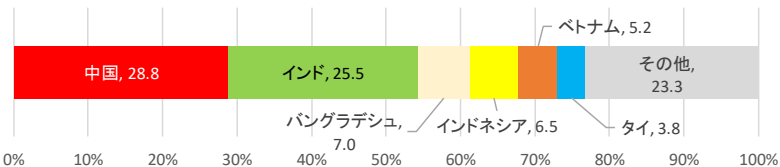
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

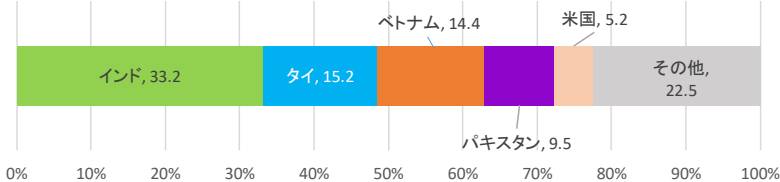
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	514.4	513.4	517.8	▲ 0.3	0.9
消 費 量	519.0	521.4	525.2	1.6	0.7
輸 出 量	56.9	53.9	52.7	0.4	▲ 2.3
輸 入 量	54.5	54.0	49.8	0.1	▲ 7.7
期末在庫量	182.8	174.8	167.4	▲ 0.1	▲ 4.2
期末在庫率	35.2%	33.5%	31.9%	▲ 0.1	▲ 1.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 November, 2023)

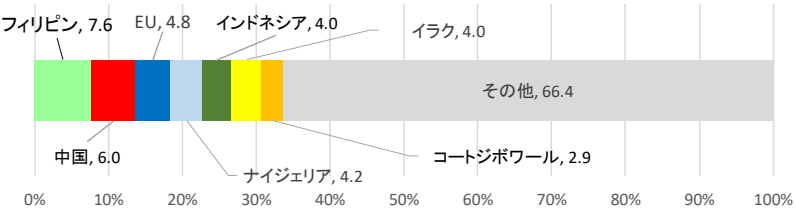
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(517.8百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(52.7百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(49.8百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 長粒種、中・短粒種ともに 11 月上旬で収穫が終了

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、現地調査に基づく単収のわずかな引下げから、前月予測よりわずかに下方修正されたものの、前年度比 37.1%増の 7.0 百万トンとなる見込み。特に 2 年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産量が 2.1 百万トンと、前年度比で 2.1 倍に回復することが要因。なお、長粒種の生産量は 4.8 百万トンと、前年度比で 1.2 倍。単収（8.64 もみトン／ヘクタール）は、2021/22 年度の史上最高値に匹敵する水準。

長粒種は、多くの州で平年より早いペースで 11 月 5 日の週に収穫が終了した。中・短粒種の主産地であるカリフォルニア州でも、作付けの遅れと 10 月の多雨から平年より収穫が遅れていたものの、11 月上旬にほぼ収穫は終了した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給量増加の見込みから、前年度比 11.3%増の 5.1 百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の実産量増加に伴う中・短粒種の輸入減少から、前年度比 2.4%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加と、それに伴う価格競争力の改善から、前年度比 33.8%増の 2.7 百万トンの見込み。2023/24 年度（8 月 1 日～10 月 26 日）の主な輸出先国はメキシコ（31.7 万トン）、イラク（16.4 万トン）、ハイチ（11.0 万トン）の順。

USDA「Rice Outlook」（2023.11.14）によれば、11 月 7 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、碎米 4 %混入）の価格は 760 ドル/トンと、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値が本年 1 月末より続いている（P.21 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。一方、地中海向けカリフォルニア米（1 等、碎米 4 %混入）である中粒種の価格は 1,000 ドル/トンと、前月より 100 ドル/トン、9 月初旬より 650 ドル/トン下落し、2021 年 5 月以来の安値となった。背景として、収穫が終了した中・短粒種の生産量増加見通しと、新穀の市場流入による価格下落がある。

期末在庫量は、生産量の下方修正から前月予測よりわずかに下方修正されたものの、前年度より 35.7%増の 1.3 百万トンの見込み。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

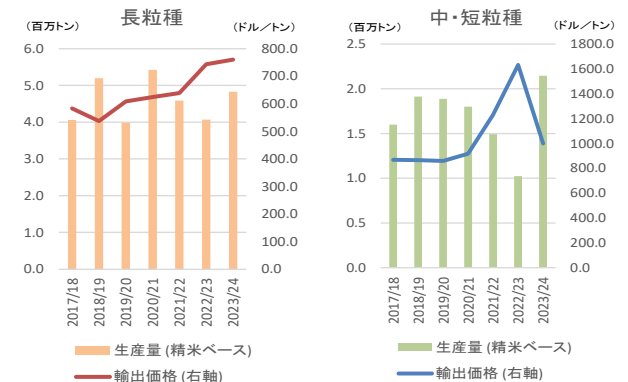
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	6.1	5.1	7.0	▲ 0.0	37.1
消費量	4.8	4.6	5.1	-	11.3
輸出量	2.7	2.0	2.7	-	33.8
輸入量	1.2	1.3	1.2	-	▲ 2.4
期末在庫量	1.3	1.0	1.3	▲ 0.0	35.4
期末在庫率	17.0%	14.4%	16.5%	▲ 0.4	2.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.15	-	30.7
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.64	▲ 0.0	4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November, 2023)

図：米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料：USDA「Rice Outlook」（2023.11.14）より。価格は年度内の平均価格。
なお、2023/24 年度は 2023 年 11 月の価格。

< インド > カリフ米の単収低下で前年度より減産も5年平均比で増加見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、132.0百万トンと、前年度比で2.8%減も、過去5年平均比で5.6%増の見込み。8月の極度の降雨不足により、インドのコメ生産量の85%を占めるカリフ米の単収の減少予想が減産の要因。単収は、4.21もみトン／ヘクタールと、前年度比で1.2%減も、過去5年平均比では2.3%増の見込み。

USDA及び現地情報によると、10月19日にモンスーンが終了し、インド全土が乾期に入った。一期作稲は収穫がほぼ終了し、二期作稲は生殖成長期にある。乾季米の播種も始まった。

インド農業農民福祉省によると、ラビ米の作付済面積は、11月17日時点で0.77百万ヘクタールと、前年同期(0.81百万ヘクタール)を下回る。また、2022/23年度のカリフ米最終収量予測(2023.10.18)は135.8百万トンと、前年度(129.5百万トン)及び5年平均(120.4百万トン)を上回る見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、11月初旬に政府が穀物無償配給計画を延長(2023年4月～翌年3月)したことから、前月予測から1.5百万トン上方修正され、前年度比2.2%増の117.0百万トンの見込み。政府の配給プログラムは8億人超が対象となっており、低所得世帯にコメ等が配給される見込み(2022/23年度は57百万トンとインド全体の消費量の半分に相当)。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量減少の予測に加え、輸出規制の強化から、前年度比13.6%減の17.5百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出国で、世界の輸出量の約33%を占める。2023年8月までの主な輸出先国はベナン(137.4万トン)、セネガル(91.6万トン)、サウジアラビア(90.3万トン)の順。

なお、インドは、①2022年9月9日に、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制するため、碎米を輸出禁止とするとともに、中近東向け等に輸出されるバスマティ米(香り米)やパーボイルド米(蒸米)以外のコメに輸出税を賦課(20%)。さらに、②バスマティ米・パーボイルド米以外の精米の輸出禁止(2023年7月20日～2024年12月31日)、③パーボイルド米の精米への輸出税賦課(20%、2023年8月25日～2024年3月31日)、④バスマティ米の精米に最低輸出価格導入(1,200ドル/トン、2023年8月27日～。10月26日から950ドル/トンに引下げ)。

USDA「Rice Outlook」(2023.11.14)によれば、インド産米(碎米5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが提示されていない。なお、規制前の7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた(P.21の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

2023/24年度の期末在庫量は、穀物無償配給計画の延長から、前月予測から0.5百万トン上方修正も、前年度比7.1%減の32.5百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)					
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	129.5	135.8	132.0 (133.0)	-	▲ 2.8
消 費 量	110.5	114.5	117.0 (113.0)	1.5	2.2
輸 出 量	22.0	20.3	17.5 (15.8)	-	▲ 13.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	34.0	35.0	32.5 (37.3)	0.5	▲ 7.1
期末在庫率	25.7%	26.0%	24.2% (28.9%)	0.1	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	46.28	47.83	47.00 (47.00)	-	▲ 1.7
単収(もみt/ha)	4.20	4.26	4.21 (2.88)	-	▲ 1.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November, 2023)、
IGC「Grain Market Report」(19 October, 2023) (単収は精米t/ha)

表: インドのコメ輸出規制(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	関税: 12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)	—
	最低輸出価格導入(1,200 ドル/トン→950ドル/トンに引き 下げ(2023.10.26～))	2023.8.27～
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25～ 2024.3.31
バスマティ米・パーボイ ルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。

※有機米は本措置の対象外。

資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 一期作稲は収穫終了で豊作の見込み、南部二期作晩稲の収穫は進展

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比2.1%増の149.0百万トンと、史上最高となる見込み。なお、東北部では、政府の大豆作付け推進政策の反動を受け、コメの作付面積が減少傾向にある。

農業農村部の農業状況調査によると、11月10日現在、一期作稲の収穫が終了し、南部の二期作晩稲の収穫は進んでいる。ほぼ豊作の見込みとのこと。

なお、二期作早稲米の収穫は終了した。国家統計局の「2023年早稲収量データ」(2023.8.23)によると、収穫面積は減少も、単収の増加から、総生産量は28.3百万もみトンと、前年から0.8%増加した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度比1.9%減の152.1百万トンの見込み。背景として、競売で販売される飼料用古米の減少(2021年及び2022年の半分以上の18.0百万トンの見込み)や、コメの国際価格の高騰等による輸入量減少、降雨過多で飼料用小麦が9月末まで大量に供給されたこと等があるとみられている。

2023/24年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、インドの輸出規制の影響を受けたコメの国際価格高騰から、前年度比31.5%減の3.0百万トンの見込み。中国は、主に飼料用とうもろこしの代替としての砕米に加え、もち米や香米をベトナム等アジア諸国から輸入している。これまでは、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は減少している。

中国海関統計によれば、2023年9月の輸入量は12.9万トン(前年同月比73.7%減)、1～9月の輸入量は214.7万トン(前年同期比58.4%減)となった。

なお、USDAによると、「一帯一路」政策における賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っている。

期末在庫量は、前月からの変更はなく、対前年度比2%減の104.5百万トンの見込み。インドの期末在庫量(32.5百万トン)と合計すると世界の期末在庫量の約82%を占める。

コメー中国

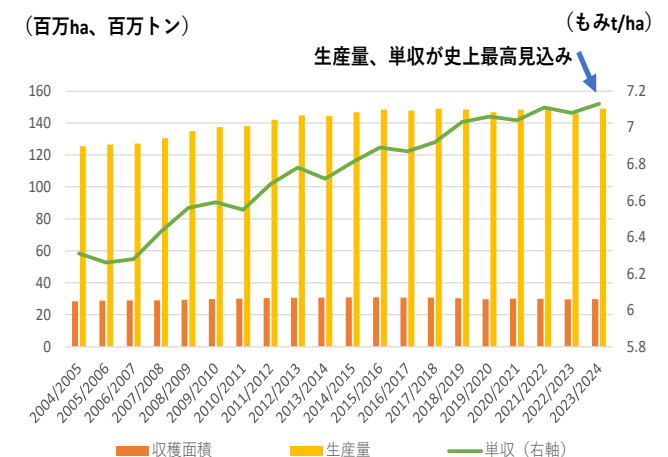
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位: 百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1
消 費 量	156.4	155.0	152.1 (151.0)	-	▲ 1.9
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸 入 量	6.0	4.4	3.0 (3.8)	-	▲ 31.5
期末在庫量	113.0	106.6	104.5 (104.8)	-	▲ 2.0
期末在庫率	71.3%	68.0%	67.8% (68.4%)	-	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (9 November, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (19 October, 2023) (単収は精米t/ha)

図： 中国の生産量、収穫面積、単収の推移
(2004/05－2023/24年度)



< タイ > 収穫期の雨季米は干ばつや豪雨で前年度より収量減少見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、本年5月の雨季の開始の遅れと、5～8月の降雨不足により、今後の乾季米向け灌漑用水の不足が見込まれることから、前年度比6.7%減の19.5百万トンの見込み。

2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、タイ政府による収穫面積予測の上方修正（11.07百万ヘクタールと史上最高となる見込み）等を受け、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

現地情報によると、10月の降雨量は、雨季米の主要生産地である北部、東北部、中部で例年を上回った。1～10月の年間累計降雨量も、中部では例年より20%以上少ないが、北部と東北部ではほぼ例年並みとなった。ただ、降雨の遅れによる収穫への影響を注視する必要がある。また、2023/24年乾季作へのエルニーニョ現象の影響に対する懸念も残っており、農業経済局は灌漑用水供給不足から、2023/24年乾季作の作付面積が前年比35%減の124万ヘクタールになると予測している。

アセアン食料安全保障情報システム(2023.11)によると、雨季米は現在、収穫期にある。本年6月～8月の干ばつや9月～10月の洪水の影響から、作付面積は前年度より1.8%減少し、単収も減少する見込み。雨季米は作柄が悪く、収量は5%減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少見込みから、対前年度比5.9%減の8.0百万トンの見込み。

2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比10.4%増の8.5百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～9月の輸出量は、前年同期比12.3%増の608.2万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の4.3万トンから大幅増の90.5万トンと、最大の輸出先となった。また、南アフリカが72.9万トン（前年同期57.8万トン）、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは72.6万トン（同109.8万トン）、米国は51.0万トン（同51.0万トン）のタイ米を輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.11.9）によれば、11月7日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、新穀の市場への流入による供給量増加から、前月から32ドル／トン下落し、563ドル／トンとなった（P.21の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

期末在庫量は、前月からの変更はなく、減産見込みから対前年度比28.9%減の2.3百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.9	19.5	(19.7)	-	▲ 6.7
消 費 量	12.7	12.7	12.5	(12.8)	-	▲ 1.6
輸 出 量	7.7	8.5	8.0	(8.7)	-	▲ 5.9
輸 入 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
期末在庫量	3.5	3.3	2.3	(3.1)	-	▲ 28.9
期末在庫率	17.3%	15.5%	11.4%	(14.6%)	-	▲ 4.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.60	(10.85)	-	▲ 4.2
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.79	(1.86)	-	▲ 2.4
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(9 November, 2023) IGC「Grain Market Report」(19 October, 2023) (単収は精米t/ha)						

表：タイの国別輸出量

(単位：万トン)				
国名		2022 年 1～9 月	2023 年 1～9 月	増減量
1	インドネシア	4.3	90.5	86.2
2	南アフリカ	57.8	72.9	15.2
3	イラク	109.8	72.6	-37.2
4	米国	51.0	51.0	0.1
5	マレーシア	11.0	25.8	14.8
6	中国	45.6	25.6	-20.0
7	日本	19.9	24.0	4.1
8	セネガル	17.5	19.0	1.5
9	カメルーン	10.9	16.1	5.2
10	ベニン	21.1	12.7	-8.4
計		541.8	608.2	66.4 (前年比12.3%増)

資料：タイ関税局（2023.11）

< ベトナム > 北部の雨季米は収穫中、南部は乾季米の播種を開始

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準を維持する見込みも、前年度よりわずかに増加し 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に緩やかな低下傾向にある。

2022/23 年度の実産量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、2021/22 年度比 1.1%増の 26.9 百万トンの見込み。単収は 0.03 もみトン/ヘクタール上方修正も、収穫面積の 0.06 百万ヘクタール下方修正が要因。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.11）によると、①北部では夏秋作（雨季米）が収穫期にあり、作付面積の 74.3%が収穫された。11 月中旬に収穫が終了する見込み。単収は、5.5 トン／ヘクタールと、前年と同水準の見込み。②南部の秋冬作（雨季米）は収穫期にあり、単収は 5.6 トン／ヘクタールと、温暖な気候と十分な灌漑用水から前年より増加する見込み。③メコンデルタ地域のいくつかの省では、乾季米（冬春作）の播種が開始されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、精米の輸出需要に対する供給量が不足していること等から、前年度比 9.5%減の 7.6 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実輸出量も、前月予測からの変更はなく、フィリピンによる史上最高の輸入量の継続見込みとインドネシアの今秋の追加需要見込みから、8.4 百万トンと前年度比 18.3%増の見込み。特にインドネシアは、エルニーニョ等によるコメの減産見込みや、燃料価格高騰による投入財費用の高騰から、国内コメ価格が上昇。価格抑制のための在庫放出に加え、低所得世帯へのコメ配給で、在庫が食料安全保障水準以下にまで低下。これを補うため、2023 年 1～12 月までに合計 350 万トンのコメを買い付ける見込み。本年 1～7 月までの輸入（130 万トン）のうち、ベトナムからの輸入は 54.7 万トン。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～10 月の輸出量は 705.3 万トンと、前年同期（608.5 万トン）に比べ 15.9%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（262.9 万トン）、インドネシア（102.9 万トン）、中国（88.4 万トン）、ガーナ（55.0 万トン）の順。特に、インドネシア向けが前年度比 18 倍。またフィリピン政府はコメの追加輸入（100 万トン）を指示しており、ベトナムからの輸入増加も見込まれる。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.11.9）等によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 11 月 7 日までの週の価格は、アフリカ、インドネシア、フィリピンからの旺盛な需要から、前月の価格から 60 ドル／トン上昇して 676 ドル／トンとなった。

期末在庫量は、2022/23 年度の実産量の下方向修正から、前月から 0.1 百万トン下方修正され、前年度比 25.0%減の 1.2 百万トンの見込み。

コマーベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.7	26.9	27.0 (28.0)	-	0.2
消 費 量	21.4	21.4	21.2 (21.7)	-	▲ 0.9
輸 出 量	7.1	8.4	7.6 (7.8)	-	▲ 9.5
輸 入 量	1.7	1.8	1.4 (1.1)	-	▲ 22.2
期末在庫量	2.7	1.6	1.2 (2.0)	▲ 0.1	▲ 25.0
期末在庫率	9.3%	5.4%	4.2% (6.8%)	▲ 0.2	▲ 1.2

(参考)
 収穫面積(百万ha) 7.10 7.10 7.15 (7.10) ▲ 0.01 0.7
 単収(もみt/ha) 6.01 6.07 6.05 (3.90) 0.02 ▲ 0.3
 資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
 「World Agricultural Production」 (9 November, 2023)
 IGC 「Grain Market Report」 (19 October, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA 「Grain : World Markets and Trade」 (2023.11.9) より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・南アフリカ等で下方修正されたものの、米国、ウクライナ、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

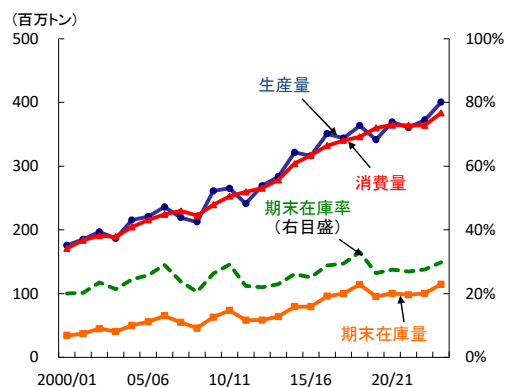
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・タイ等で下方修正されたものの、中国、ロシアで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・南アフリカ等で下方修正されたものの、ウクライナで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023. 11. 9）をもとに農林水産省で作成

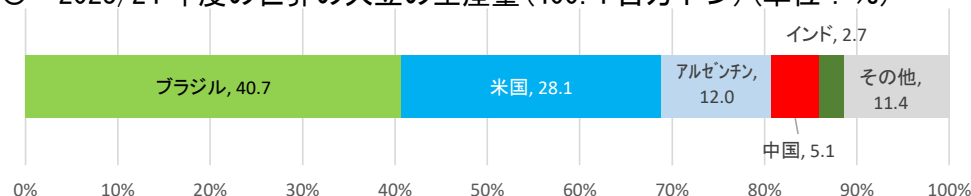
◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

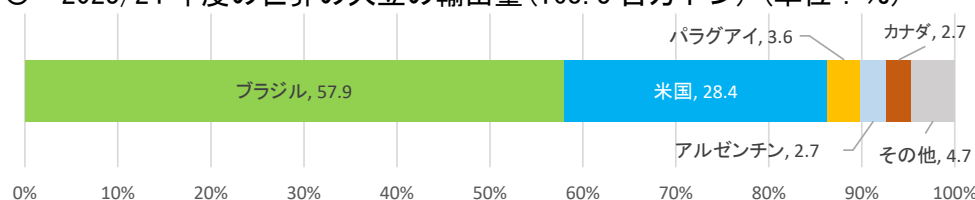
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	360.4	372.2	400.4	0.9	7.6
消 費 量	364.0	364.2	383.7	0.4	5.4
うち搾油用	314.5	313.4	329.5	1.0	5.1
輸 出 量	154.3	171.0	168.3	0.0	▲ 1.6
輸 入 量	155.6	165.1	165.8	-	0.4
期末在庫量	98.1	100.3	114.5	▲ 1.1	14.2
期末在庫率	26.9%	27.5%	29.8%	▲ 0.3	2.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 November 2023)

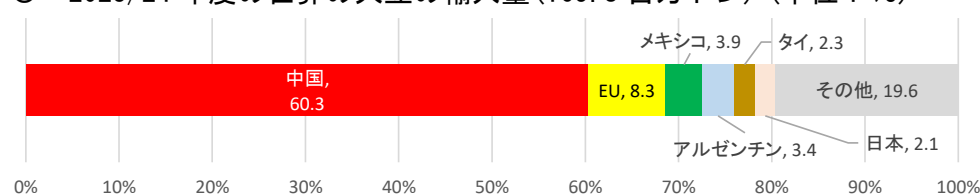
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量(400.4 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量(168.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量(165.8 百万トン) (単位：%)



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 5.1%増で史上最高

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始されている 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最高となる見通しから、前年度より 3.2%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2023.11.9) によれば、2023/24 年度の生産量は、前年度より 5.1%増の 162.4 百万トンと史上最高の見通し。生産量の増加は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることによるものとみられる。

USDA によれば、11 月 3 日現在、主要生産州の中西部のマット・グロッソ州の作付進捗率は 92%と、前年度同期 (96%)、過去 5 年平均 (96%) を下回っている。11 月上旬、北部及び中西部では高温乾燥となり、生育初期の成長に悪影響を与えるとみられる。また、中西部の乾燥、南部の降雨過多による作付け遅延により、大豆の収穫が遅れるとの懸念がある。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料向け的大豆粕需要が増加することから、前年度より 5.1%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が 2 年連続で史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 2.1%増の 97.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～10 月の輸出量は 92.8 百万トンで、前年同期 (74.3 百万トン) に比べ 24.9%増となっている。輸出先は、中国 (66.6 百万トン)、アルゼンチン (3.9 百万トン)、スペイン (2.7 百万トン) の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ港と南部のサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。南北鉄道が稼働することで、最大生産州のマット・グロッソ州等の内陸部で生産された大豆・とうもろこしを輸出港まで効率的に輸送できるようになった。さらに、マット・グロッソ州から南部サントス港まで輸出する鉄道の拡張工事も行われており、これらの改善が輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

大豆ーブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	130.5	158.0	163.0 (160.0)	-	3.2
消 費 量	54.0	56.8	59.7 (59.6)	-	5.1
うち搾油用	50.7	53.0	55.8 (56.3)	-	5.2
輸 出 量	79.1	95.5	97.5 (99.5)	-	2.1
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.4)	-	181.3
期末在庫量	27.6	33.4	39.7 (3.9)	2.0	18.7
期末在庫率	20.7%	22.0%	25.2% (2.4%)	1.3	3.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	44.10	45.60 (41.49)	-	3.4
単収(t/ha)	3.14	3.58	3.57 (3.86)	-	▲ 0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2023)
IGC「Grain Market Report」(19 October 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2023/24年度の大豆の作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 25.9(百万t)								
冬とうもろこし	作付 4.1(百万ha)												作付 17.0(百万ha)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等												収穫 162.4(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2023.11.9)

＜ アルゼンチン ＞ 2022/23 年度は、干ばつによる減産を受け輸入が史上最高に

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を強く受けた前年度から回復する見通しから、92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023.11.16）によれば、2023/24 年度の作付予定面積は 17.3 百万ヘクタールと、前年度（16.2 百万ヘクタール）より 6.7%増の見込み。

USDA によれば、11 月上旬、中央部・北東部において、長期的な乾燥を和らげる降雨があった。アルゼンチン政府によれば、11 月 9 日現在、作付進捗率は 29%と、干ばつの影響を受けた前年度を上回っているものの、降雨不足のために例年より大幅に遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 14.2%増の 41.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 37.1%減の 5.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前回予測から 0.1 百万トン下方修正され、干ばつによる減産で代替需要が増加したことにより、9.1 百万トンで史上最高の見込み。アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～9 月の輸入量は 881.8 万トンで、前年同時期（307.1 万トン）の 2.9 倍。

現地情報によると、2022/23 年度上半期の大豆圧搾量は 15.9 百万トンと、干ばつによる国内供給減を受けて過去 18 年間で最低の水準となった。来年 3 月頃に開始する 2023/24 年産の収穫まで、加工工場の稼働のために輸入等で大豆を確保できるかが課題となっている。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 9.8%増の 4.6 百万トンの見込み。2023 年

1～9 月の輸出量は、110.0 万トンで前年度（244.9 万トン）より 55%減。輸出先は、中国（91.3 万トン）、米国（5.8 万トン）、チリ（1.6 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。

2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

2023 年 11 月 19 日に実施された大統領選挙の結果、左派政権に代わり右派のミレイ氏が当選しており、今後の輸出税への影響など、注視が必要。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	43.9	25.0	48.0 (44.0)	-	92.0
消 費 量	46.0	36.6	41.8 (42.7)	-	14.2
うち搾油用	38.8	30.3	34.5 (38.9)	-	13.8
輸 出 量	2.9	4.2	4.6 (5.1)	-	9.8
輸 入 量	3.8	9.1	5.7 (5.6)	-	▲ 37.1
期末在庫量	23.9	17.2	24.6 (3.9)	▲ 0.3	42.7
期末在庫率	48.9%	42.2%	53.0% (8.1%)	▲ 0.6	10.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.40 (15.87)	-	13.9
単収(t/ha)	2.76	1.74	2.93 (2.77)	-	68.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (19 October 2023)

表：アルゼンチンの大豆輸入量、輸入先国
(7～9月は輸入ペースが落ちたものの、
対前年度同時期比で輸入量が大きく増加)

国名	2022/23年度 (2023年 1～9 月)		2021/22年度 (2022年 1～9 月)	対前年度 同時期比 (%)
	輸入量 (万t)	シェア (%)	輸入量 (万t)	
ブラジル	396.4	45.0	26.1	1,417.9
パラグアイ	447.9	50.8	159.5	180.9
ボリビア	31.9	3.6	37.5	-14.9
ウルグアイ	3.0	0.3	77.4	-96.1
その他	2.6	0.3	6.6	-60.6
計	881.8	100.0	307.1	187.1

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）のデータをもとに
農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

中国政府は、大豆の作付け拡大に向けた取組等を引き続き進めている。

11 月上旬現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では収穫は終盤を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、搾油需要が前月予測より増加する見通しから前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、国内の大豆粕及び食料の需要が増加することにより、前年度より 3.4%増の 120.5 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 0.8%減少となるものの 100.0 百万トンと高水準を維持している。

農業農村部によれば、2023 年 1 ～ 9 月の輸入量は、前年同時期より 6.4%増の 7,882.3 万トン。内訳は、ブラジル (5,487.7 万トン)、米国 (2,010.7 万トン)、アルゼンチン (154.7 万トン) の順となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 9 月号」によれば、9 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,060 元/トン）から上昇し、5,100 元/トンとなった。9 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月並みの 5,740 元/トンとなった。市場は新穀旧穀の端境期にあり、新穀の供給を受けて、取引業者は慎重に在庫を補充しているため、国内価格は横ばいで推移している。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、消費量の引上げ等から前月予測から 3.5 百万トン下方修正され、過去最高だった前年度より 0.3%減の 33.7 百万トンの見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測から 3.0 ポイント下方修正され、前年度より 1.0 ポイント減の 27.9%となる見込み。

報道情報によると、10 月 23 日、中国の輸入企業は、米国アイオワ州で開催された米中持続的農業貿易フォーラムにおいて 10 億ドル単位の米国産農産物の買付け契約に合意した。対象品目は主に大豆であり、他の穀物（ソルガム、小麦、とうもろこし）も含まれる。

大豆－中国

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	16.4	20.3	20.5 (21.5)	-	1.1
消 費 量	108.4	116.5	120.5 (120.7)	0.5	3.4
うち搾油用	87.9	95.0	98.0 (100.3)	1.0	3.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	11.1
輸 入 量	90.5	100.9	100.0 (102.0)	-	▲ 0.8
期末在庫量	29.3	33.8	33.7 (40.8)	▲ 3.5	▲ 0.3
期末在庫率	27.0%	29.0%	27.9% (33.8%)	▲ 3.0	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45 (8.40)	-	2.1
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96 (1.95)	-	▲ 1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (9 November 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (19 October 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2023年 9 月			2023年 1 月～2023年 9 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	688.0	96.2	ブラジル	5,487.7	69.6
米国	13.4	1.9	米国	2,010.7	25.5
ロシア	9.4	1.3	アルゼンチン	154.7	2.0
タンザニア	2.4	0.3	ロシア	102.1	1.3
エチオピア	0.9	0.1	カナダ	94.5	1.2
ベナン	0.7	0.1	エチオピア	9.7	0.1
その他	0.6	0.1	その他	22.9	0.1
計	715.4	100	計	7,882.3	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 作付面積の増加により、生産量は前年度から 2.4%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.11.21）によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.4%増、過去 5 年平均から 3.0%増の 6.7 百万トンの見込み。単収が 2.95 トン/ヘクタールと、高水準の単収だった前年度より低下するものの、収穫面積が 2.28 百万ヘクタールと前年度より 7.6%増と大幅に増加することによる。

収穫面積が大幅に増加するのはマニトバ州であり、マニトバ州穀物報告によると、2022 年の良好な価格と史上最高の収量を受けて、農家が作付面積を増加させたとみられる。

AAFC によれば、11 月 21 日現在、カナダ東部では、大豆の収穫は概ね終了している。温暖な気候と良好な水分状況により生育状況は良好だった。

カナダの大豆生産は、小麦や菜種と異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアを占める。このほか、オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.5%増の 2.7 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2023/24 年度（2023 年 8 月～2024 年 7 月）の 2023 年 8～9 月の輸出量は 0.02 万トンで、前年度（4.4 万トン）を下回っている。国別では、全量が米国向けとなっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地がカナダ東部のため、主要な輸出ルートは、通常アジア向けは五大湖を通過してパナマ運河経由で輸出されるルートとなっている。

AAFC によれば、2023/24 年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出増により前年度から 13.6%減の 0.3 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.2	6.5	6.7 (6.7)	-	2.4
消 費 量	2.3	2.6	2.7 (2.4)	-	2.5
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.9)	-	6.4
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.8)	-	7.3
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-
期末在庫量	0.4	0.6	0.6 (0.3)	-	-
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.0% (4.5%)	-	▲ 0.5

(参考)

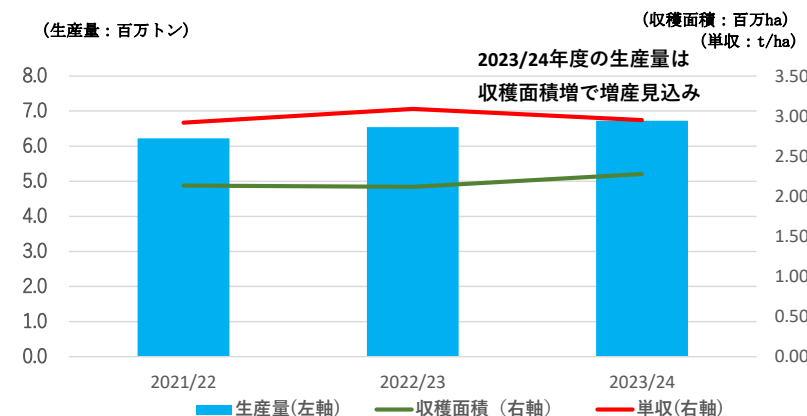
収穫面積(百万ha) 2.08 2.12 2.25 (2.28)

単収(t/ha) 2.99 3.09 2.98 (2.95)

資料：USDA 「PS&D」 「World Agricultural Production」 (9 November 2023)

AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (21 November 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (2023.11.21) をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

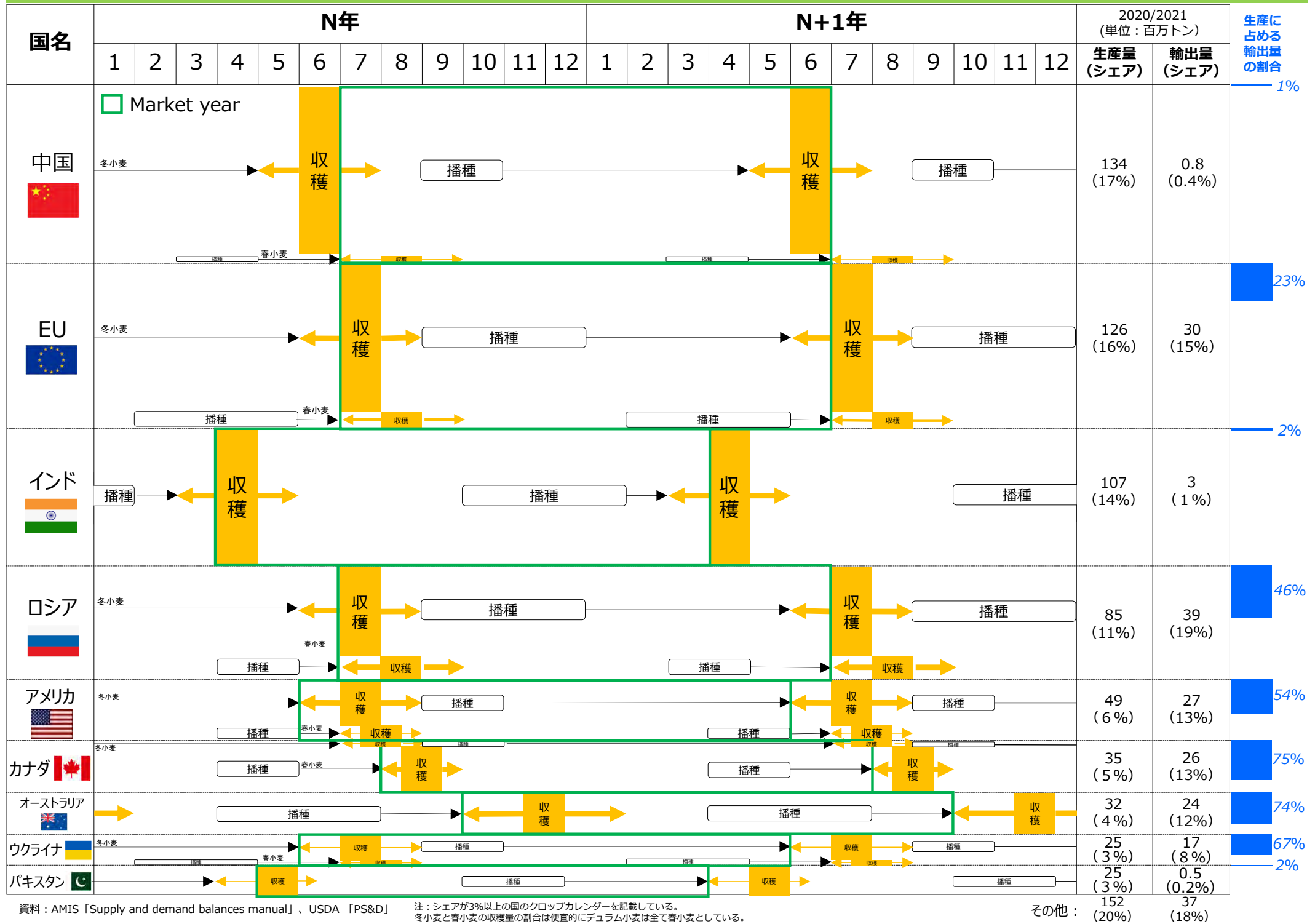
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



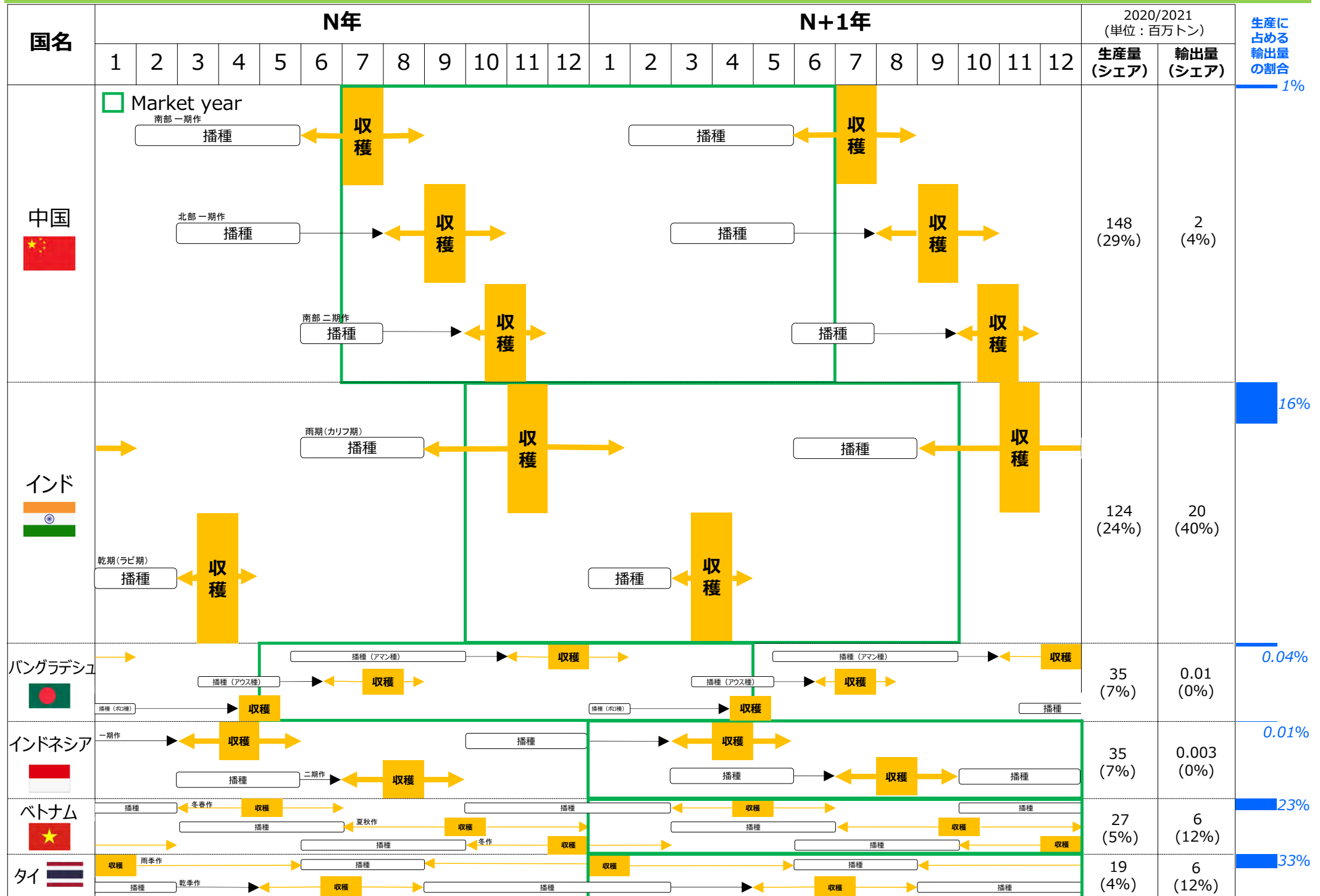
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：

主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

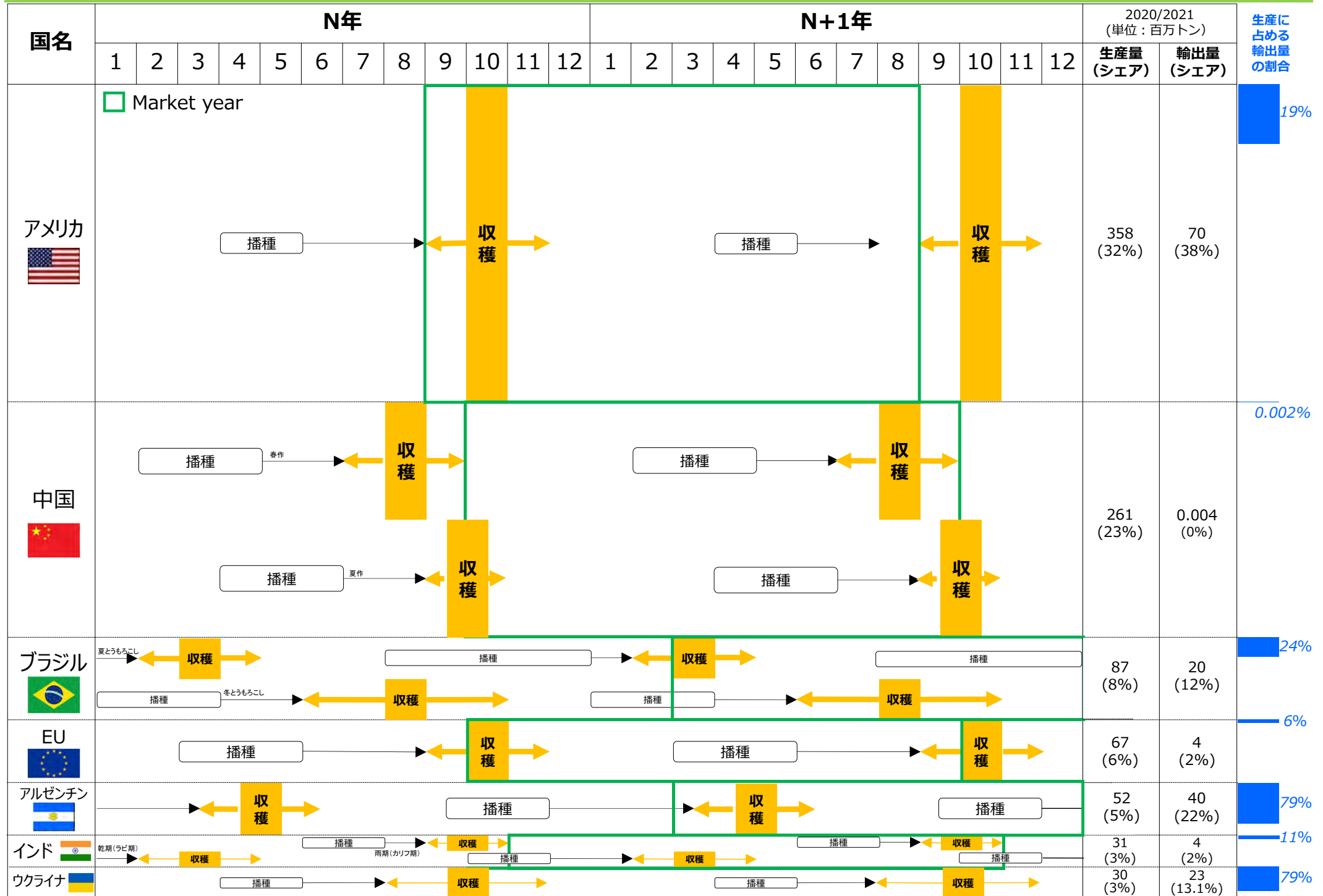
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



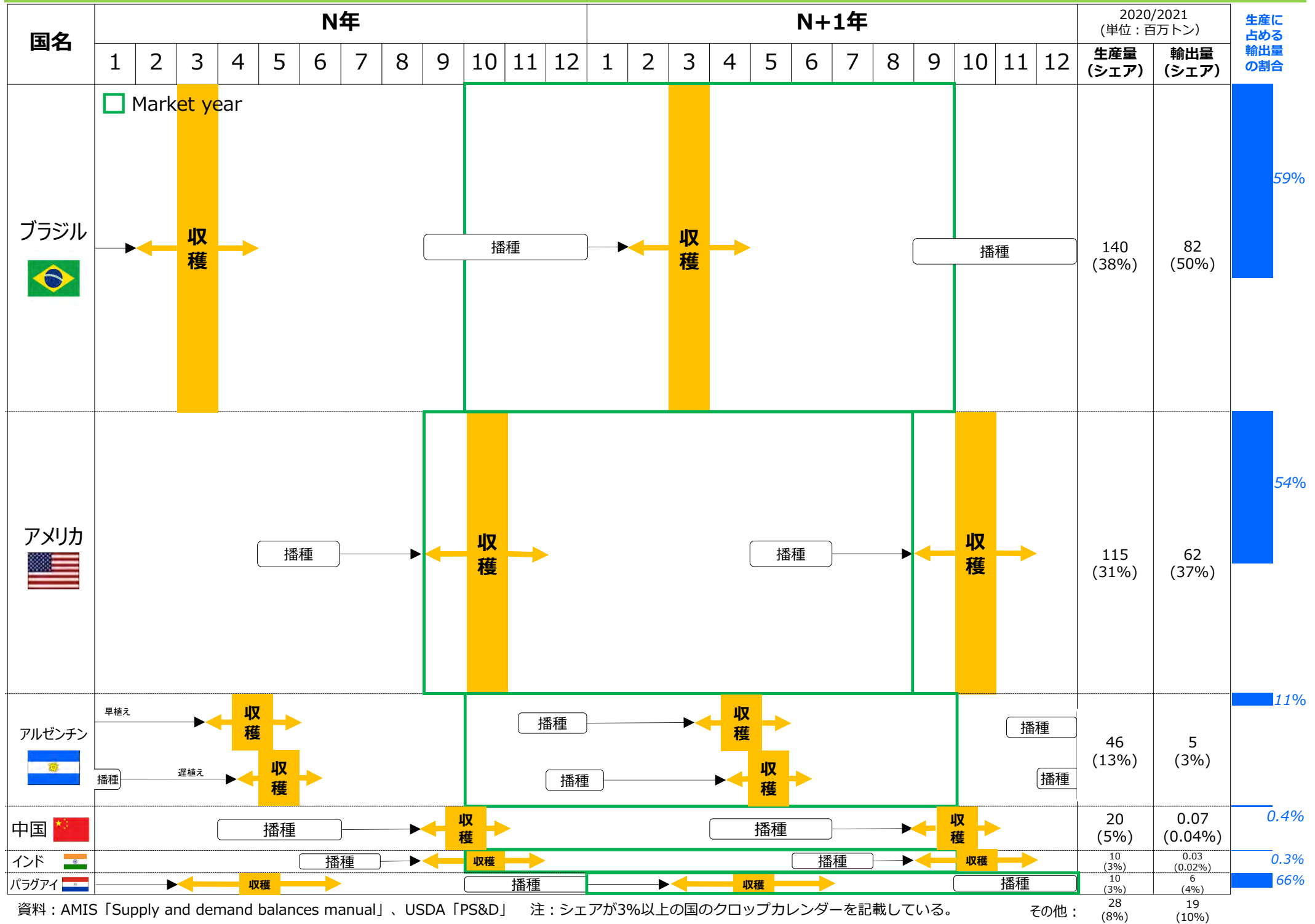
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

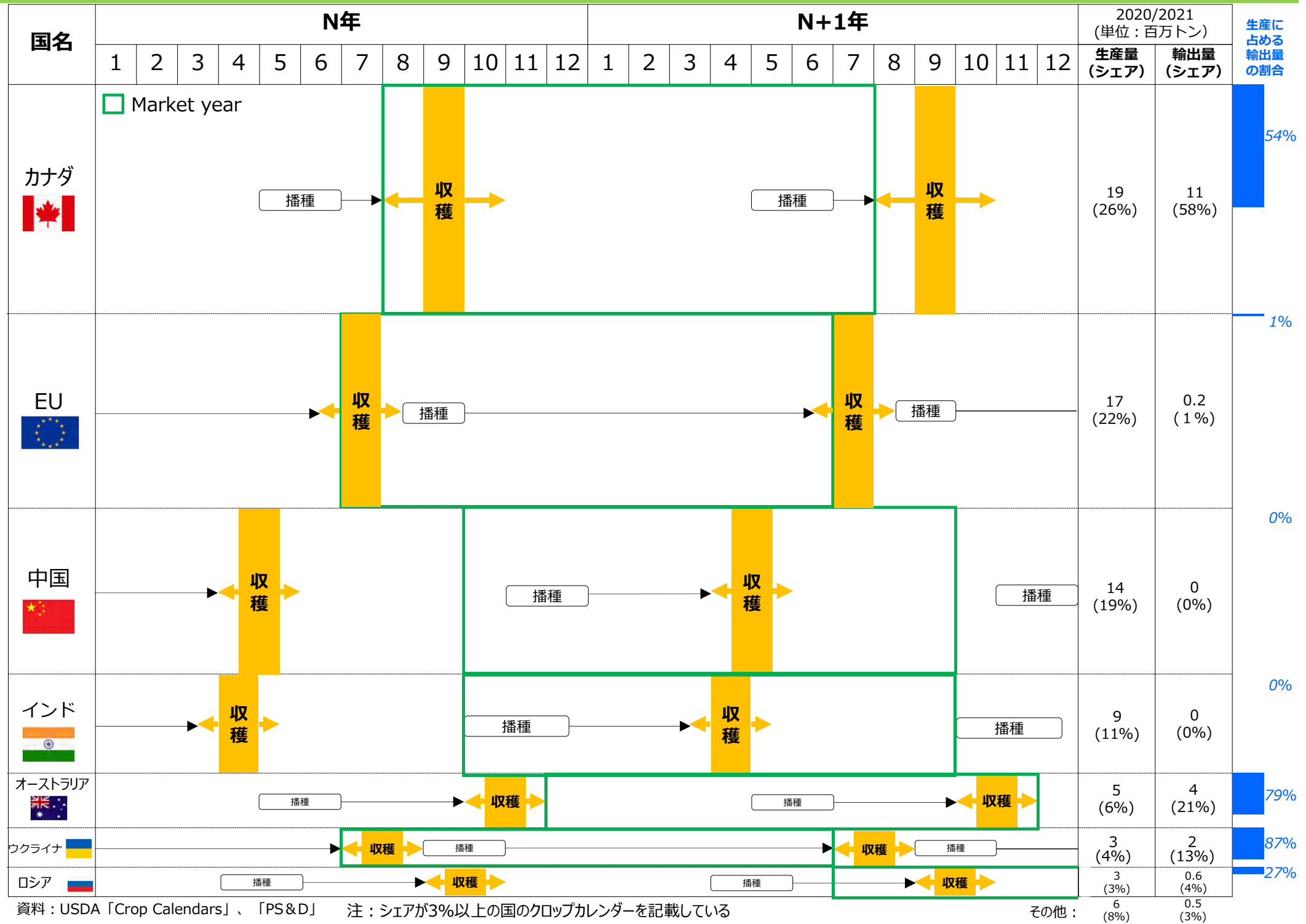
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

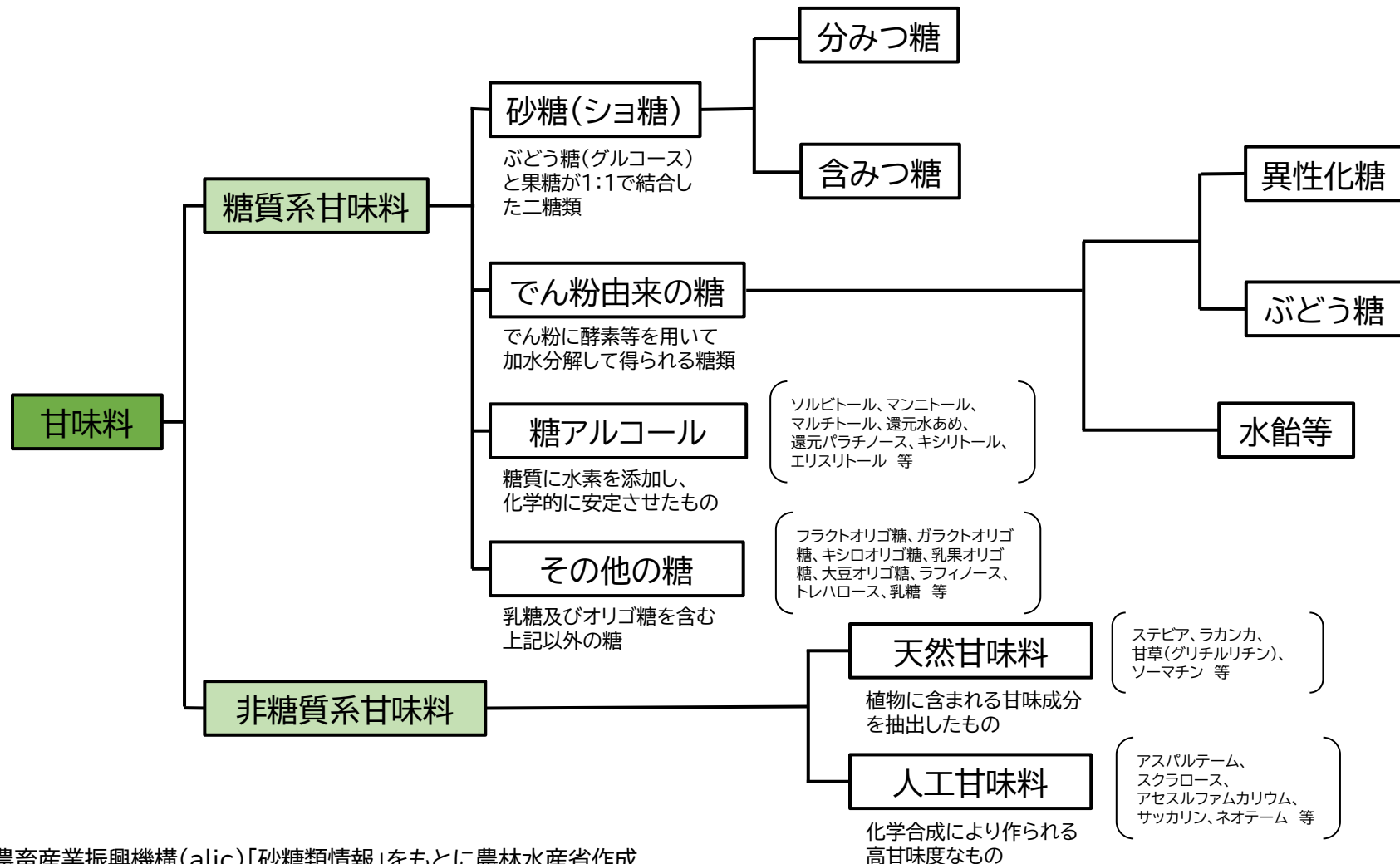


第29号特別分析トピック：我が国と世界の砂糖をめぐる動向

我が国と世界の砂糖をめぐる動向＜基礎編＞

甘味料の利用上の分類

- 甘味料は、炭水化物に含まれる「糖質系甘味料」と、それ以外の「非糖質系甘味料」の大きく2つに分類。
- 糖質系甘味料は、利用上の観点から、結合するぶどう糖(グルコース)や果糖の数などにより、「砂糖」、「でん粉由来の糖」、「糖アルコール」及び「その他の糖」に分類。非糖質系甘味料は、「天然甘味料」と「人工甘味料」に分類。



甘味料の化学的な分類

○ 糖質系甘味料は、化学的に分類すると、「単糖類」、「少糖類」及び「糖アルコール」に分類され、砂糖は二糖類(少糖類)、異性化糖は単糖類に分類。

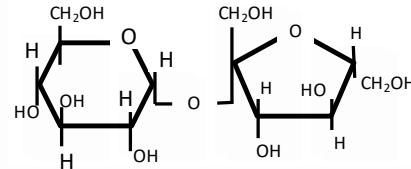
甘味料	糖質系甘味料（＝炭水化物の一部）	単糖類 (糖質の中で最も簡単な構造)	ぶどう糖(グルコース)、果糖(ラクトース)、ガラクトース	
			異性化糖 (ぶどう糖と果糖が混合した液体状のもの)	
		少糖類 (単糖類が2～4個結合したもの)	二糖類 (単糖類が2個結合したもの)	シヨ糖＝砂糖(ぶどう糖と果糖が結合) ラクトース＝乳糖(ぶどう糖とガラクトースが結合) マルトース＝麦芽糖(2つのぶどう糖が結合)
			三糖類 (単糖類が3個結合したもの)	ケストース、ラフィノース 等
			四糖類 (単糖類が4個結合したもの)	スタチオース 等
		糖アルコール (糖質に水素を添加し、化学的に安定させたもの)	ソルビトール、マンニトール、マルチトール、還元水あめ、キシリトール、還元パラチノース、エリスリトール 等	
	非糖質系甘味料	天然甘味料 (植物に含まれる甘味成分を抽出したもの)	ステビア、ラカンカ、甘草(グリチルリチン)、ソーマチン 等	
		人工甘味料 (化学合成により作られる高甘味度なもの)	アスパルテム、スクラロース、アセスルファムカリウム、サッカリン、ネオテム 等	

砂糖とは

- 糖質系甘味料のうち、砂糖(ショ糖)は、ぶどう糖と果糖が1:1で結合したもの。体内でぶどう糖と果糖に分解・吸収。
- 砂糖は、さとうきび、てん菜の搾り汁から糖みつを分離した「分みつ糖」と、糖みつを分離しない「含みつ糖」に大きく分類。このうち、分みつ糖は、世界ではグラニュー糖としての流通が主流である一方、日本では多様な種類が存在。

砂糖(ショ糖)

ぶどう糖と果糖が1:1で結合したもの



分みつ糖



グラニュー糖

結晶が上白糖よりやや大きく、サラサラとしたクセのない甘みを持つ。コーヒー、紅茶に最適。



上白糖

日本人好みのソフトな風味。しっとり感を出すためビスコ(糖液)をかけている。何にでも合い、国内の砂糖消費量の約半分を占める。



中ざら糖

純度が高く、表面にカaramelをかけているため黄褐色であり、独特の風味がある。醤油との相性が良く、煮物、すき焼きなどに最適。



液糖

溶かす手間が省けるため、ガムシロップ、清涼飲料、ソース、焼き肉のたれなどに使用。



白ざら糖

結晶がグラニュー糖より大きくクセがなく上品な味。純度が高く、光沢がある。高級な菓子やゼリー、綿飴、飲料に最適。



角砂糖

グラニュー糖を固めたもので、コーヒー、紅茶に使用。1個の重量が決まっていて、料理や菓子作りに便利。



三温糖

上白糖やグラニュー糖の結晶を取り出した後の糖液をさらに煮詰めて作るため黄褐色となっている。特有の風味を持ち甘さも強く、煮物、佃煮に最適。



氷砂糖

ゆっくり時間をかけて結晶を大きくした砂糖。溶けるのに時間がかかるため果実酒用に最適。

含みつ糖



和三盆

日本の伝統的製法で作る砂糖。結晶が非常に小さく独特の風味を持つため、和菓子の原料として珍重。香川県や徳島県などで生産。



黒糖(黒砂糖)

さとうきびの搾り汁をそのまま煮詰めたもの。濃厚な甘さと強い風味がある。



加工黒糖

原料糖や糖みつ等に黒糖を加えて加工したもの。黒糖と外見が似ており、濃厚な甘さと強い風味がある。



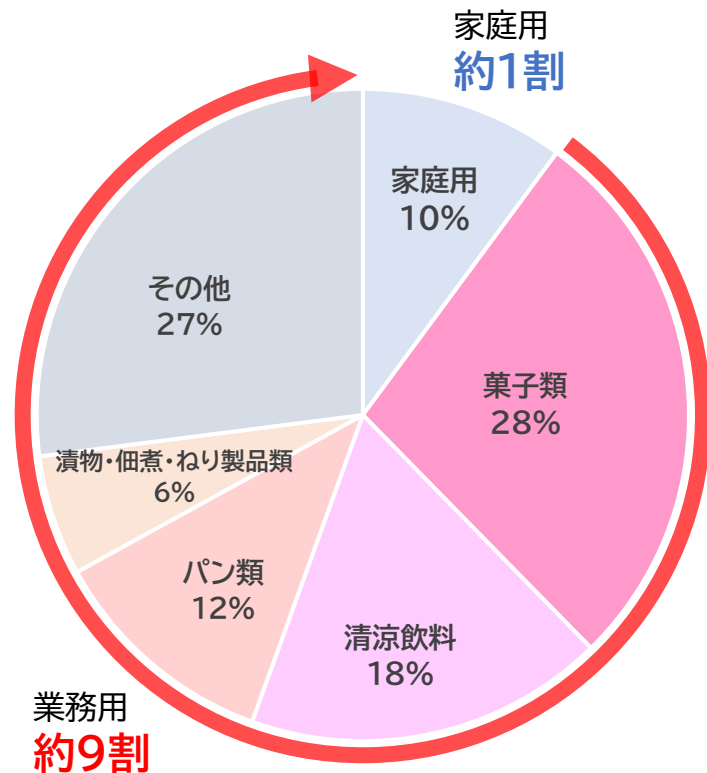
赤糖

原料糖や糖みつ等を主原料に加工したもの。糖みつ分を多く含み、特有の風味を持ち甘さも強い。煮物、佃煮などに最適。

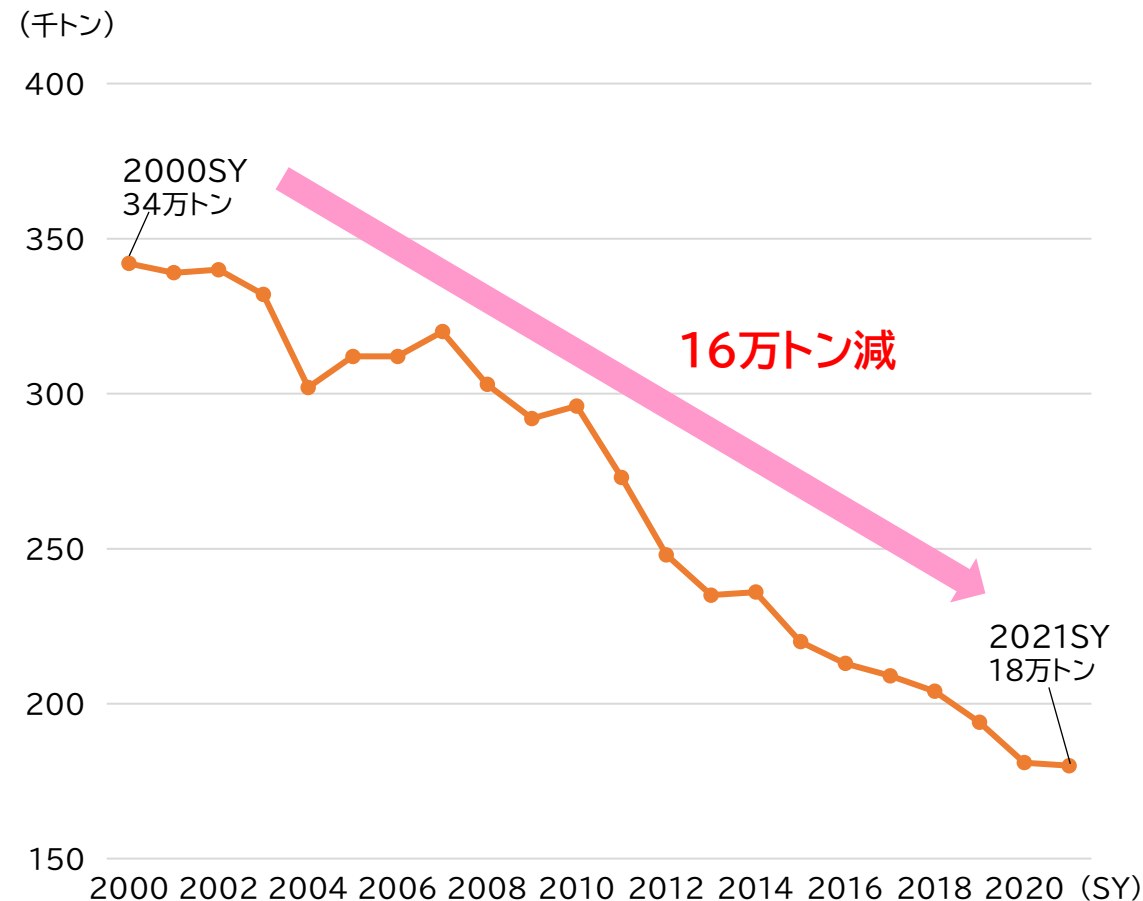
国内における砂糖の用途

- 国内における砂糖の消費量は、家庭用が約1割、業務用が約9割。
- 業務用のうち、用途別消費量の1位は菓子類、2位は清涼飲料、3位はパン類。
- 砂糖の消費量は全体として減少傾向。特に、家庭用の砂糖消費量は、この20年間で約16万トンと大きく減少。

砂糖の用途別消費量の割合(2021年度)



家庭用砂糖の消費動向



出典：農林水産省「砂糖及び異性化糖の需給見通し」

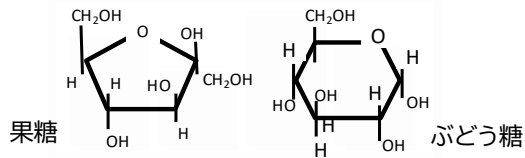
注：SY(砂糖年度)は当該年の10月1日から翌年の9月30日までの期間

異性化糖とは

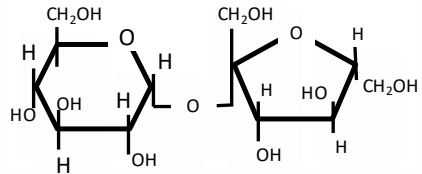
- 糖質系甘味料のうち、でん粉由来の異性化糖は、ぶどう糖と果糖が混合した液糖。
- でん粉を加水分解し液状にしたものを糖化させてぶどう糖を作り、その一部をより甘味度の高い果糖に異性化することで製造。この方法により、果糖を安価に製造することが可能となった。

異性化糖

ぶどう糖と果糖が混合した液体状のもの



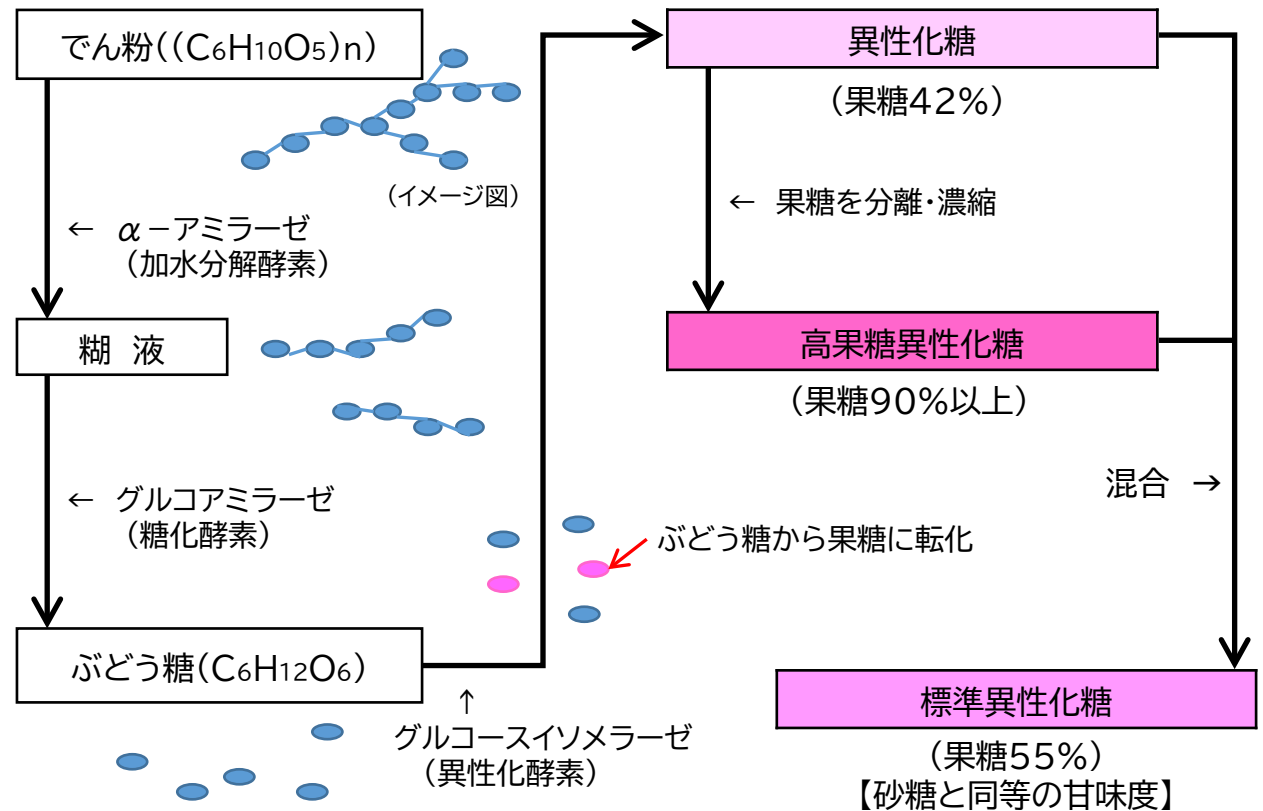
<参考>砂糖(ショ糖)



異性化液糖の分類(JAS規格)

ぶどう糖果糖液糖	果糖50%未満
果糖ぶどう糖液糖	果糖50%以上90%未満
高果糖液糖	果糖90%以上

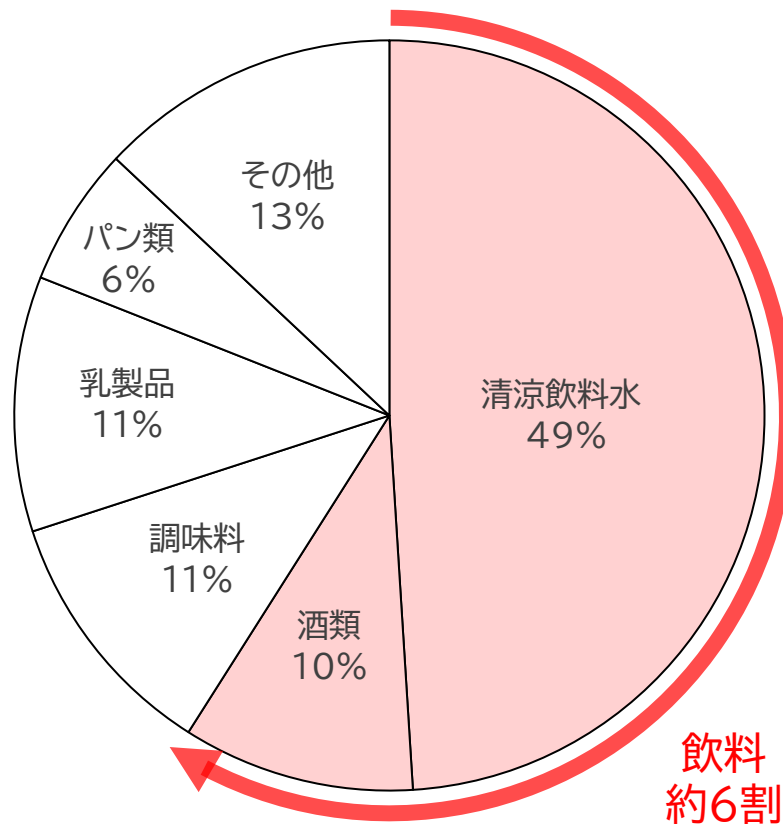
異性化糖の製造工程



異性化糖の特徴・用途

- 液体の異性化糖は、砂糖のように溶解する手間がかからず、また、低温で甘味が増しシャープに効くこと等の特徴。このため、清涼飲料等の飲料原料としての利用が約6割。
- 異性化糖は、近年、砂糖に比べ安価に製造可能。他方で、液体であるため運搬が不便であることや、変質しやすく保存期間が短いといった特徴。

異性化糖の用途別消費量の割合(2021SY)



異性化糖の特徴

甘味度

- ・ 砂糖(ショ糖)よりも甘みがシャープに効き、速やかに消失。
- ・ 濃度が高く温度が低い程甘味度が高く評価。(5℃が最高)
- ・ 果糖分の含有量を調整することにより、甘味度の調整が可能。
(ショ糖の甘み100とした場合、果糖120-170、ぶどう糖65-80)

液状

- ・ 水分を25%含む液状であるため、そのまま消費しようとする場合、その用途が限定。
- ・ ローリーやタンクでの運搬、保存。

価格優位性

- ・ 異性化糖は、近年、砂糖に比べ安価に製造可能。

その他異性化糖の性質

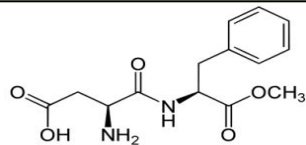
- ・ 砂糖(ショ糖)に比べて結晶しにくく安定性あり。
- ・ 吸湿性が大きく保水能力・耐乾性求められる製品に向く。
- ・ 砂糖(ショ糖)に比べて浸透圧が高く、防カビ効果。
- ・ 果糖とぶどう糖は耐熱性が弱いため、加熱により褐変しやすい。

主な人工甘味料・天然甘味料の特徴・用途

- 非糖質系甘味料のうち、人工甘味料は、化学合成により作られた甘味料で、食品衛生法で規制されている食品添加物を指す。また、人工甘味料は、砂糖に比べて歴史が浅い甘味料。
- 天然甘味料は、植物の葉等に含まれる甘味料成分を抽出したもの。
- 用途は、菓子類全般で利用されているが、それぞれの甘味料の特徴に応じて使い分けられ、天然甘味料の一部では、卓上調味料としても利用。

人工甘味料

アスパルテーム (砂糖の200倍の甘味度)



アスパラギン酸とフェニルアラニンという二つのアミノ酸を結合させて製造。昭和58年に食品添加物に指定。

【特徴】

苦みが少なく後味がすっきりとしており、コーヒーや医薬品等の苦みを隠す効果がある。

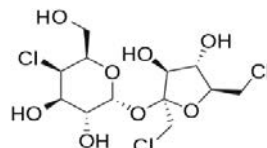
【用途】

キャンディー・グミ・チューインガム、氷菓、スナック菓子類、ビスケット類 等

【輸入量】

91トン(砂糖換算18千トン)
(2021SY)

スクラロース (同600倍)



砂糖を原料とする甘味料で、砂糖に塩素原子を3個加えて製造。平成11年に食品添加物に指定。

【特徴】

砂糖に近い、まろやかな甘味。

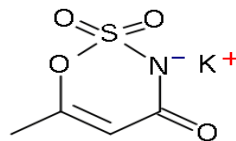
【用途】

スナック菓子類、清涼飲料水、キャンディー・グミ・チューインガム、はっ酵乳・乳酸菌飲料、氷菓、アイスクリーム類、パン類 等

【輸入量】

76トン(砂糖換算46千トン)
(2021SY)

アセスルファムカリウム (同200倍)



酢酸由来のジケテンと硫酸由来のサルファミン酸の化合物に、三酸化硫黄及び水酸化カリウムを反応させて製造。平成12年に食品添加物に指定。

【特徴】

甘みを速く感じ、後味のない甘味。熱や酵素に対し安定性が高く、水溶液中でも安定。

【用途】

キャンディー・グミ・チューインガム、清涼飲料水、プリン・ゼリー類、アルコール飲料、レトルトパウチ食品 等

【輸入量】

621トン(砂糖換算124千トン)
(2021SY)

天然甘味料

ステビア (同10～300倍)

ステビア葉

↓

成分の抽出

↓

精製・濃縮・結晶化

【特徴】

清涼感のある甘味。単位当たりのカロリーは砂糖と同様だが、高甘味度のため少量で済み、カロリーの抑制が可能。

【用途】

漬物、佃煮・珍味類、水産練製品、飲料、ヨーグルト類 等

【輸入量】

190トン
(2019年)

ラカンカ (同300～400倍)

羅漢果

↓

成分の抽出

↓

遠心分離・タンパク質除去・濃縮

【特徴】

雑味のない砂糖に近い甘味質。中国桂林地方で自生するウリ科の植物で、古くから民間薬として利用。

【用途】

卓上調味料、飲料、スナック、デザート、パン 等

【輸入量】

—

我が国と世界の砂糖をめぐる動向＜国内編（生産・製造・流通）＞

砂糖の原料と産地

- 砂糖は、「てん菜」と「さとうきび」を原料作物として製造。
- てん菜は、畑作における連作障害を避けるために輪作が不可欠な中、北海道畑作の輪作体系を構成する作物として重要。十勝では4輪作、オホーツクでは3輪作の中で作付け。
- さとうきびは、鹿児島県南西諸島や沖縄県の台風常態地帯において、自然災害への高い耐性を有する作物として、代替の効かない基幹作物として重要。

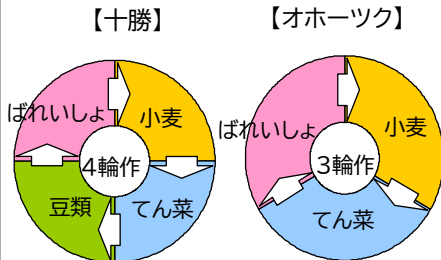
てん菜

◆ てん菜の位置付け(2022)

	農家戸数に占める てん菜を作付けする農家の割合	畑面積に占める てん菜を作付けする 栽培面積の割合
北海道	20%	13%

出典：農家戸数は農業構造動態調査、てん菜農家戸数は北海道庁調べ
：作付面積は作物統計の畑(普通畑)、てん菜栽培面積は北海道庁調べ

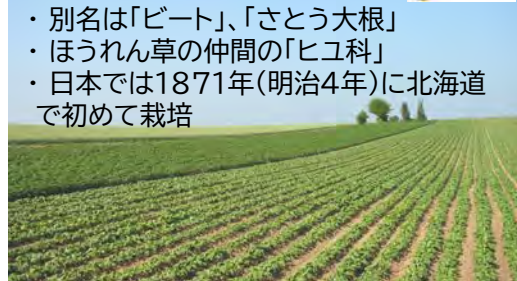
◆ 北海道畑作の輪作体系



畑作では、同じ土地に同じ作物を作り続けると、収量の低下や病気になりやすいなどの「連作障害」が起きるため、いくつかの作物を組み合わせで栽培。

◆ 北海道のてん菜畑

- ・ 日本では北海道で栽培
- ・ 海外では、フランス、ドイツ、ロシア等で栽培
- ・ 別名は「ビート」、「さとう大根」
- ・ ほうれん草の仲間の「ヒユ科」
- ・ 日本では1871年(明治4年)に北海道で初めて栽培



さとうきび

◆ さとうきびの位置付け(2022)

	農家戸数に占める さとうきび農家の割合	畑面積に占める さとうきび栽培面積の割合
鹿児島県 南西諸島	70%	45%
沖縄県	84%	48%

出典：農家戸数は農林業センサス、さとうきび農家戸数は鹿児島県及び沖縄県調べ
：作付面積及びさとうきび栽培面積は作物統計調べ

◆ 台風被害を受けた さとうきびの再生



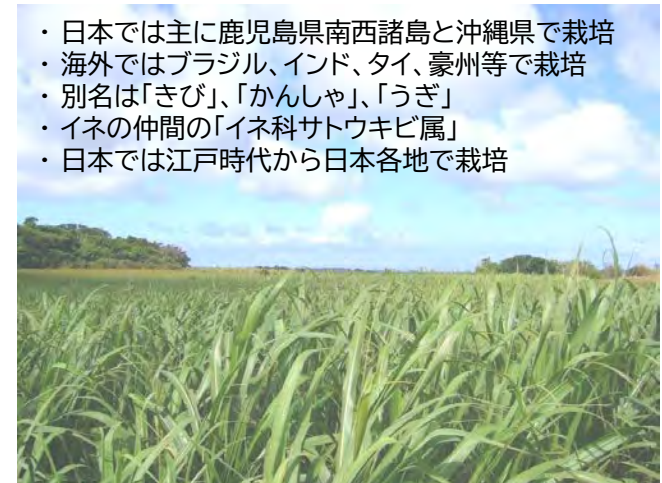
被害を受けたさとうきび



葉が再生中のさとうきび

◆ 南の島のさとうきび畑

- ・ 日本では主に鹿児島県南西諸島と沖縄県で栽培
- ・ 海外ではブラジル、インド、タイ、豪州等で栽培
- ・ 別名は「きび」、「かんしゃ」、「うぎ」
- ・ イネの仲間の「イネ科サトウキビ属」
- ・ 日本では江戸時代から日本各地で栽培

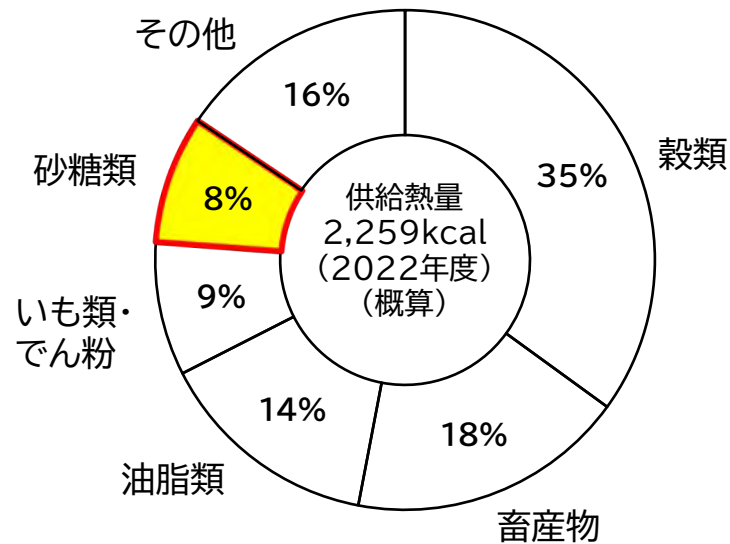


砂糖の食料消費上の役割

- 砂糖は、国民の摂取カロリー全体の約8%を占める品目。食料自給率への寄与度も高い。
- 砂糖は、脳とからだのエネルギー源となることから、国民にとって必要不可欠。

国民1人・1日当たりの供給熱量

砂糖の特徴



砂糖と健康な暮らし

1. 砂糖は太陽、水、空気、土の恵み

砂糖は、太陽エネルギーがつくるクリーン＆ナチュラルな甘味料です。

2. 砂糖の白さは天然の色

砂糖は、無色透明の結晶です。白く見えるのは、結晶が集まって光を乱反射するからで、雪が白く見えるのと同じことです。

3. 砂糖は脳とからだのエネルギー源

砂糖は、心臓や筋肉を動かし、脳を働かせるブドウ糖になります。

4. 砂糖は疲労回復に効果的

砂糖は、消化・吸収が速いので疲労回復に即効性があります。

5. 砂糖で生活にうらおいと安らぎを

砂糖は、心にしなやかさと安らぎを与え、ストレスを取り除き、情緒を安定させる効果があります。

6. 砂糖は料理をおいしくする演出家

砂糖はとっても働きもの。お料理に上手にいかしましょう。

食料自給率38%における品目別寄与度(2022年度)(概算)

米	砂糖類	畜産物	野菜	小麦	魚介類	いも類・でん粉	その他品目 (果実・大豆等)
21%	3%	3%	2%	2%	2%	2%	3%

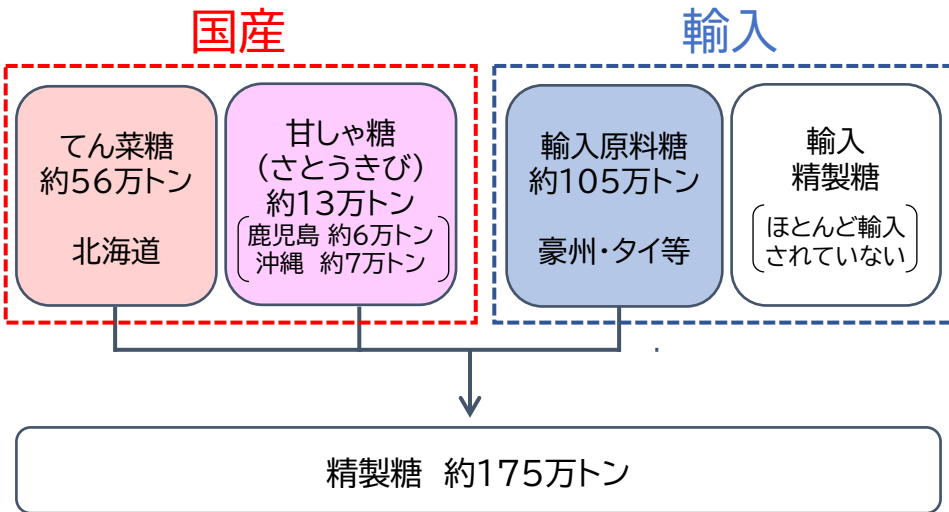
出典:農林水産省「食料需給表」

出典:精糖工業会「砂糖の本」

国内における砂糖の需給動向

- 砂糖の供給量は、国産糖が約70～80万トン、輸入原料糖(豪州、タイ等)が約100万トン。
- 砂糖の消費量は、消費者の低甘味嗜好等により減少傾向。さらに、新型コロナによる経済活動の停滞等の影響により大きく減少、直近では人流の増大により増加したものの、影響前の水準には戻っていない状況。

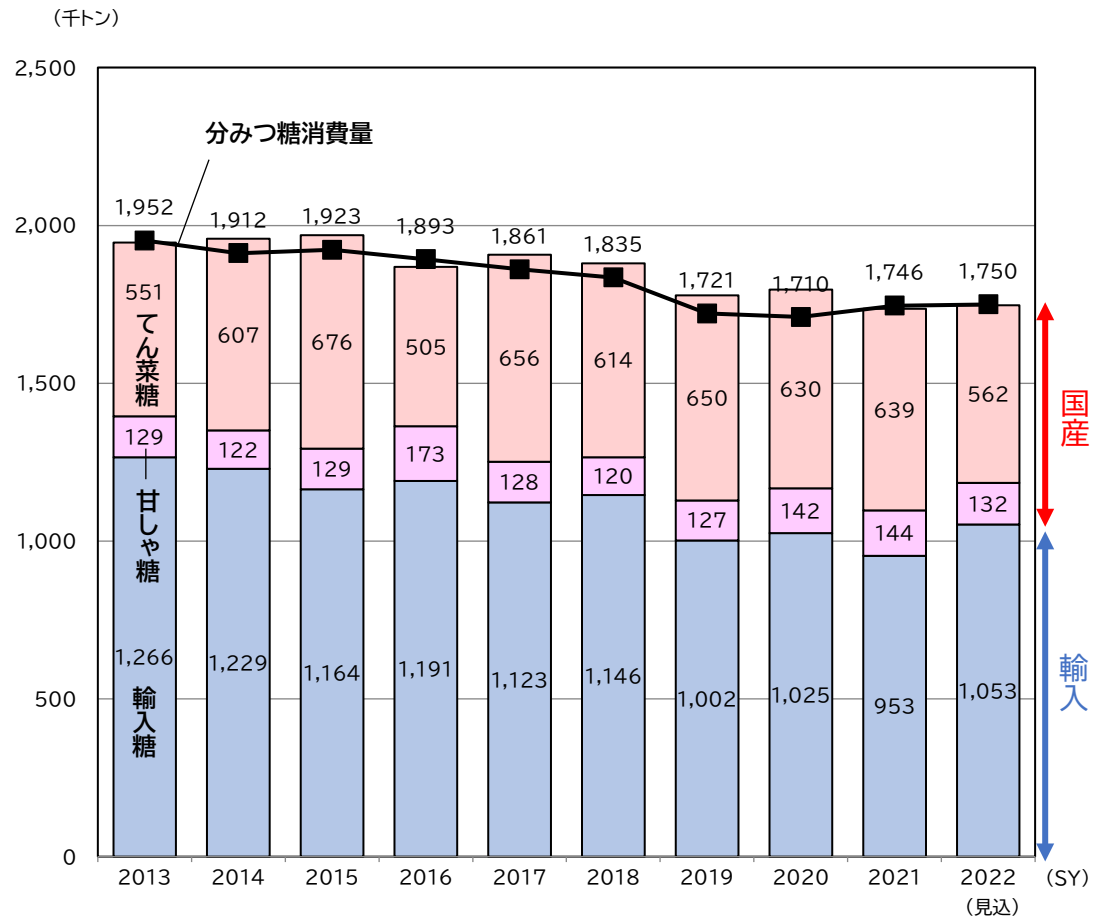
砂糖の生産・輸入の状況(2022SY)



出典:農林水産省「砂糖及び異性化糖の需給見通し」

注:甘しゃ糖、輸入原料糖の数量は精製糖ベース

砂糖の消費量と供給量の推移



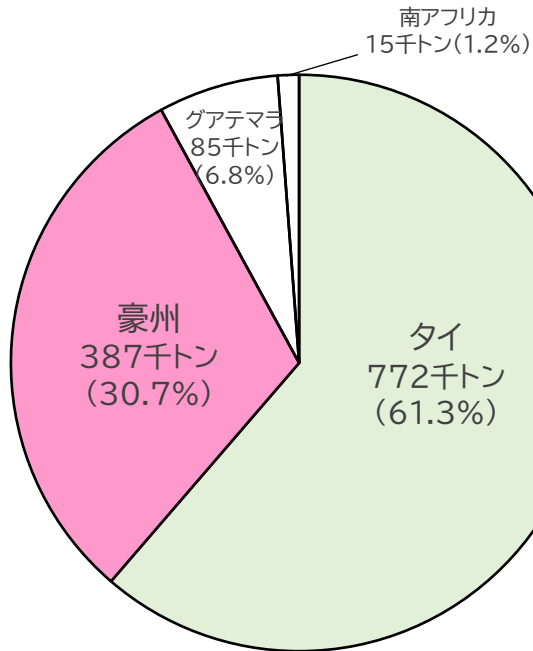
原料糖の輸入先の変化

- 2015年1月に発効した日豪EPAを契機として、原料糖の輸入量は、タイ産から豪州産へシフト。
- さらに、2018年12月に発効したCPTPP(TPP11)において、CPTPP加盟国(豪州)の優位性が高まったことから、タイ産が豪州産へとさらに置き換わり、直近では豪州産が9割を占める状況。

原料糖の輸入先国内訳の推移

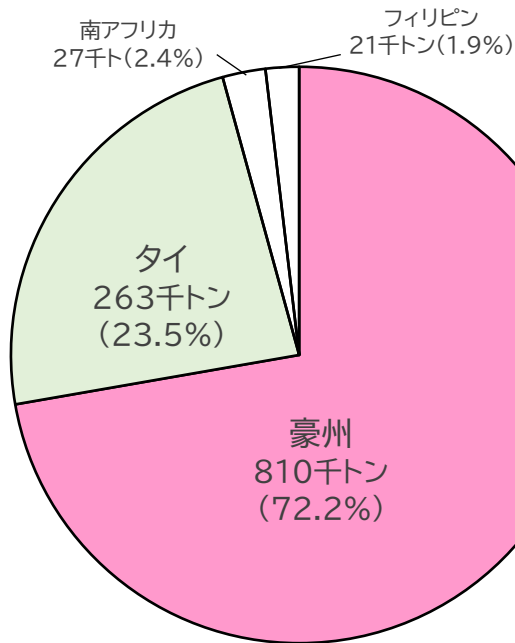
2014SY

(粗糖輸入量:1,259千トン)



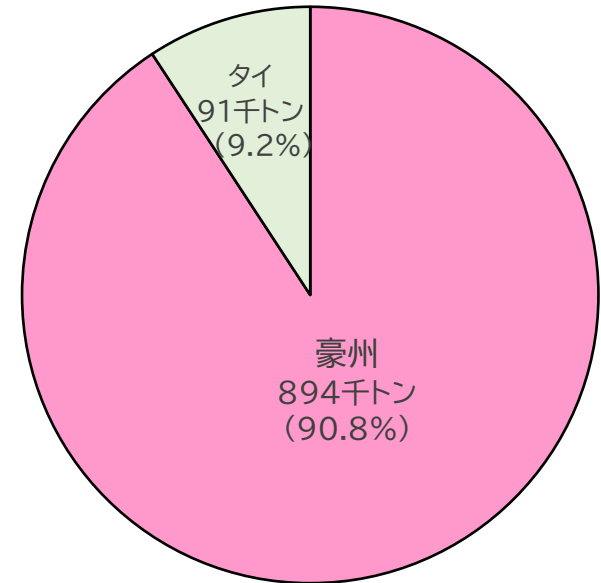
2017SY

(粗糖輸入量:1,122千トン)



2021SY

(粗糖輸入量:1,224千トン)



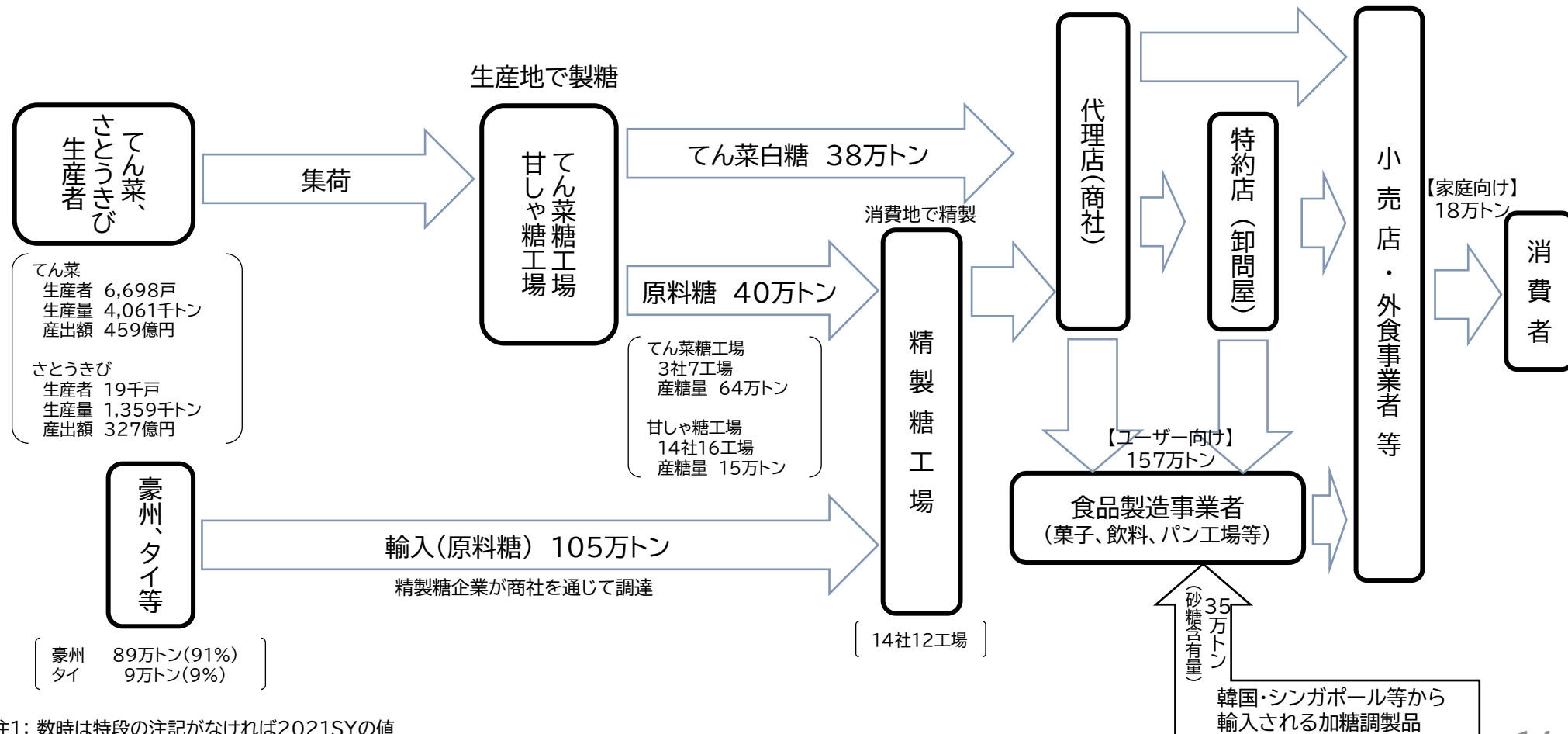
国内における砂糖の流通構造

- 国内で生産された「てん菜」「さとうきび」は、生産地にある工場で原料糖として製糖され、精製糖工場等に販売される。また、豪州・タイ等から輸入された原料糖は、商社を通じて精製糖企業が調達。
- 消費者までの流通は、①家庭向けは特約店を経由して小売店、②業務用は工場又は特約店等を経由して食品製造事業者等に販売され、砂糖を使用した製品が小売店・外食事業者等を通じて販売。

生産・輸入

加工

販売



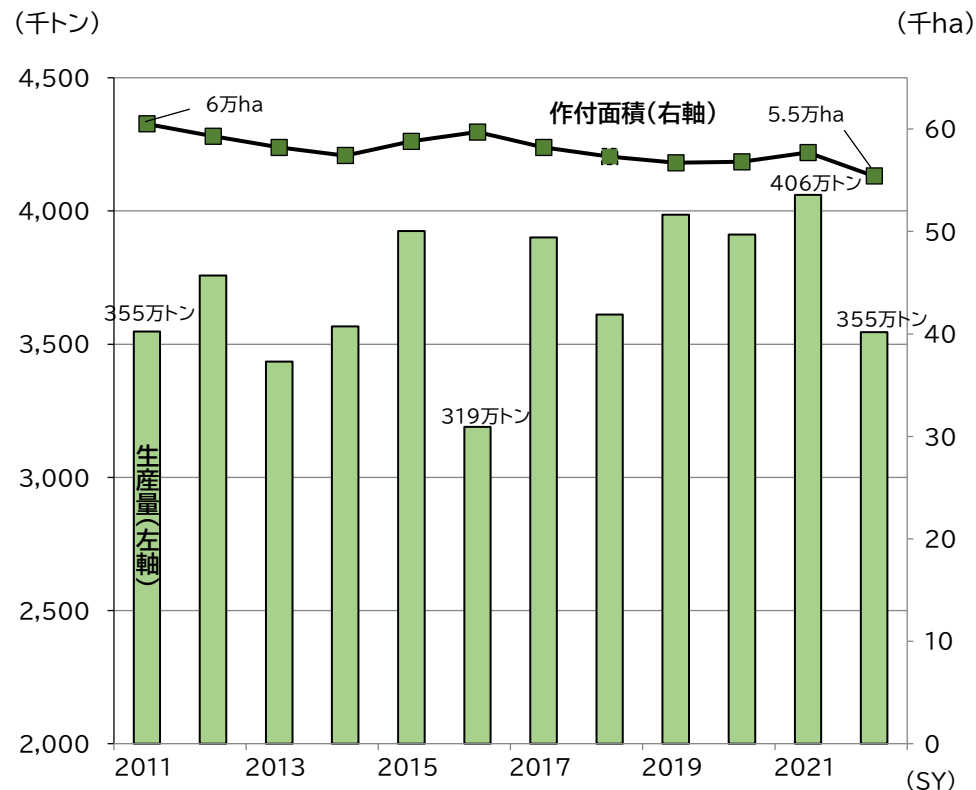
注1: 数時は特段の注記がなければ2021SYの値

注2: てん菜糖工場数は2023年1月末以降の数

てん菜の生産

- てん菜の作付面積は減少傾向であるが、生産量は350～400万トン前後で推移。
- 農家戸数の減少に応じて、一戸当たりの作付面積は拡大傾向で推移。

てん菜の生産量、作付面積の推移



出典：農林水産省「作物統計」、北海道調べ

てん菜の作付面積等の推移

	生産量 (千t)	作付面積 (ha)	単収 (kg/10a)	農家戸数 (戸)	1戸当たり 作付面積 (ha)
2011	3,547	60,500	5,860	8,214	7.4
2012	3,758	59,300	6,340	7,962	7.4
2013	3,435	58,200	5,900	7,668	7.6
2014	3,567	57,400	6,210	7,472	7.7
2015	3,925	58,800	6,680	7,352	8.0
2016	3,189	59,700	5,340	7,294	8.1
2017	3,901	58,200	6,700	7,161	8.1
2018	3,611	57,300	6,300	7,010	8.2
2019	3,986	56,700	7,030	6,856	8.2
2020	3,912	56,800	6,890	6,793	8.4
2021	4,061	57,700	7,040	6,698	8.6
2022	3,545	55,400	6,400	6,531	8.5

出典：農林水産省「作物統計」、北海道調べ

てん菜糖の製造工程と立地状況

- てん菜糖は、温水に浸して糖分を含む糖液とした上で、精製する工程により製造。
- てん菜糖工場は、てん菜の生産地が北海道であり、十勝・網走地域を中心に3社7工場が分布。
- 産糖量は50～65万トン程度で推移。

てん菜糖の製造工程

① 搬入

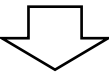


収穫したてん菜を、
葉を切り落として
受け入れ施設(ビート
ビン)に搬入

② 洗浄・裁断



洗浄し、細かく刻む



③ 滲出

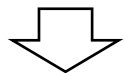


てん菜を70度前
後の温水に浸して
糖分を抽出

④ 濃縮・結晶化



糖液から不純物を
除去し濃縮した後、
砂糖を結晶化



⑤ 遠心分離



結晶と糖みつを
分離して結晶だ
けを取り出す

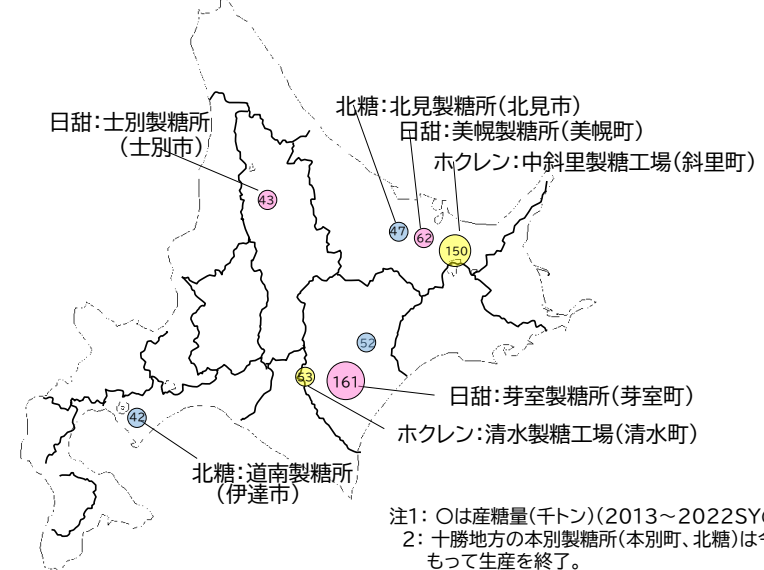


⑥ 包装・出荷

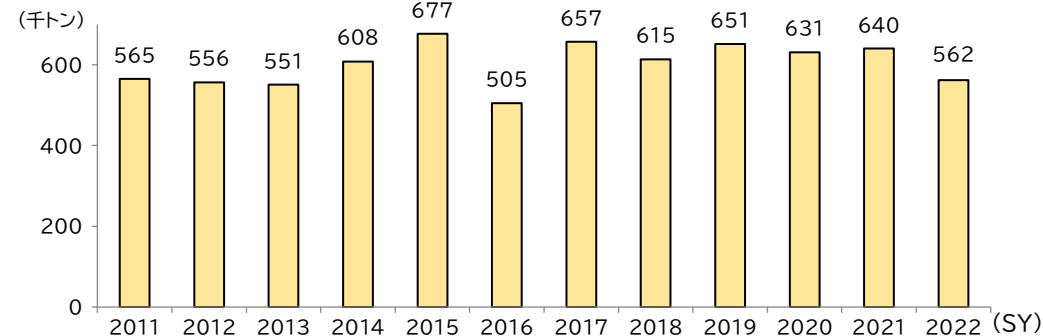


袋につめて出荷

てん菜糖工場の立地



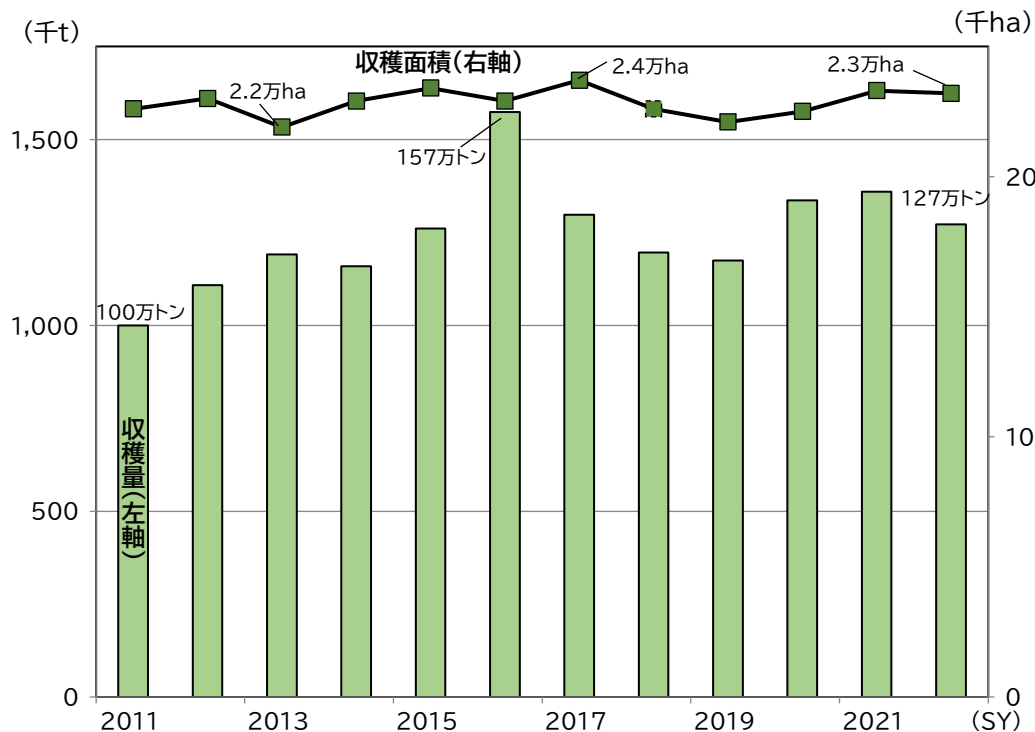
てん菜糖の産糖量の推移



さとうきびの生産

- さとうきびの収穫量は1,000～1,500千トン前後で推移。
- 農家戸数は減少傾向であるのに対し、一戸当たりの収穫面積は微増傾向にあるものの、依然として零細規模の生産者が多い状況。

さとうきびの収穫量、収穫面積



出典：農林水産省「作物統計」

さとうきびの収穫面積等の推移

	収穫量 (千t)	収穫面積 (ha)	単収 (kg/10a)	農家戸数 (千戸)	1戸当たり 収穫面積 (ha)
2011	1,000	22,600	4,420	26	0.9
2012	1,108	23,000	4,820	25	0.9
2013	1,191	21,900	5,440	24	0.9
2014	1,159	22,900	5,060	24	1
2015	1,260	23,400	5,380	23	1
2016	1,574	22,900	6,870	23	1
2017	1,297	23,700	5,470	22	1.1
2018	1,196	22,600	5,290	21	1.1
2019	1,174	22,100	5,310	20	1.1
2020	1,336	22,500	5,940	19	1.1
2021	1,359	23,300	5,830	19	1.2
2022	1,272	23,200	5,480	19	1.2

出典：農林水産省「作物統計」、沖縄県、鹿児島県調べ

甘しや糖の製造工程と立地状況

- さとうきび原料の甘しや糖は、圧搾機で絞った糖汁とした上で原料糖を製造。その後、精製糖工場へ運ばれ、分みつ糖に精製。
- 甘しや糖工場は、鹿児島県南西諸島及び沖縄県のほぼ1島に1工場、14社16工場が分布。
- 産糖量は10～15万トン程度で推移。

甘しや糖の製造工程

① 搬入



収穫した
さとうきびを
工場に搬入

② 裁断・圧搾

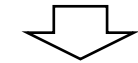


さとうきびを裁断機
で細かく砕く。
砕いたさとうきびを
圧搾機に投入し、
「糖汁」を搾汁

③ 濃縮・結晶化



さとうきびを
搾って出る汁を
煮詰め、煮汁の
中に含まれる
糖分を結晶化



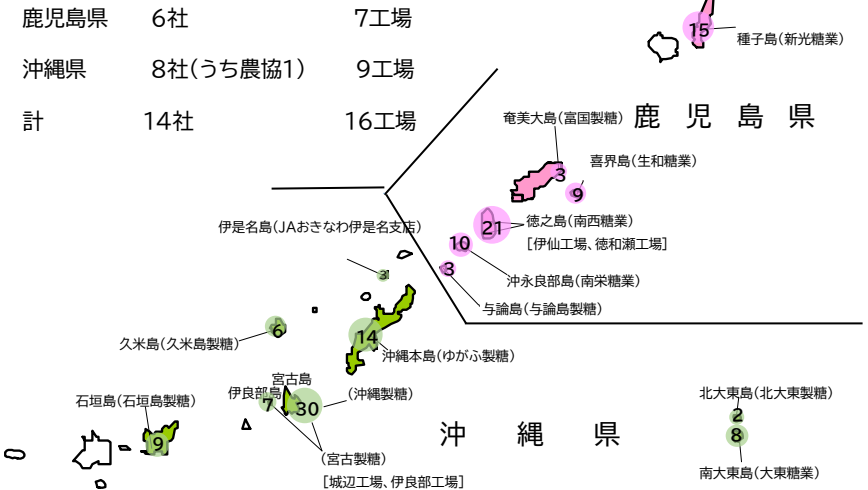
④ 遠心分離



糖と蜜に分離。
分離した糖が
「原料糖(分蜜
糖)」

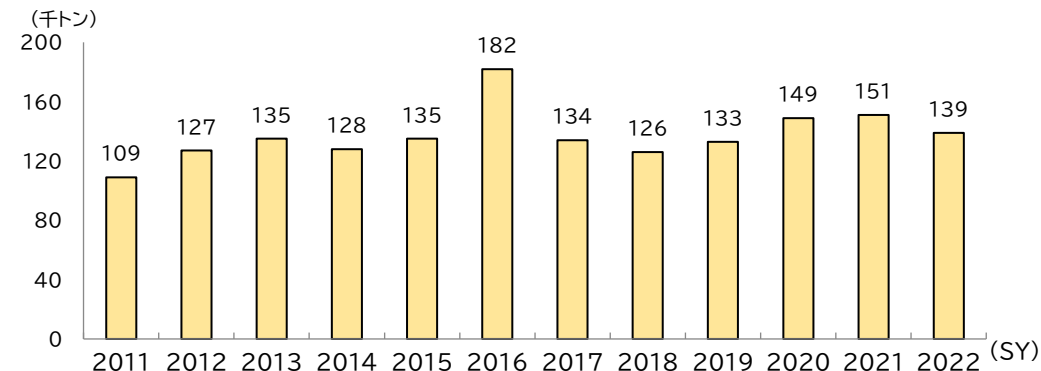
精製糖工場へ
(次ページ)

甘しや糖工場の立地



注: ○は産糖量(千トン)(2013~2022SYの10年平均)

甘しや糖の産糖量の推移



出典: 農林水産省調べ

精製糖工場の製造工程と立地状況

- 精製糖工場は、国内産糖や輸入原料糖を精糖し、最終製品である砂糖を製造・供給。
- 主に消費地近くの沿岸部に立地し、現在14社12工場が分布。

製造工程

① 原料糖の搬入



鹿児島・沖縄で製造された原料糖(さとうきび由来)や輸入原料糖等が精製糖工場に搬入

② かく拌



原料糖(粗糖)をマグマミキサー(加温ミキサー)で加温しながらかく拌

③ 洗糖自動分離機



少量の温水シャワーで結晶表面を洗浄し、蜜と結晶に分離

④ 真空結晶缶

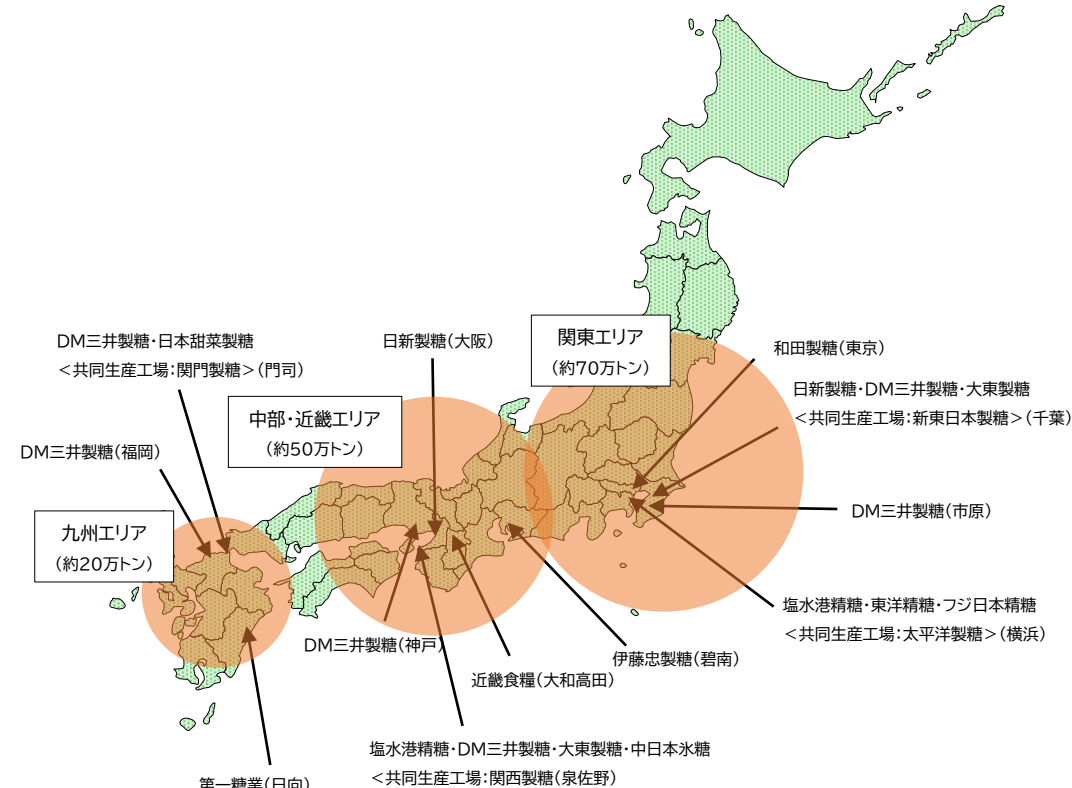


結晶を再度溶かして再結晶化し、乾燥、冷却後に用途別に包装して出荷

⑤ 包装出荷



精製糖工場の立地状況及びエリアごとの年間製造量



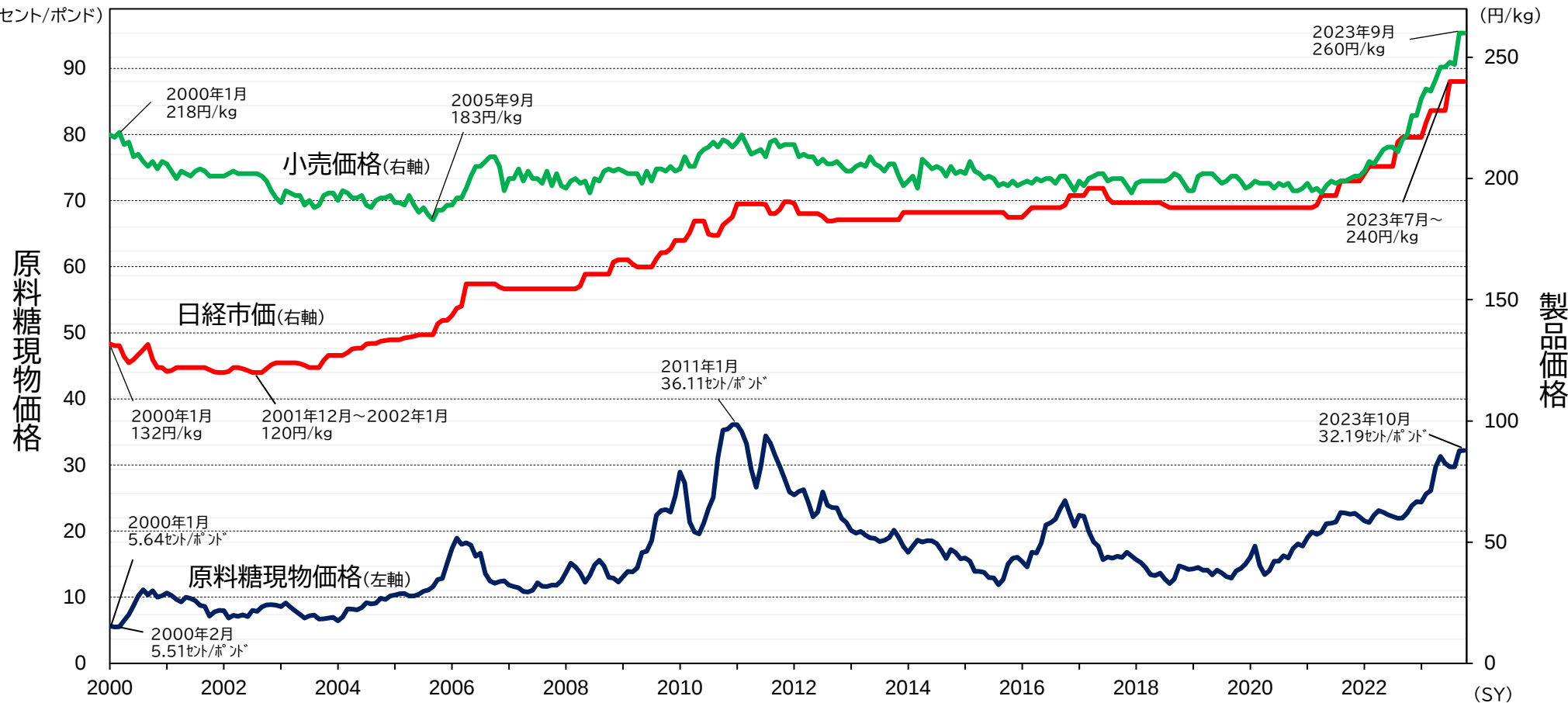
主な精製糖企業等の売上高(2023年3月期決算短信等の各社IR資料を基に作成)



ウェルネオシュガーの売上高は2022年3月期における日新製糖と伊藤忠精糖の売上高の合計

国内における砂糖価格の推移

- 砂糖価格としては、国内のマーケット指標として日経市価(卸売価格)が存在。日経市価は、砂糖の国際相場(ニューヨーク粗糖先物価格等)に連動して推移するが、実態としては、本国際相場の価格にアジア地域における需給ひっ迫を反映して賦課される割増料金を加えた価格(原料糖現物価格)に連動して推移。
- 2011年の国際価格の高騰以降、ブラジル、インドといった主要産地の増産による供給過剰の懸念から下落。その後、上下動は伴いつつも、ある程度落ち着いて推移。直近では、主要産地における天候不順等を受けた供給ひっ迫の懸念等から、国際相場は上昇を続けている。砂糖の日経市価は2021年3月に4年ぶりに値を上げた後、5回にわたって値上がりし、円安の影響も受けて2023年7月以降、240円/kgと歴史的にも高い水準で推移するとともに、同様に小売価格が上昇。



出典：農林水産省「砂糖及び異性化糖の需給見通し」

注1：小売価格は、総務省統計局調べ

2：日経市価は、日本経済新聞の市中相場(東京、上白、30kg大袋入り)の卸売価格(消費税抜き)で、各月の平均値

3：原料糖現物価格は、令和2年3月までは東京商品取引所調査の原料糖現物価格であり、令和2年4月以降は大阪堂島商品取引所 調査の原料糖現物価格(いずれも各月の平均値)

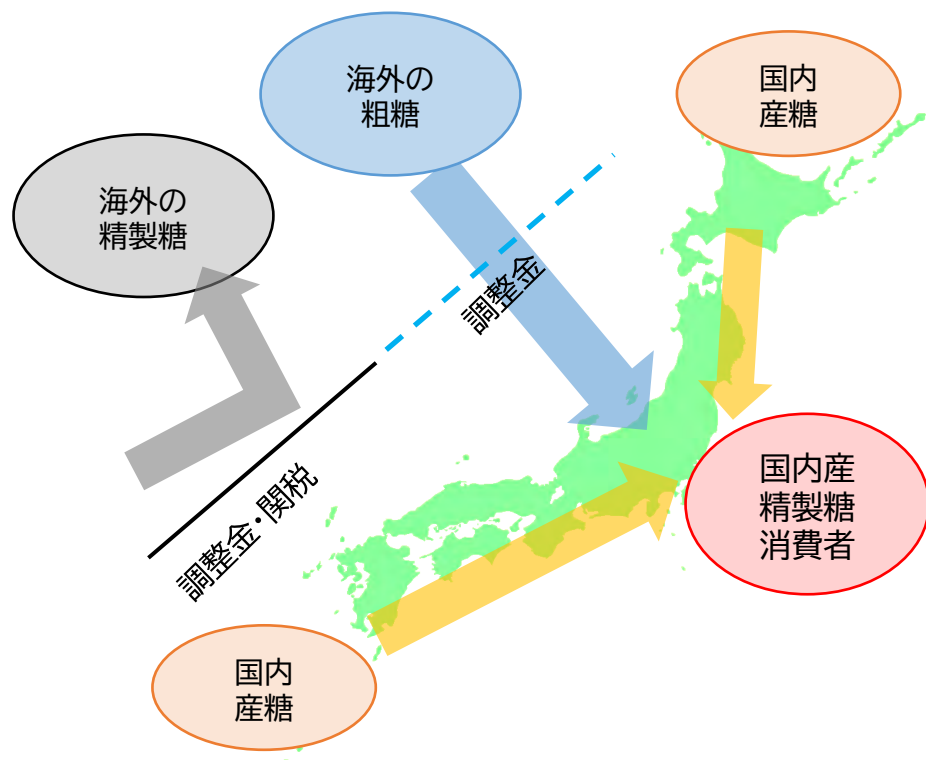
(参考)国内における砂糖制度の全体像

○ 糖価調整制度は、最終製品である精製糖の海外からの流入を高い水準の国境措置を通じて阻止する中で、沖縄・鹿児島・北海道の甘味資源作物や、これを原料とする国内産糖の製造事業、更に国内産糖と輸入原料糖を原料とする精製糖製造事業が成り立つようにすることで、砂糖の安定供給を確保していく仕組み。

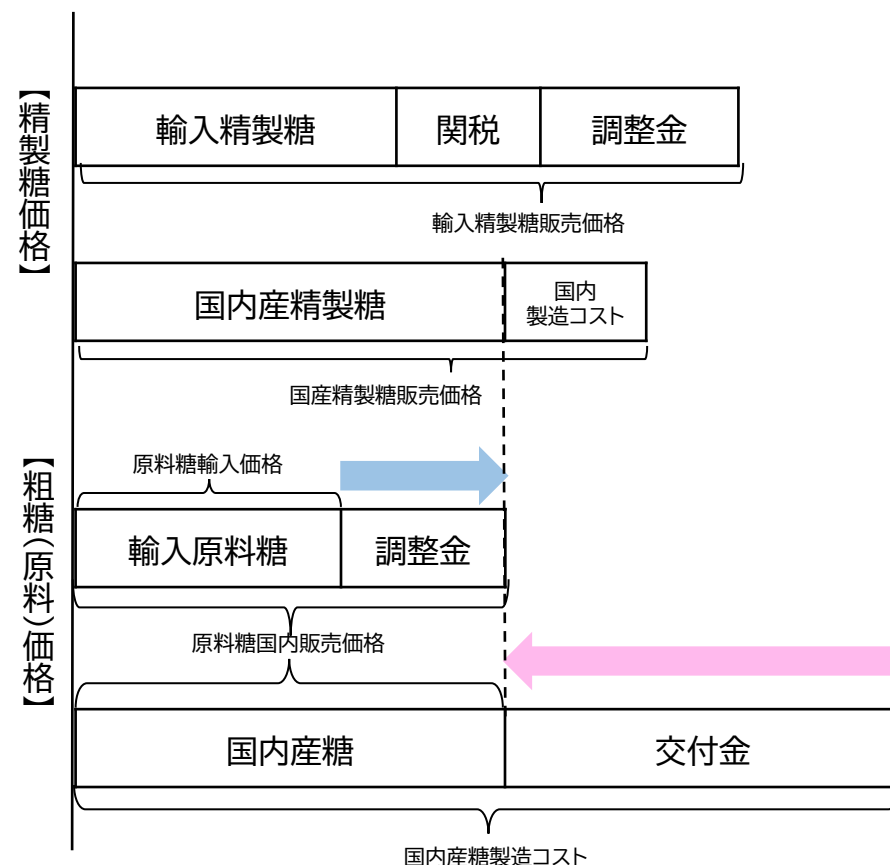
○具体的には、

- ①輸入精製糖には高い水準の関税・調整金を課す。このため、ほとんど輸入されない。
- ②(独)農畜産業振興機構(alic)は、原料糖を輸入する精製糖企業から調整金を徴収。これにより、輸入原料糖の価格が引き上げ。
- ③ alicは、甘味資源作物生産者・国内産糖製造事業者に対し、交付金を交付。これにより、国内産糖の価格を引き下げ。
- ④価格が引き上げられた輸入原料糖と引き下げられた国内産糖を原料として、精製糖企業は国内で精製糖を製造し、消費者に安定供給。

輸入精製糖、輸入原料糖、国内産糖の全体像



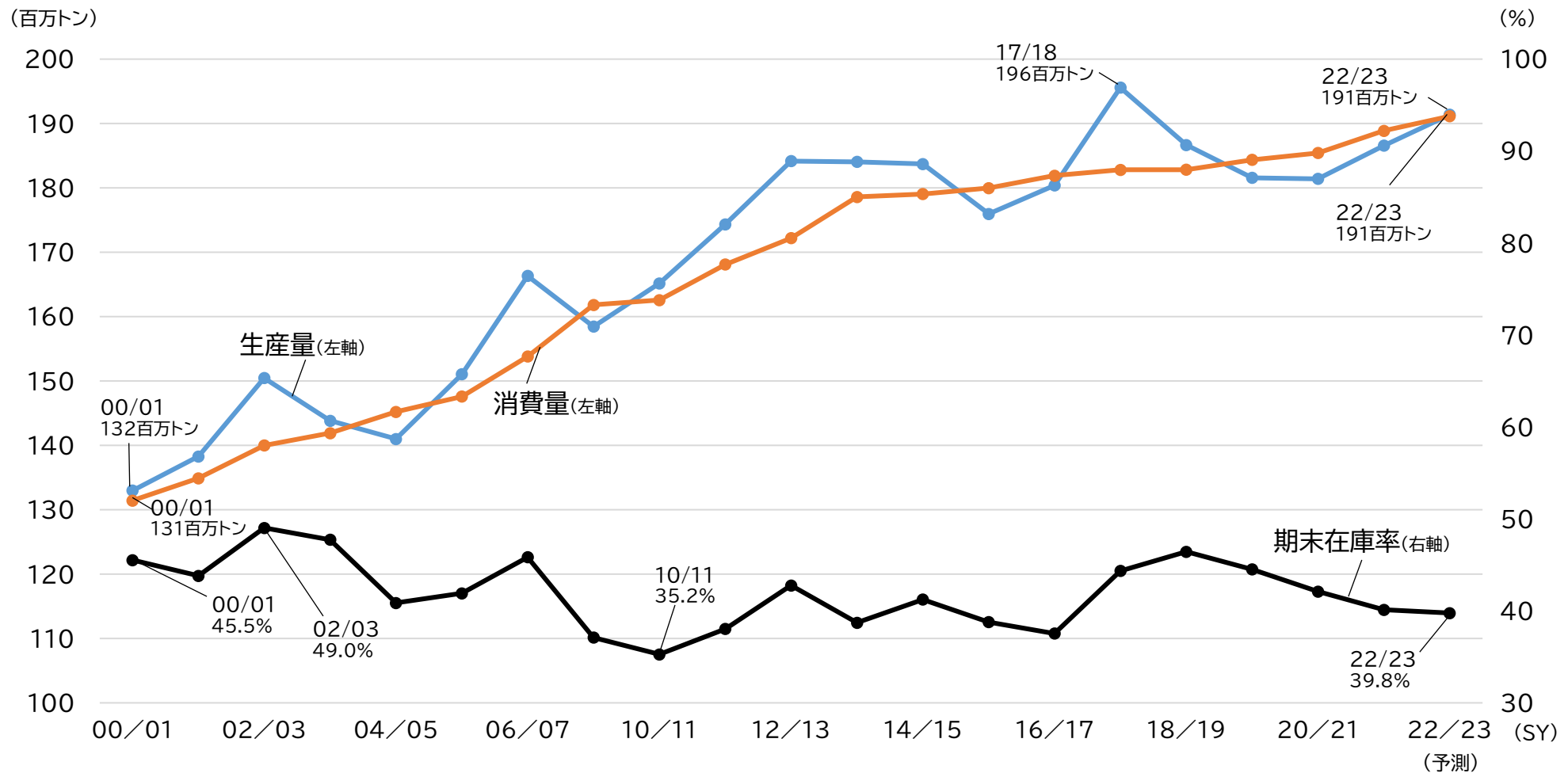
輸入精製糖、輸入原料糖、国内産糖の価格差の概念図



我が国と世界の砂糖をめぐる動向＜国際編(全体)＞

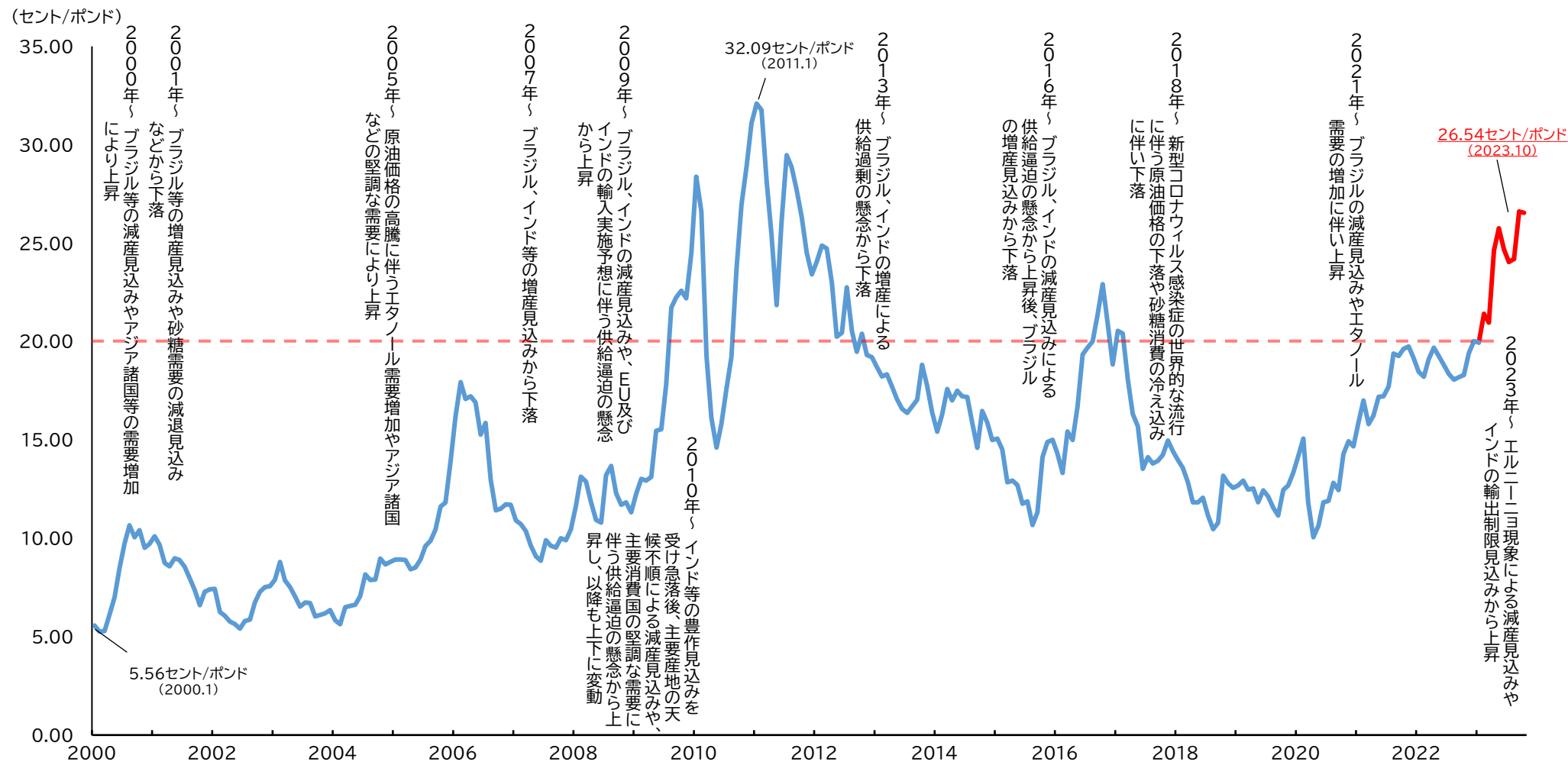
世界の砂糖需給の推移

- 砂糖の原料であるさとうきび等の生産は他の穀物と同様に、干ばつといった自然災害等により、その生産量が大きな影響を受ける。
- 砂糖の消費量は、アジアやアフリカ諸国等の経済発展等により増加傾向。
- 砂糖の期末在庫率は40～50%程度で推移しており、他の穀物(20～30%程度)に比べて高い水準。



砂糖の国際価格の推移(ニューヨーク粗糖先物価格の推移)

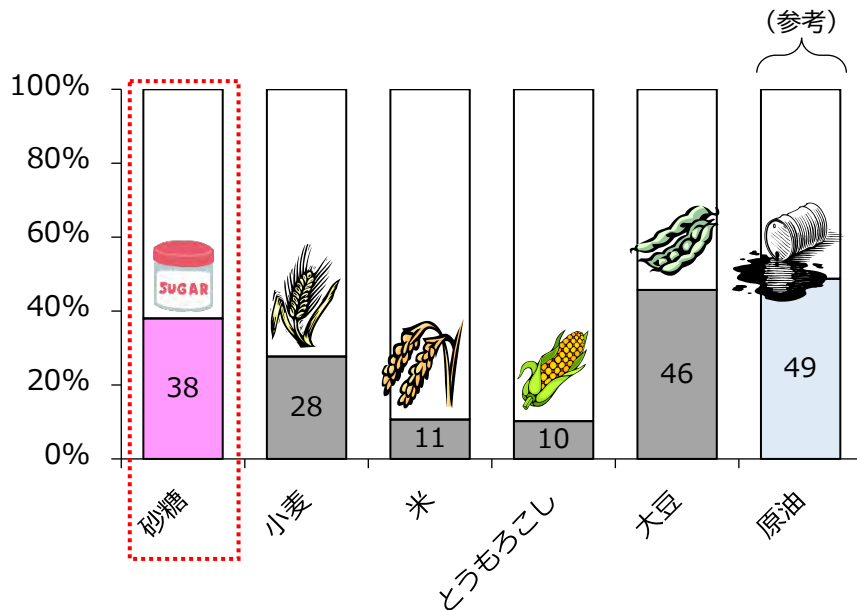
- 砂糖は主要生産国であるブラジルやインドの豊凶の見込み、砂糖及びさとうきび等を原料とするエタノールの需要の変動などに伴って国際価格が変動。
- 直近の動向では、エルニーニョ現象による減産見込みや、インドの輸出制限見込み等による供給ひっ迫の懸念などにより、砂糖相場は25～27セント/ポンド程度と歴史的に高い水準を推移。



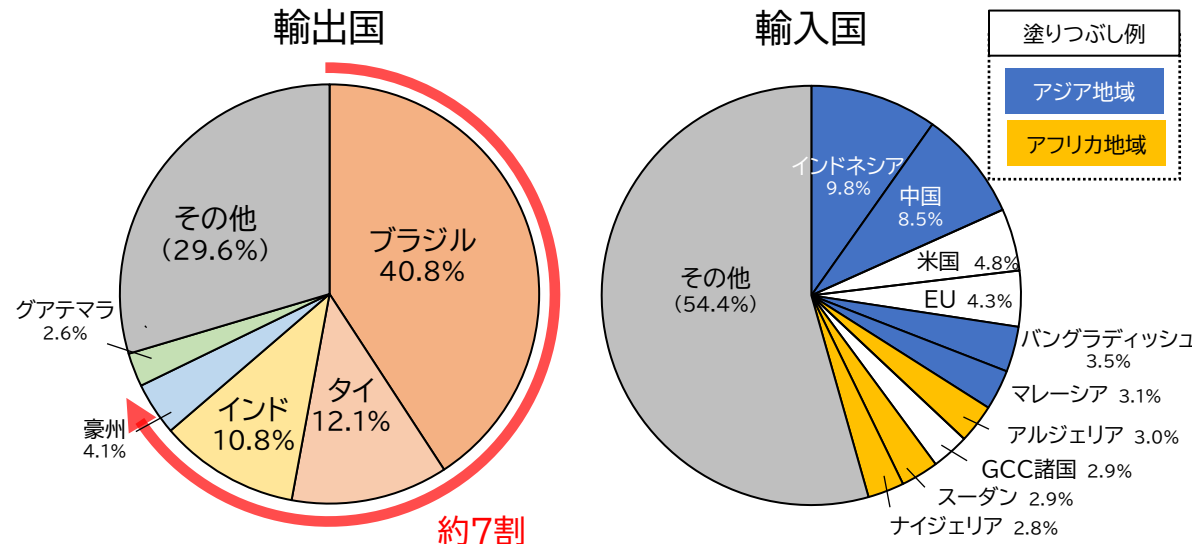
世界の砂糖貿易の特徴

- 砂糖の原料となるさとうきび等の原料作物は、商品作物としての性格を有し、生産量に占める輸出量の割合(貿易率)が他の穀物に比べて高い。
- 主要な輸出国はブラジルが4割を占め、上位4カ国(ブラジルのほか、タイ、インド及び豪州)で全体の約7割を占める。
- 輸入国は、人口が多く経済発展を続けているアジアやアフリカ諸国が中心。

砂糖と主な農作物の貿易率



輸出国・輸入国の内訳(2022SY)

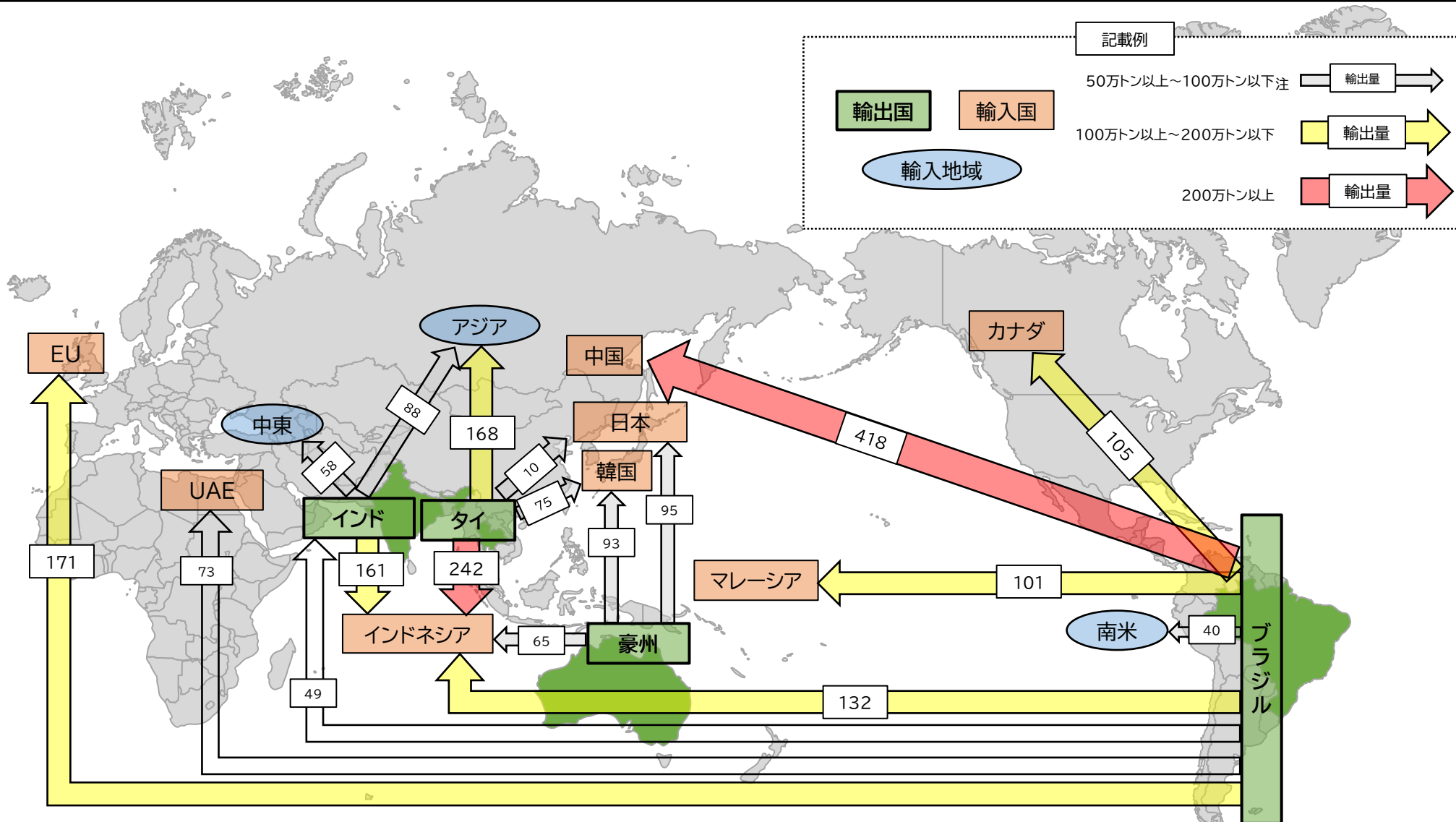


出典: USDA「PS&D」(2022/23の数値)、BP「Statistical Review of World Energy 2022」(2021年の数値)をもとに農林水産省作成
注: 貿易率=輸出量/生産量×100

出典: 農林水産省「砂糖及び異性化糖の需給見通し」

砂糖の貿易フロー

- 世界最大の輸出国であるブラジルは、世界各国に輸出。
- タイ、インド及び豪州は、アジア地域を中心に輸出。



出典: Global Trade Atlas(2022)をもとに農林水産省作成

注: 輸出量が50万トン以上の輸出先国及び地域を掲載。ただし、日本への輸出量はこの限りではない

我が国と世界の砂糖をめぐる動向＜国際編(地域別)＞

ブラジル

- 直近の分みつ糖の生産量は、4,100万トンと前年より増加する見込み。直近の消費量は、880万トンと前年より減少する見込み。分みつ糖の純輸出国であり、世界1位の輸出国。
- サンパウロ州で国内生産の半分以上(56%)を占め、その他ミナスジェライス州、マツトグロッソドスル州など周辺州を中心に生産。

ブラジルの分みつ糖の需給及び輸出入動向

(千トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024 (見通し)
生産量	30,300	42,050	35,450	38,050	41,000
消費量	10,650	10,150	9,500	9,500	8,800
輸入量	0	0	0	0	0
輸出量	19,280	32,150	25,950	28,200	32,500

出典:USDA「PS&D」(11月)(Market Year)

注:「PS&D」は毎月10日前後に公表。本表は11月9日に公表されたもの

ブラジルのさとうきび生産地域

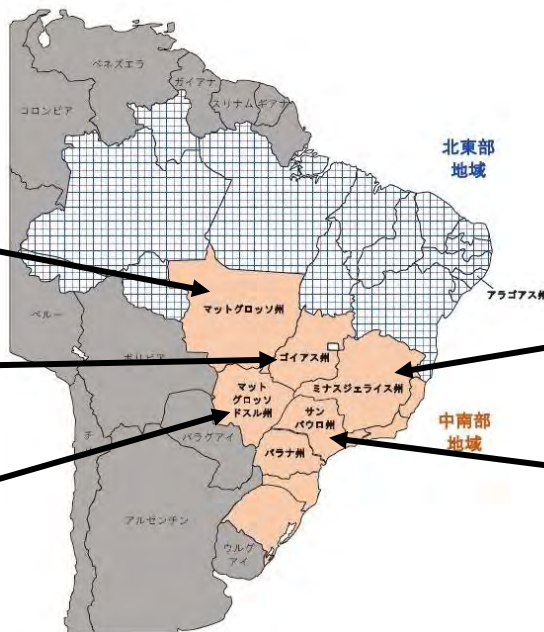
⑤ マツトグロッソ州 3%
(精製糖工場数12)

④ ゴイアス州 5%
(精製糖工場数39)

③ マツトグロッソドスル州 7%
(精製糖工場数22)

② ミナスジェライス州 12%
(精製糖工場数44)

① サンパウロ州 56%
(精製糖工場数170)



出典: USDA「Sugar-Semi Annual report」(2023)

NOVA CANA

タイ

- 直近の分みつ糖の生産量は、940万トンと前年より減少する見込み。直近の消費量は、321万トンと前年より微増の見込み。分みつ糖の純輸出国であり、世界2位の輸出国。
- 東北部、北部及び中部に生産地域が集中し、最大の生産地域の東北部では4割を占める状況。

タイの分みつ糖の需給及び輸出入動向

(千トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024 (見通し)
生産量	8,294	7,587	10,157	11,040	9,400
消費量	2,360	2,350	3,000	3,100	3,210
輸入量	0	0	0	0	0
輸出量	6,695	3,739	7,012	11,000	10,000

出典:USDA「PS&D」(11月)(Market Year)

注:「PS&D」は毎月10日前後に公表。本表は11月9日に公表されたもの

タイのさとうきび生産地域

③ 北部 精製糖工場数 8

パッチャブン 3.9%

カンペンペット 6.9%

ナコンサワン 6.9%

その他 5.8%

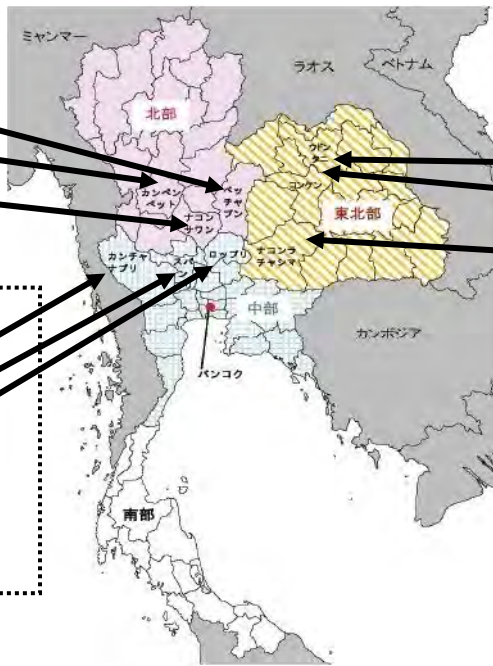
② 中部 精製糖工場数 22

カンチャナブリ 6.5%

スバンブリ 5.3%

ロッブリ 5.8%

その他 15.0%



① 東北部 精製糖工場数22

ウドンタニ 6.2%

コンケン 5.6%

ナコンラチャシマ 5.8%

その他 26.1%

インド

- 直近の分みつ糖の生産量は、3,600万トンと前年より増加する見込み。直近の消費量は、3,051万トンと微増の見込み。分みつ糖の輸出国であるため輸入は100万トンと少なく、世界3位の輸出国。
- 北部のウッタル・プラデーシュ州で国内生産の半分程度(44%)を占め、その他マハラシュトラ州など熱帯地域でも生産。

インドの分みつ糖の需給及び輸出入動向

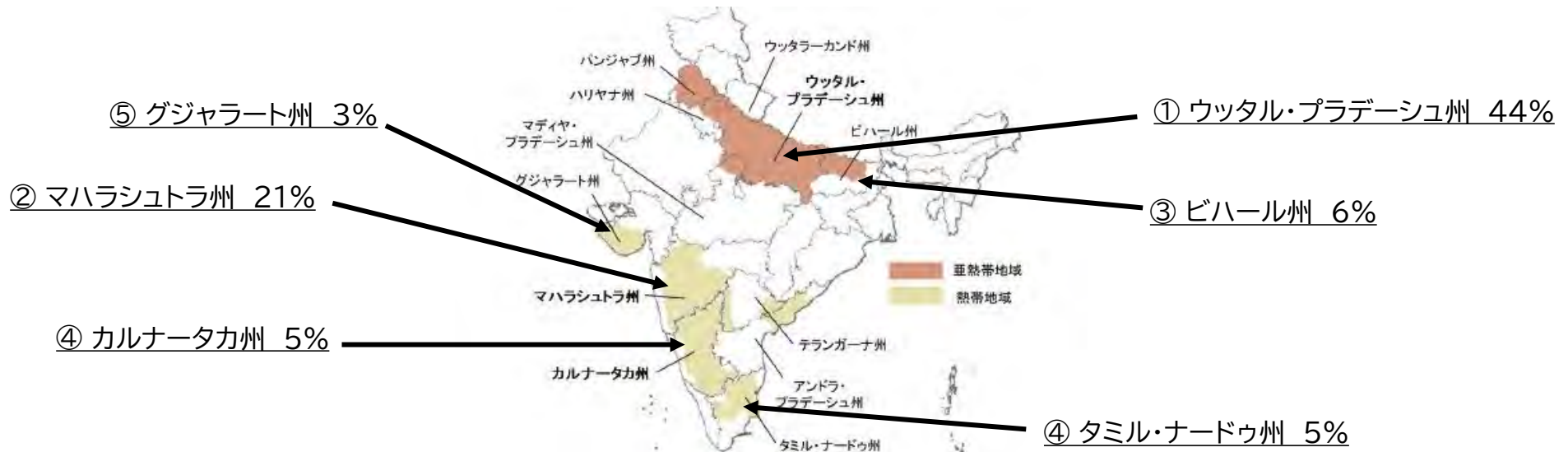
(千トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024 (見通し)
生産量	28,900	33,760	36,880	32,000	36,000
消費量	27,000	28,000	29,000	29,500	30,506
輸入量	900	1,245	340	1,000	1,000
輸出量	5,800	8,406	11,927	6,500	6,500

出典:USDA「PS&D」(11月)(Market Year)

注:「PS&D」は毎月10日前後に公表。本表は11月9日に公表されたもの

インドのさとうきび生産地域



出典: (独)農畜産業振興機構(atic)「インドにおける砂糖の生産動向および余剰在庫解消への取り組み」(2020)

indian.sugar.mills.association

豪州

- 直近の分みつ糖の生産量は、410万トンと前年より微減の見込み。直近の消費量は、90万トンと平年並みを見込む。輸入は1万トンしかなく、世界4位の輸出国。
- 生産地は、主にクイーンズランド州であり、そのうち、北部地域、ハーバート・バーデキン地域、中央部地域において、国内生産の85%を占める状況。

豪州の分みつ糖の需給及び輸出入動向

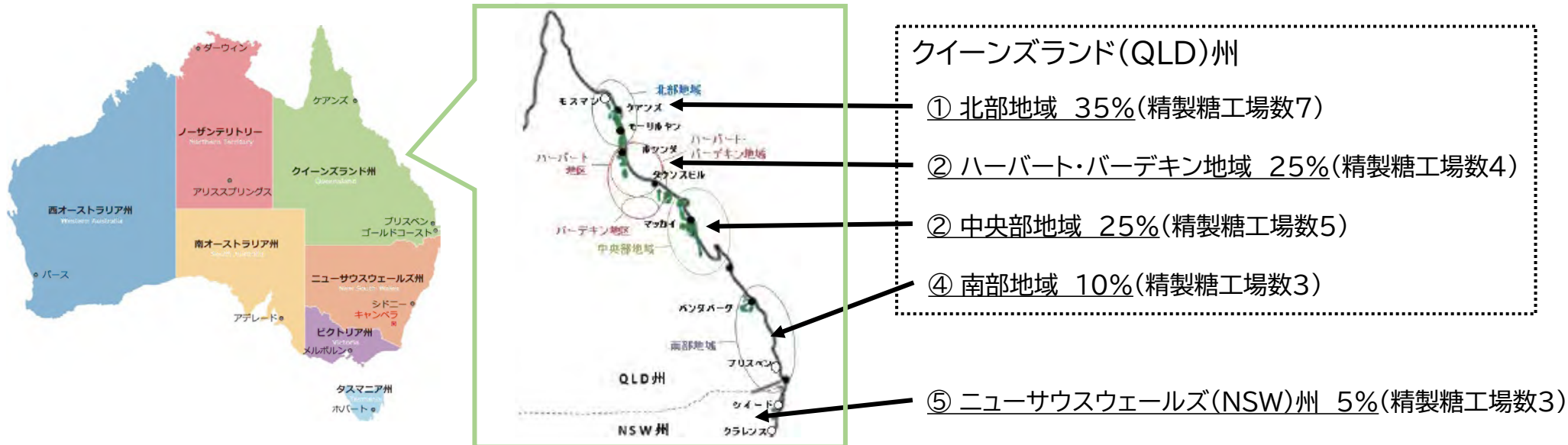
(千トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024 (見通し)
生産量	4,285	4,335	4,120	4,200	4,100
消費量	800	850	850	850	900
輸入量	16	12	9	10	10
輸出量	3,600	3,400	3,120	3,270	3,300

出典:USDA「PS&D」(11月)(Market Year)

注:「PS&D」は毎月10日前後に公表。本表は11月9日に公表されたもの

豪州のさとうきび生産地域



出典:(独)農畜産業振興機構(atic)「オーストラリアの砂糖産業の動向 ～拡大する砂糖生産～」(2017)

USDA「Sugar-Semi Annual report」(2023)

AUSTRALIAN Sugar Milling COUNCIL

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 11 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html